文化財保護課

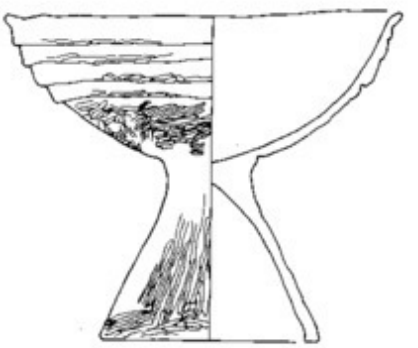
内堀遺跡群Ⅲ

―大室公園整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報―

1990

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

内堀遺跡群 Ⅲ



H―12号住居址出土土器

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

1．大室公園予定地全景

2．内堀遺跡群出土土器

例　　言

1．本書は大室公園整備事業に伴う内堀遺跡群の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本遺跡の略称は、１Ｅ11とする。

3．調査主体は前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。

4．発掘調査の要項は、次のとおりである。

調 査 場 所　前橋市西大室町地内

発掘調査期間　1989年５月８日～10月31日

整 理 期 間　1989年11月１日～1990年３月31日

調査担当者　関部守央（前橋市埋蔵文化財発掘調査団）

鈴木雅浩（　同　上　）

5．本書の編集、執筆は調査担当者の協議により分担して行った。

6．本書の作成にあたり、次ぎの方々の協力を得た。（順不同、敬称略）

井上　唯雄　柿沼　恵介　早田　勉　加部　二生　飯島　静男　東野　治之

7．遺物整理、図面作成、図面整理、遺物写真等は、担当者及び整理作業員が分担して行った。

8．整理作業及び本報告書作成にかかわった方々は次のとおりである。（順不同）

伊藤　孝子　佐藤　佳子　竹内るり子　橋本登代美　峰岸あや子　矢作　春江

吉田真理子

凡　　例

1．遺溝の略号は次の通りである。

H…土師器使用竪穴式住居址　M…古墳　D…土坑　K…窯址　W…溝状遺構

O…落ち込み（風倒木痕）　Z…石槨墓

2．挿図図版の縮尺はそれぞれの図に記した。主なものは次の通りである。

住居址…1／60　炉址…1／30　遺構全体図…1／200　1／500　遺物…1／3　1／1

3．遺構挿図中に記した断面基準線は標高で表した。

4．遺構挿図中に示したＮ方位は座標北である。

5．遺構挿図中のスクリーントーンの使用は次の通りである。

地山　テフラ層　焼土範囲　粘土

6．住居址遺物分布図における記号は次の通りである。

●…甕・壺　○…高坏・器台　▲…坏・埦

△…甑　■…石器・紡錘車　□…鉢・坩・台付甕

7．土色は「新版標準土色帖」に基づいている。

目　　次

口　絵（カラー）

1．大室公園予定地全景　　2．内堀遺跡群出土土器

例　言

凡　例

本　文

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1．立　　地 …… 1

2．周辺の遺跡 …… 3

Ⅲ　発掘調査の方法と経過

1．方　　法 …… 4

2．経　　過 …… 5

Ⅳ　基本層序 …… 7

Ⅴ　遺構と遺物

1．第Ⅰ調査区

（1）概　　観 …… 8

（2）各遺構と遺物 …… 8

2．第Ⅱ調査区

（1）概　　観 ……13

（2）各遺構と遺物 ……13

3．第Ⅲ調査区

（1）概　　観 ……26

（2）遺　　構 ……26

4．第Ⅳ調査区

（1）概　　観 ……27

（2）遺　　構 ……27

Ⅵ　まとめ ……28

図　版 ……31

写真図版

挿　図

Fig. 1 位置図 …… 2　Fig. 2 周辺の遺跡 …… 3　Fig. 3 調査工程表 …… 5

Fig. 4 調査区域図 … 6　Fig. 5 基本土層図 …… 7

図版目次

Fig. 6　第Ⅰ調査区全体図 …… 31
Fig. 7　第Ⅱ調査区全体図 …… 33
Fig. 8　第Ⅲ調査区全体図 …… 35
Fig. 9　第Ⅳ調査区全体図 …… 37
Fig.10　M－5号墳 …… 39
Fig.11　Z－1号石槨墓（1） …… 41
Fig.12　Z－1号石槨墓（2） …… 43
Fig.13　D-1号土坑　O-1号落ち込み … 44
Fig.14　H－1号住居址 …… 45
Fig.15　H－2号住居址 …… 46
Fig.16　H－3号住居址 …… 47
Fig.17　H－4・16号住居址 …… 48
Fig.18　H－5号住居址 …… 49
Fig.19　H－6号住居址 …… 51
Fig.20　H－8号住居址 …… 52
Fig.21　H－7号住居址 …… 53
Fig.22　H－9号住居址 …… 55
Fig.23　H－10号住居址 …… 56
Fig.24　H－11号住居址 …… 57
Fig.25　H－12号住居址 …… 58
Fig.26　H－13号住居址 …… 59
Fig.27　H－14号住居址 …… 60
Fig.28　H－15号住居址 …… 61
Fig.29　K－1・2号窯址 …… 62
Fig.30　D-1(Ⅱ区)　H-1号住居址(Ⅲ区) … 63
Fig.31　W－1号溝 …… 64
Fig.32　H-1・2・3 遺物出土状況 …… 65
Fig.33　H－5遺物出土状況（1） …… 66
Fig.34　H－5遺物出土状況（2） …… 67
Fig.35　H－5・6遺物出土状況 …… 68
Fig.36　H－6遺物出土状況 …… 69
Fig.37　H－7・8遺物出土状況 …… 70
Fig.38　H－10・11遺物出土状況 …… 71
Fig.39　H-12・13・14・15遺物出土状況… 72
Fig.40　H－1出土土器 …… 73
Fig.41　H－2・3出土土器 …… 74
Fig.42　H－5出土土器（1） …… 75
Fig.43　H－5出土土器（2） …… 76
Fig.44　H－5出土土器（3） …… 77
Fig.45　H－5・6出土土器 …… 78
Fig.46　H－6出土土器 …… 79
Fig.47　H－7・8出土土器 …… 80
Fig.48　H－8・10・11出土土器 …… 81
Fig.49　H－11・12出土土器 …… 82
Fig.50　H-13・14・15 D-1(Ⅱ区)埋土出土土器 … 83
Fig.51　埋土出土土器（1） …… 84
Fig.52　埋土出土土器（2） …… 85
Fig.53　埋土出土土器（3） …… 86
Fig.54　第Ⅰ調査区出土石器（1） … 87
Fig.55　第Ⅰ調査区出土石器（2） … 88
Fig.56　第Ⅰ調査区出土石器（3） … 89
Fig.57　第Ⅱ調査区出土石器 …… 90
Fig.58　大室古墳群 …… 91
Fig.59　昭和63・平成元年度住居址 … 92

写　真

PL. 1　第Ⅰ・Ⅱ調査区全景
PL. 2～8　遺　構
PL. 9～14　遺　物

Ⅰ　調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋市の「大室公園整備事業」に先立って行われたものである。この調査は昭和62年度に始まり今年度で３年目になるが、公園建設予定地の埋蔵文化財を調査し公園設計の基礎資料にすることが目的である。

初年度は、公園予定地約37ヘクタールのうち国指定史跡の古墳や山林、沼などを除く約20ヘクタールについて東西に10ｍ間隔でトレンチを入れる方法で確認調査を行い、予定地全域についての埋蔵文化財の分布状況を知ると共に、その結果を踏まえ昨年度には予定地の北西部約１ヘクタールについての発掘調査を実施し記録保存を行った。

また今年度は昨年度調査区の西側を中心に約1.26ヘクタールについて発掘調査を実施した。この部分は、地形的にみて将来必ず、何らかの施設が建設されると思われる場所であるということで、市長（公園緑地課担当）より発掘調査の依頼が教育長あて提出され、前橋市埋蔵文化財発掘調査団で調査を担当することとなった。

初年度以前の経緯については昭和62年度の確認調査報告書に詳しく述べられているので本書では省略する。

Ⅱ　遺跡の周辺環境

１．立　　地

内堀遺跡群の所在する前橋市西大室町は、市の東端に位置し国道50号線二之宮十字路より北へ1.5km、南に県道前橋・今井線、西に県道前橋・深津線に近接している所にある。東側は多田山と呼ばれる火山泥流による丘陵地形があり赤堀町との境となっている。また北に接する粕川村とは七ツ石とよばれる信仰の対象となっている巨石のある丘陵と、それに連なる丘陵地形を行政上の境界としている。

本遺跡の東側には五料山とよばれる自然丘陵があり、上縄引遺跡のある西側の台地と挟まれるように並んでいる。南側の後二子古墳のある位置も丘陵地形となっている。この西側にある小山はやはり、自然丘陵で、最近まで、砕石を切り出していた跡がある。この地区の丘陵地形の基盤はすべてこうした、輝石安山岩よりなる火山泥流によって形成されており、それらが露出しているのが、七ツ石や、石山観音、産泰神社裏の巨石などである。本遺跡と後二子古墳との間には小さな谷地状地形が入りかっては湧水による小河川があったものと推定される。又、現在も五料山と本調査区の間に小河川が流れており、それらを南側に堤を作る事によって江戸時代に堰止めて作られたのが、五料沼である。本遺跡のある丘陵の北側には現在水田地帯が広がり、当時も生産基盤となっていたと推定される。本遺跡地の標高は、130ｍ～137ｍである。

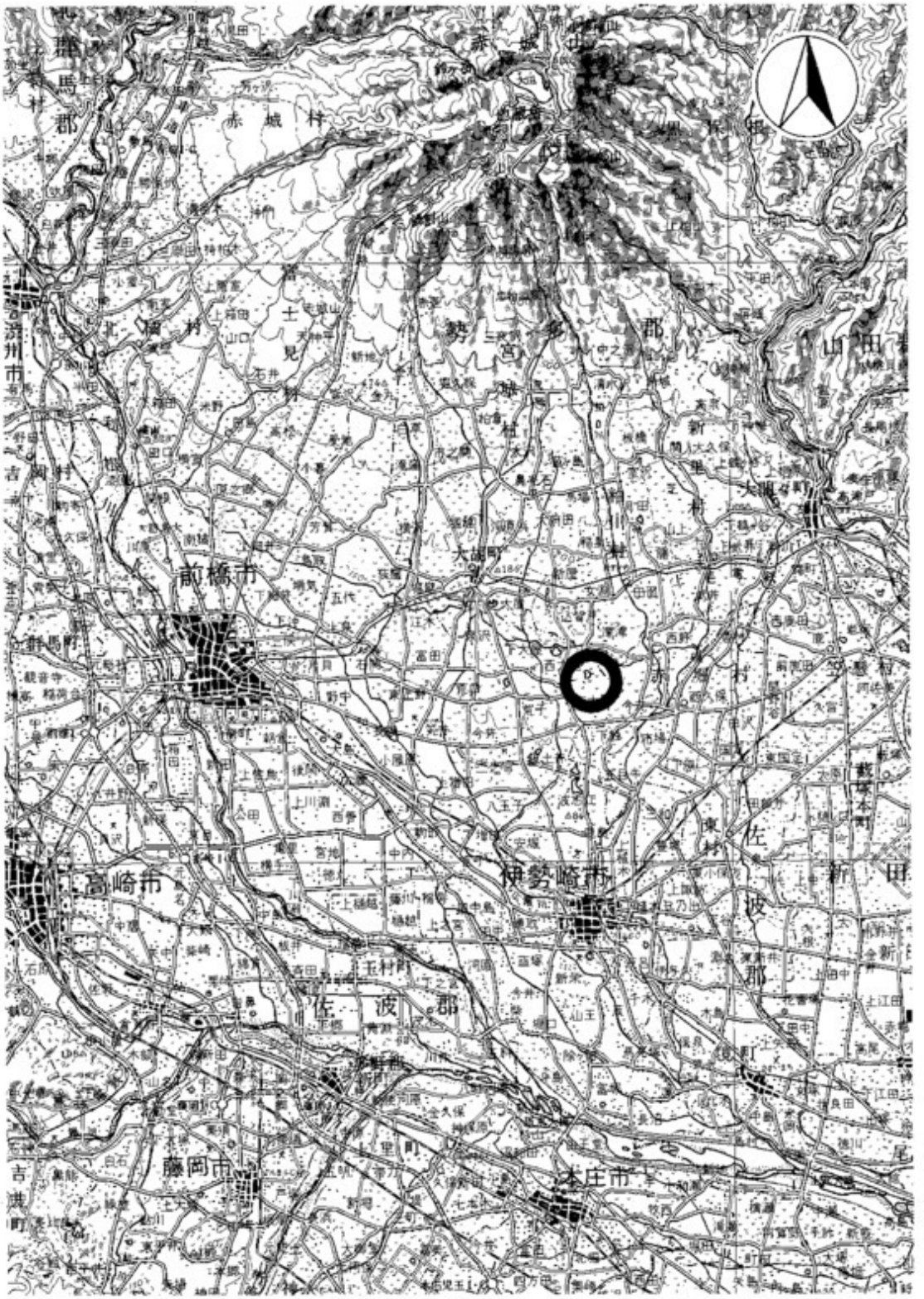
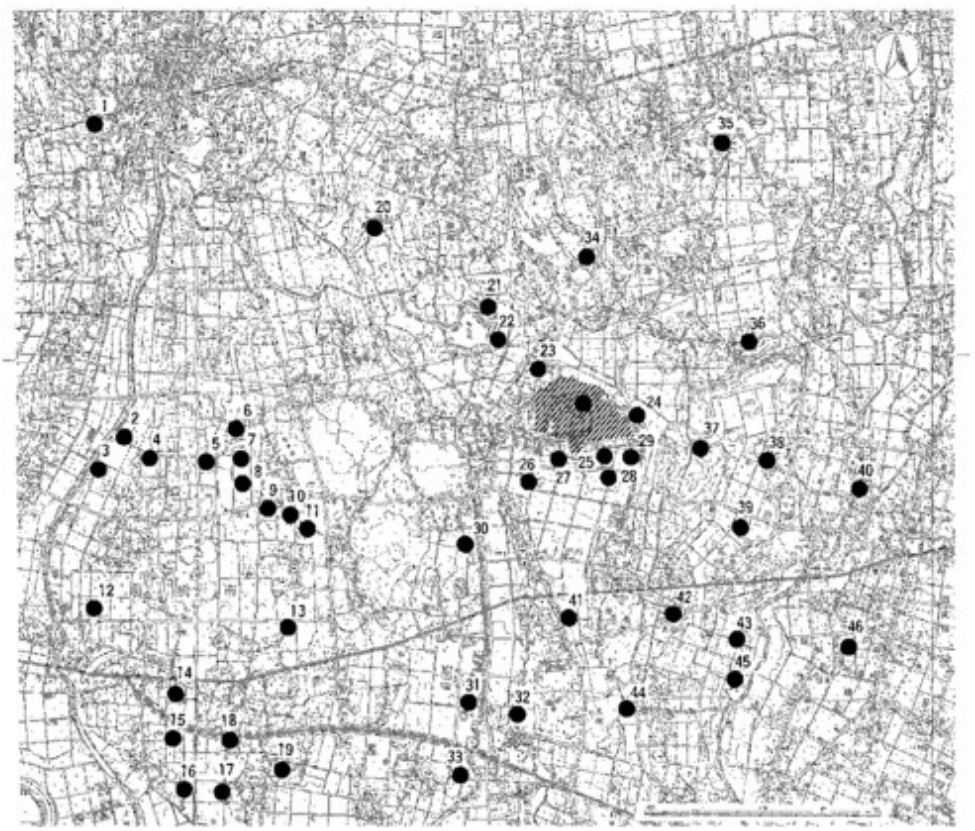


Fig. 1 内堀遺跡群の位置（丸印）

2．周　辺　遺　跡

内堀遺跡群のある荒砥地区は自然に恵まれた風光明媚な所であると共に、三二子古墳をはじめとした周知の遺跡が存在する考古学上にも重要な地域である。そこで本遺跡の遺構・遺物を理解するために周辺の歴史的環境をみてみたい。まず荒砥川流域の洪積台地先端部を中心に荒砥北三木堂遺跡、また宮川の沖積地に臨む柳久保遺跡群において尖頭器、細石器等、旧石器文化の遺物が出土している。続く縄文時代には草創期の遺跡として爪形文土器が検出された下触牛伏遺跡がある。二本松遺跡からは田戸下層期の土器が出土している。前期の遺跡は荒砥二之堰遺跡、荒砥



1．天神風呂遺跡　2．荒砥諏訪西遺跡　3．荒砥宮田遺跡　4．荒砥諏訪遺跡　5．柳久保遺跡　6．荒子小学校校庭遺跡　7．大久保遺跡　8．蒲無遺跡　9．荒砥下押切遺跡　10．荒砥中屋敷遺跡　11．荒砥保育所遺跡　12．荒砥北三木堂遺跡　13．荒砥上之坊遺跡　14．荒砥洗橋遺跡　15．宮田遺跡　16．宮原遺跡　17．島原遺跡　18．荒砥天之宮遺跡　19．青柳遺跡　20．横堀遺跡　21．七ツ石遺跡　22．北山遺跡　23．上縄引遺跡　24．久保哲戸遺跡　25．柳木遺跡　26．大室小学校校庭遺跡　27．荒砥上諏訪遺跡　28．荒砥五反田遺跡　29．荒砥上川久保遺跡　30．荒砥東原遺跡　31．二本松遺跡　32．牛触遺跡　33．二之堰遺跡　34．西原遺跡　35．洪沢遺跡　36．稲荷山遺跡　37．多田山遺跡　38．多田山遺跡　39．柳田遺跡　40．御伊勢取遺跡　41．石山遺跡　42．向井遺跡　43．今井南原遺跡　44．中畑遺跡　45．河上遺跡　46．市場寺南遺跡

大室公園予定地

Fig. 2 周辺の遺跡

上ノ坊遺跡、荒砥上諏訪遺跡など検出例は多い。中期後半の遺跡も多く確認されているがいずれも５～10軒の中・小規模の集落にとどまっており赤城村三原田遺跡、赤堀町曲沢遺跡のような大規模遺跡の存在は知られていない。弥生時代の遺跡は水田耕作に適した沖積地を臨む台地や微高地に立地しており中期後半から後期の小規模集落が島原・荒砥上川久保遺跡などで見られる。古墳時代前期の遺跡としては本遺跡の北西に隣接する上縄引遺跡をはじめ、北山・七ツ石・久保沓戸・梅木遺跡などがある。この時期の遺跡は住居出土の土器を見る限り複雑な様相を呈しており、弥生時代後期の樽・赤井戸式土器はこの時期まで残存し土師器と共伴する。その内浅間Ｃ軽石降下後、及びＦＡ降下前の各遺跡の住居は本年度内堀遺跡群の集落に時期的に対応するものであると考えられる。５世紀後半から６世紀代に入ると強大な支配者の存在を暗示する三二子古墳が築造されこの地区が当時の中心的様相を呈するようになる。梅木遺跡で検出された首長層の居宅は三二子古墳と何らかの関係があると推定される。６世紀後半から７世紀代に入ると小円墳の群集化が進み、１～３基程度の散在する小円墳も出現するようになり、支配階層の多層化と系列化が進んだことを意味している。奈良・平安時代には居住域が台地全体に広がり水田開発が進み荒砥諏訪西遺跡では微高地まで水田化している。また12世紀の中頃、開削されたとされる女堀の遺構も残存している。中世以降の城郭としては大室城、元大室城、今井城、赤石城などがあり、荒砥北三木堂遺跡などでは多数の墓坑が調査されている。また、井戸や溝など近世の遺構も多くの遺跡で確認されている。

Ⅲ　発掘調査の方法と経過

１．方　　法

本年度の発掘調査は対象地域が広範囲に及ぶとともに、多地点で同時に調査を進行させる必要が生じたため遺跡全体をⅠ～Ⅳまでの４つの調査区にわけて呼称し、それぞれの区ごとに遺構の命名・呼称を行った。調査の実施にあたっては各調査区内に座標杭を設定し、国家座標に位置づけた。また第Ⅰ調査区、第Ⅱ調査区については４ｍの基盤の目のように区切るグリッドを設定した。各調査区とも掘削用重機で表土を上層より二段階に分けて最終的にはソフトローム上面まで除去し、それぞれの段階で遺構を確認し調査を進めた。遺構の平面図、地層断面図は原則的に１／20で平板・遣り方測量で実施し、必要に応じて縮尺を変えた。遺物については平面分布図を作成し、遺物台帳に記録を採りながら収納した。包含層の遺物収納はグリッド単位で行った。また写真による記録も併せて行った。なお、第Ⅰ調査区においては縄文時代の遺物包含層が存在する可能性もあることから手堀りによる試掘調査を18カ所で実施した。

2．経　　過

本発掘調査は、平成元年４月より現地調査、発掘事務手続き、公園緑地課との事前協議などを行い、４月27日に発掘調査の委託契約を締結してから現場事務所の建設や発掘調査用具の搬入など本格的な準備が始まった。５月８日から第Ⅰ調査区(9,753㎡)のうち小麦の収穫に影響のない2,000㎡についての調査を開始し、収穫後の７月４日より直ちに残りの部分の調査に着手し８月25日に終了した。続いて９月に入り公園緑地課と協議の結果、調査区を追加することとなり継続して第Ⅱ～第Ⅳ調査区についての発掘調査を実施した。調査は昨年度調査区の北東に位置する第Ⅱ調査区(2,000㎡) から開始し、並行する形で後二子古墳の北側第Ⅲ調査区 (200㎡)、中二子古墳の北側第Ⅳ調査区(705㎡)へと進んだ。特に第Ⅱ調査区では遺構検出量が多く、また雷雨等による被害も重なり作業の進捗に影響を及ぼしたが10月31日を以て総ての調査を終了した。調査面積は12,658㎡に及んだ。なお発掘調査は昭和63年５月８日から10月末日まで行い、11月１日から平成２年３月末日まで遺物整理作業と報告書作成を行った。

発掘調査全体の流れについての詳細は発掘調査工程表に示した通りである。

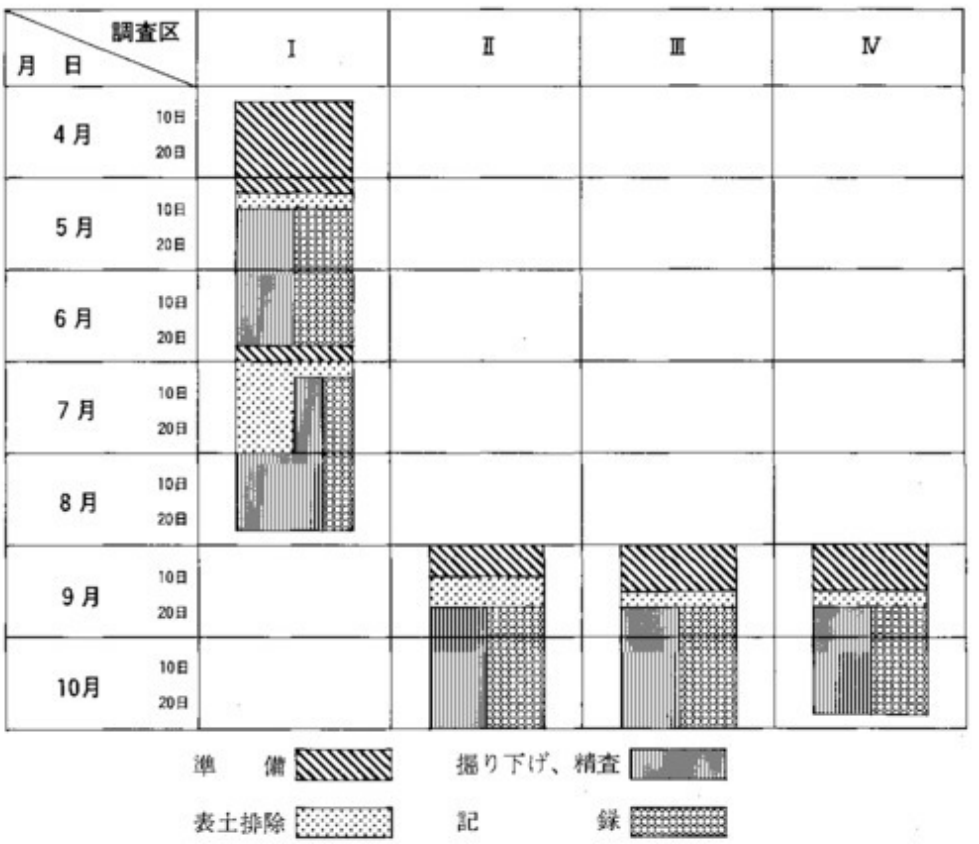


Fig. 3 行程表

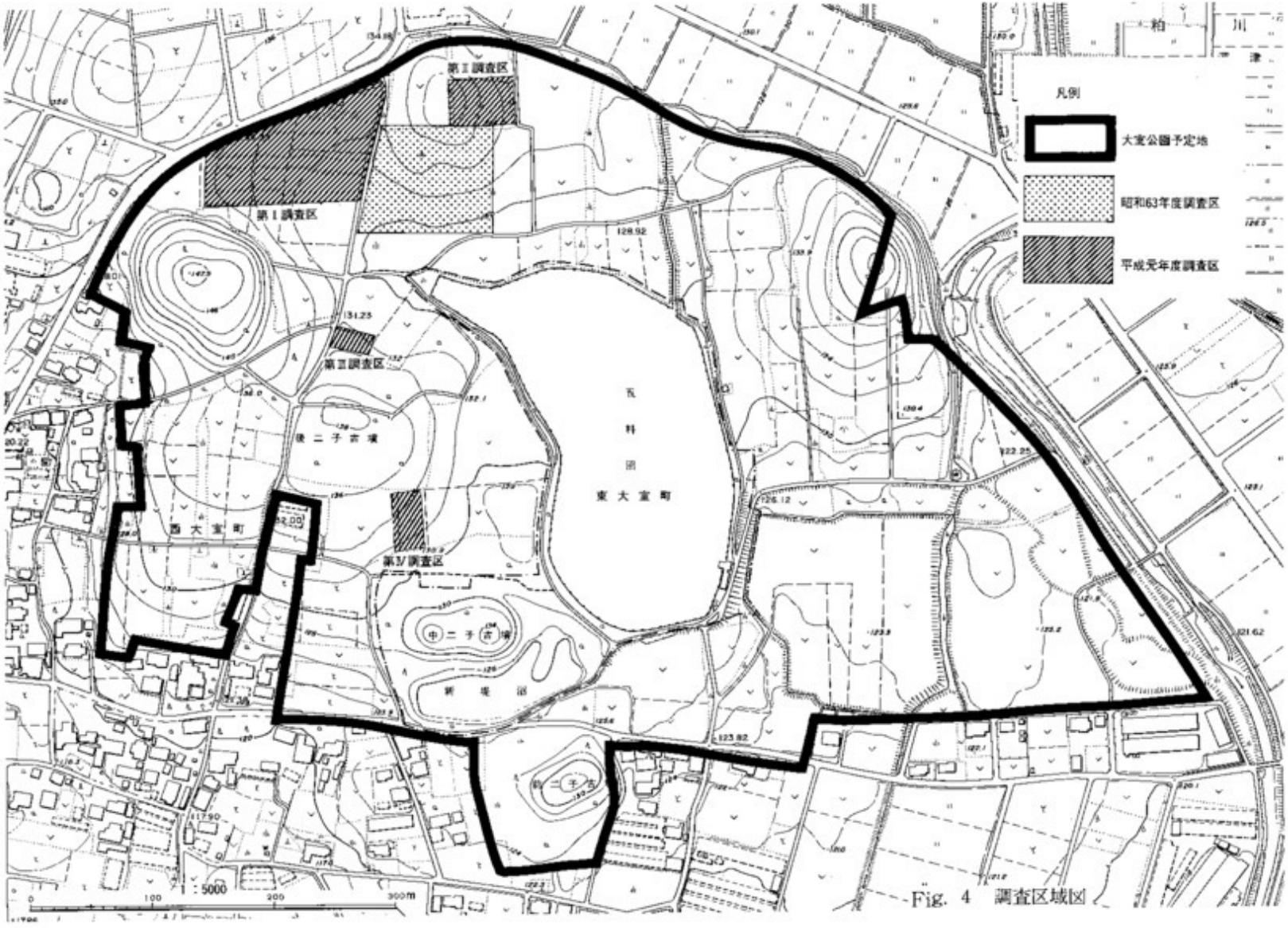

凡例
大宝公園予定地
昭和63年度調査区
平成元年度調査区
第Ⅰ調査区
第Ⅱ調査区
第Ⅲ調査区
第Ⅳ調査区
後二子古墳
西大宝町
東大宝町
中二子古墳
新堤沼
1:5000
0
100
200
300m

Fig. 4 調査区域図

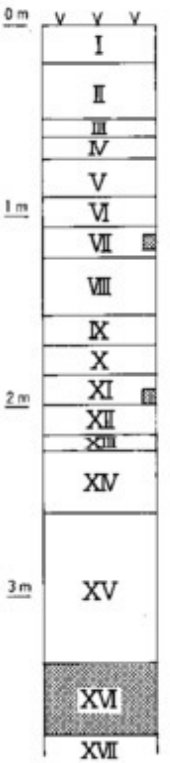
Ⅳ 基 本 層 序

1．第Ⅰ～Ⅲ調査区

Ⅰ層　暗褐色土層　<10YR3/4>　現在の耕作土層であり、軽石などの粗砂を含む。粘性、しまりともになし。
Ⅱ層　暗褐色土層　<10YR3/3>　旧耕作土で、　層と同様粗砂を含み、粘性、しまりともにない。細砂。
Ⅲ層　灰黄色土層　<2.5YR6/2>　浅間B軽石の純層。
Ⅳ層　黒色土層　<7.5YR2/1>　二ツ岳軽石(FP)・浅間C軽石(CP)を3％程度含む。しまりのある細砂。
Ⅴ層　暗褐色土層　<10YR3/4>　CPを1％程度含む細砂。
Ⅵ層　褐色土層　<7.5YR4/4>　ソフトローム層で粘性がある。やわらかいがしまっている。
Ⅶ層　黄褐色土層　<10YR5/8>　ハードローム層で板鼻黄色軽石(YP)を1％程度ブロック状に含む。
Ⅷ層　明黄褐色土層<10YR6/8>　ハードローム。粘性がありかたくしまる。
Ⅸ層　黄褐色土層<10YR5/8>　ハードローム層。
Ⅹ層　褐色土層　<10YR4/6 >　浅間白糸軽石(SP)を含むハードローム層。
ⅩⅠ層　黄褐色土層　<10YR5/6>　下部に板鼻褐色軽石(BP)ブロックを含むハードローム層。
ⅩⅡ層　褐色土層　<10YR4/6>　ハードローム層。
ⅩⅢ層　にぶい黄褐色土層　<10YR5/3>　粘性がありしまりは弱い。ATの最大層序。
ⅩⅣ層　暗褐色土層　<10YR3/3>　粘性強くしまりあり。暗色帯。
ⅩⅤ層　褐色土層　<10YR4/6>　固いハードローム層。
ⅩⅥ層　明黄褐色土層　<10YR6/8>　八崎軽石(HP)純層。
ⅩⅦ層　褐色土層　<10YR4/4>　固くしまった粘土層。

2．第Ⅳ調査区

Ⅰ層　暗褐色土層　<10YR3/3>　旧耕作土、粘性しまりなし。
Ⅱ層　黒色土層　<7.5YR2/1>　細砂、CP5％程度含む、しまりややあり、粘性なし。
Ⅲ層　褐色土層　<7.5YR4/6>　ソフトローム層、粘性がありやわらかいがしまっている。
Ⅳ層　褐色土層　<7.5YR4/4> ソフトロームとYPブロック層、しまり粘性共にややあり。
Ⅴ層　黄褐色土層　<10YR5/8>　YPを含むハードローム層細砂、しまりややあり、粘性なし。
Ⅵ層　褐色土層 <10YR4/6> SP3％を含むハードローム層しまり粘性共にややあり。
Ⅶ層　黄褐色土層　<10YR5/1>　BPをブロック状に含むハードローム層、しまりややあり、粘性なし。
Ⅷ層　にぶい黄褐色土層 <10YR5/3> しまりはあまりないが粘性あり、AT最大層序。
Ⅸ層　暗褐色土層　<10YR3/3>　暗色帯、AT1％を含む、粘性強くしまりあり、微砂。
Ⅹ層　褐色土層　<10YR4/6>　かたいハードローム層、HPブロック1％含む。
ⅩⅠ層　明黄褐色土層　<10YR6/8>　八崎軽石（HP）純層。



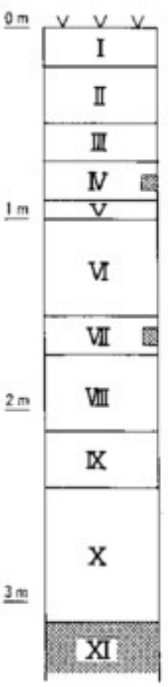


Fig. 5　基本土層図

V 遺構と遺物

1. 第Ⅰ調査区

(1) 概　観

本調査区は、4mのグリッドを設定して調査を進めたことは前述のとおりである。北西隅を基点（国家座標Ⅸ系 x＝+43.32, y＝−57.16）に南北座標をS0からS30まで、東西座標をE0からE40まで設定し、「S5E4グリッド」と言うように北西隅の座標で呼称した。

調査区の標高は130.00m～135.00mである。東西から丘陵の裾部分が出会い、北部から南東部の現在の五料沼に向かって谷地状になっている。

調査で確認された遺構は、古墳1基、石槨墓1基、溝状遺構3条、土坑92基、風倒木痕1カ所であった。遺物総数は、確認面より上の層にありグリッドで上げたものを含め343点で、発掘調査面積と比較し非常に少ない。更に、確実に上記遺構（新しい土坑以外の）に付随すると思われる遺物は1点もなかった。多くは表土である耕作土を除去した段階でソフトローム上面の埋土より出土した。

次に時期別に見てみたい。プラン確認を基にして18カ所に試掘坑を掘り調査を実施したが縄文時代以前の明確な遺構は検出されなかった。遺物は、試掘坑の1カ所の確認面より10cm下のソフトローム中から石鏃1点、W−2より前期後半と思われる土器片が1点検出された。口縁部に押紐線文をもつ堀之内式の深鉢は接合の結果40%程度になったが、本遺物もその他石斧やスクレーパー等の石器20点、中期～後期の土器片57点もほとんどはソフトロームの確認面より上の土中から出土した。

弥生時代は遺構・遺物は検出されず。古墳時代ではM−5、石槨墓、D−1等があげられる。北隣の上縄引遺跡（周溝墓や古墳）から南の三二子古墳に至るまで、弥生時代から古墳時代にかけて墓域が続いていたと思われる。

92基の土坑は一部を除き近世以降現代に至るまでの所産であると考えられる。3条の溝も、遺物がないため時期の特定はできないが、上縄引遺跡にも同様の溝が検出されており、何らかの区画を表した空堀であった可能性が高い。土坑の一部は掘立て柱の柱穴とも考えられるものもあるが明確な根拠がない。

(2) 各遺構と遺物

M−5号墳

位　置　S10E19～20, S11E18～21, S12E18～21, S13E18～21, S14E18～21

標　高　132.5m　　**時　期**　上限不明　下限6世紀初頭

挿　図　Fig.10、51　　**写　真**　PL.2

面　積　177.9㎡　(周溝を含む)

墳　丘　直径約11mの円墳である。耕作土を除去すると浅間C軽石を含む黒色土の基盤層が出現し、墳丘はすべて耕作等により削平されたものと思われる。主体部は石室の石からその掘り込みに至るまでことごとく削平されていた。おそらく墳頂付近に竪穴式石室として存在していたものと思われる。

周　溝　残存幅は2m～3mで深さ40cm～50cmを測る。渡は検出されず溝は全周巡っている。浅間C軽石を含む黒色土を掘り込んで作られており、床はハードロームでしっかりしている。

埋土は最上層に浅間B軽石及びBアッシュが最大15cm程堆積し、その下の層にはこぶし大のFPが検出された。噴火により直接飛ばされて来たものか、あるいは付近の古墳の石室等に使用されたものが流されて来たものかは不明である。更に下方（底より20cm上方）にはFAがレンズ状堆積していた。

遺　物　僅かに埴輪片が周溝西部B軽石上と南部分の上層部で5片検出されただけであった。Fig51に示すように縦ハケ目である。出土場所が周溝埋土上層部であること、出土点数が非常に少ないことなどから本古墳に使用されたものではない可能性が高い。

備　考　本遺構は、62年度に実施した確認調査で周溝部が検出されていた。東西方向に10m間隔で入れた1m幅の試掘トレンチが本遺構の中心を通っていた。ソフトローム層の確認面に西部はCP及びFPを含む黒色土、東部は浅間B軽石及びBアッシュを確認した。

Z－1号石槨墓

位　置　S13E12

標　高　133.5m　　**時　期**　6世紀以降

挿　図　Fig.11、12　　**写　真**　PL.1

形状等　墳丘や周溝をもたず平地に穴を掘り、石組みをして埋めもどしたものである。7枚の蓋石で覆われており、その規模は0.7m×1.8mである。蓋石を取り除くと、大きな面を内側に向けて、それぞれ6個の石を2列に配し、2個の石で両端をふさいだ石囲いが見られる。石槨内の床には白色粘土が厚いところで約5cm貼られていた。石槨内の空間は0.3m×1.7m×0.25mで、長軸の方位をW－35°－Nにとっている。石槨の側壁及び蓋石の隙間は小石を並べ、白色粘土で固められていた。掘り方は1.8m×3mのほぼ楕円形を呈し、深さは45cmを測る。掘り方の埋土中にFPが認められた。なお、東端の掘り方埋土中にベンガラと思われる直径5cm程の朱色の塊を検出したが性格は不明である。

遺　物　蓋石の上方から鬼高期の土器片1片を検出したが、本遺構に伴うものとは考えにくい。石槨内からは1点も検出されなかった。

備　考　本遺構を覆う表土は、発掘前は全くの平地であった。掘削用重機による耕作土除去の途中で蓋石の一つを確認。その際、東から２個目の蓋石は、若干南にずれた可能性がある。以後、人力により蓋石上部の耕作土を除去し、調査を進めた。石槨内は粘土と土の混合物が流れ込んでいた。表土剥ぎの際動かされた一石以外は、一切構築後に動かされた形跡が見られないため遺物検出に期待をかけたが、全く検出されなかった。掘り方の埋土中にＦＰが存在することから６世紀以降の構築と考えられる。

W－１号溝

位　置　Ｓ21Ｅ２からＳ18Ｅ９にかけて存在。

写　真　ＰＬ．２

形　状　浅間Ｃ軽石混じりの黒色土を掘り込んで作られており、調査区最西部の中央から北東へ32mの長さまで検出された。断面の形は逆台形をしており、一番残りの良かった西隅の部分で幅1.4m、深さ0.7mを測る。ここでの底の幅は0.5mであった。両側の壁や底は比較的残りが良かった。底は西部分はしっかりしたハードロームであるが、北東に行くに従って浅くなりＳ18Ｅ９グリッドで消えてしまう。覆土は浅間のＣ軽石やＢ軽石を含む黒色土が主体であるが全体に細かいローム粒が含まれている。

備　考　遺物が出土しなかったので時期不明。水の流れた痕跡はほとんどみられず空掘りで、なんらかの区画のために作ったものであると思われる。

W－２号溝

位　置　Ｓ７Ｅ25からＳ９Ｅ25にかけて存在。

形　状　本調査区東部の北の境界から南に８m検出された。最も残りの良い北隅は幅40cm、深さ20cmを測る。断面の形はほぼ半円形である。覆土は浅間Ｃ軽石混じりの黒色土が主体である。

備　考　遺物が出土しなかったので時期不明。水の流れた痕跡はほとんどみられず空掘りで、なんらかの区画のために作ったものであると思われる。

W－３号溝

位　置　Ｓ16Ｅ15からＳ24Ｅ13を通りＳ26Ｅ19まで存在。

形　状　Ｓ16Ｅ15グリッドから南下し、Ｓ24Ｅ13グリッドで方向を東に変え、Ｓ26Ｅ19グリッドまで検出された。幅は約80cmであるが断面の形や深さは場所によって異なる。覆土は検出面のソフトロームと殆ど同色で、また底が柔らかく検出が難しかった。

備　考　遺物が出土しなかったので時期不明。水の流れた痕跡はほとんどみられず空掘りで、なんらかの区画のために作ったものであると思われる。

D－1号土坑

位　置　S12E15～16

標　高　133.1m　　時　期　5世紀～6世紀初頭

挿　図　Fig.13

面　積　2.69㎡　　N－87°－E

形状等　2.61m×1.03mの隅丸長方形で深さ95cmを測る。ほとんど平坦なハードロームの床が検出され、壁は約60°で立ち上がっている。覆土は自然堆積しており人為的に埋めもどされた形跡がなく、埋葬施設とは考えにくい。床より、中心付近で約20cm上にＦＡがレンズ状堆積していた。

遺　物　皆無であった。

備　考　遺物が全くないので時期を特定するには理由に乏しいが、覆土の状態等から5～6世紀初頭と判断した。

その他の土坑

土　坑　表

土坑名	所在グリッド	規模(長軸×短軸×深さ)	平面形	備　考
D－2	S24E2, S24E3	1.97×0.72×0.18	長方形	
D－3	S26E5, S26E6, S27E5, S27E6	2.30×0.95×0.45	長方形	
D－4	S26E5, S26E6	1.21×0.77×0.36	長方形	
D－5	S25E5, S25E6, S26E5, S26E6	2.20×0.91×0.19	長方形	
D－6	S25E6	1.87×1.00×0.32	長方形	
D－7	S25E5, S25E6	3.15×1.07×0.18	長方形	
D－8	S24E6, S24E7, S25E6, S25E7	2.40×0.98×0.15	長方形	
D－9	S24E6, S24E7	2.80×0.90×0.12	長方形	
D－10	S24E6, S24E7	2.09×0.87×0.27	長方形	
D－11	S23E6, S23E7	2.83×1.03×0.18	長方形	
D－12	S22E6, S22E7, S23E6, S23E7	1.50×0.67×0.22	長方形	
D－13	S21E6, S21E7, S22E6, S22E7	2.61×0.91×0.49	隅丸長方形	
D－14	S20E6, S20E7, S21E6, S21E7	3.70×0.98×0.35	隅丸長方形	
D－15	S20E6, S21E6	3.50×0.80×0.16	隅丸長方形	
D－16	S20E7	1.18×1.02×0.25	隅丸長方形	
D－17	S19E16, S19E7, S20E6, S20E7	3.86×0.95×0.20	隅丸長方形	
D－18	S18E6, S18E7, S19E6, S19E7	3.95×1.02×0.29	隅丸長方形	
D－19	S18E6, S19E6	2.25×0.73×0.26	長方形	
D－20	S17E6, S17E7, S18E6, S18E7	3.89×0.97×0.47	長方形	
D－21	S16E6, S16E7, S17E6, S17E7	2.03×0.70×0.21	長方形	
D－22	S16E7, S17E7	2.64×1.02×0.22	長方形	
D－23	S15E16	0.48×0.46×0.37	円形	
D－24	S17E7	0.84×0.72×0.70	長方形	
D－25	S14E10, S14E11	1.06×0.75×0.68	長方形	
D－26	S15E10, S15E11	2.41×0.70×0.49	長方形	
D－27	S15E11	1.59×0.68×0.60	楕円形	
D－28	S16E10, S16E11	1.51×0.81×0.32	長方形	
D－29	S16E10, S16E11, S17E10, S16E11	3.26×1.01×0.28	長方形	
D－30	S15E16	0.37×0.34×0.39	円形	
D－31	S16E15, S16E16	2.55×0.94×0.54	長方形	
D－32	S15E16	0.36×0.35×0.35	円形	
D－33	S16E16, S16E17	7.67×0.90×0.38	隅丸長方形	
D－34	S15E16	0.44×0.36×0.28	楕円形	
D－35	S16E15	0.64×0.58×0.28	楕円形	
D－36	S16E16	0.45×0.38×0.29	楕円形	

D－37	S17E18, S17E19	1.90×1.00×0.32	隅丸長方形	
D－38	S16E19, S16E20, S17E19, S17E20	2.10×0.80×0.31	長方形	
D－39	S16E19, S16E20	1.75×0.74×0.35	長方形	
D－40	S17E14	0.83×0.28×0.58	楕円形	
D－41	S16E18, S16E19, S17E19	2.93×0.79×0.26	隅丸長方形	
D－42	S16E18, S16E19	2.17×0.86×0.60	隅丸長方形	
D－43	S16E20	1.97×0.72×0.40	長方形	
D－44	S23E13, S23E14	0.76×0.57×0.30	楕円形	
D－45	S21E13, S23E14	0.80×0.58×0.29	楕円形	
D－46	S13E19, S14E18,S14E19	0.90×0.34×0.61	隅丸長方形	
D－47	S13E19	1.33×0.45×0.84	長方形	
D－48	S11E19, S12E19	1.28×0.32×0.22	長方形	
D－49	S23E5, S24E5	1.79×0.64×0.44	長方形	
D－50	S23E5, S23E6, S24E5, S24E6	2.42×0.84×0.58	長方形	
D－51	S23E5, S23E6	3.18×1.05×0.45	長方形	
D－52	S24E4	1.14×0.60×0.26	楕円形	
D－53	S26E6	1.00×0.71×0.37	楕円形	
D－54	S23E6	0.61×0.55×0.23	円形	
D－55	S21E6	1.23×1.05×0.35	楕円形	
D－56	S17E14	0.75×0.52×0.74	楕円形	
D－57	S17E14	0.47×0.43×0.36	円形	
D－58	S17E18	1.01×1.01×0.42	円形	
D－59	S17E18, S18E18	1.15×1.08×0.67	楕円形	
D－60	S16E16, S16E17	1.49×0.83×0.29	長方形	
D－61	S16E17, S16E18	2.65×0.81×0.44	隅丸長方形	
D－62	S16E17, S16E18	2.38×0.57×0.25	隅丸長方形	
D－63	S8E23, S9E23, S9E24	1.07×0.78×0.38	不定形	
D－64	S9E24	1.20×1.04×0.43	円形	
D－65	S8E24	1.42×1.02×0.44	楕円形	
D－66	S8E24	1.05×0.80×0.35	楕円形	
D－67	S8E24	1.06×0.55×0.48	楕円形	
D－68	S8E24, S8E25	1.27×1.00×0.40	楕円形	
D－69	S14E29	1.35×0.84×0.38	隅丸長方形	
D－70	S15E29	1.49×0.78×0.44	隅丸長方形	
D－71	S16E28, S17E28, S17E29	2.31×1.02×0.59	隅丸長方形	
D－72	S25E20	0.60×0.35×0.41	楕円形	
D－73	S25E19, S25E20	0.38×0.30×0.44	円形	
D－74	S26E20	0.34×0.35×0.39	円形	
D－75	S13E16	0.46×0.40×0.43	円形	
D－76	S13E16	0.46×0.39×0.50	楕円形	
D－77	S13E16	0.46×0.42×0.49	円形	
D－78	S13E16	0.72×0.55×0.56	楕円形	
D－79	S14E16	0.40×0.30×0.26	楕円形	
D－80	S14E16	0.91×0.48×0.47	楕円形	
D－81	S14E17	0.39×0.35×0.35	円形	
D－82	S14E17	0.32×0.31×0.36	円形	
D－83	S14E17	0.42×0.38×0.44	円形	
D－84	S14E17, S14E18	0.30×0.31×0.29	円形	
D－85	S14E17	0.38×0.33×0.38	円形	
D－86	S14E16	0.57×0.41×0.44	楕円形	
D－87	S14E16	0.36×0.30×0.32	円形	
D－88	S14E16, S14E17	0.36×0.30×0.32	円形	
D－89	S14E17	0.47×0.39×0.32	楕円形	
D－90	S15E15	0.56×0.42×0.44	楕円形	
D－91	S15E15	0.32×0.32×0.48	円形	
D－92	S15E16	0.30×0.28×0.42	円形	

2．第 Ⅱ 調 査 区

（Ⅰ） 概 観

本調査区は、第Ⅰ調査区と同様、４ｍのグリッドを設定して調査を進めたことは前述のとおりである。北西隅を基点（国家座標Ⅸ系ｘ＝＋43.29，ｙ＝－56.97）に南北座標をＡからＭまで、東西座標を０から19まで設定し、「Ｃ－４グリッド」と言うように北西隅の座標で呼称した。第Ⅰ調査区と座標の名称を変えたのは、遺構や遺物の混同を避けるためである。

調査区の標高は132.50ｍ～137.40ｍである。西を頂上にした丘陵の東斜面に位置し、昨年度の調査区の北隣にあたる。

調査で確認された遺構は、住居址16軒、溝状遺構１条、土坑７基、炭窯址２基であった。遺物総数は、完形品、破片とりまぜて3,031点で、主に住居址内からの出土であった。

住居址はすべて古墳時代前期のものであった。同一丘陵上にある昨年度調査区の住居址は、埋土に浅間Ｃ軽石の純層が見られたが、今年度の住居址には全く見られなかった。遺物も樽式系土器と赤井戸式系土器が減り、Ｓ字口縁等の東海系土器がみられた。Ｈ－９とＨ－15は重複関係にあるが、時代差はほとんどないことが確認された。

溝状遺構は住居址Ｈ－２とＨ－11の上に検出。共に住居址が完全に埋まってから掘られたものである。後に炭窯によって破壊されている。時期を判定できる遺物は検出されなかった。

土坑は、Ｄ－１が1.2ｍ×0.8ｍの長方形プランをもち深さ２ｍであるが、他は釜の底様の形状で深さも浅く20㎝～40㎝程度である。このうち３基は底から５～10㎝の間層をあけて浅間Ｃ軽石の純層堆積10㎝を認めた。

炭窯は一部重複して２基検出されたが遺物が確認されず稼働時期は不明である。

（２） 各遺構と遺物

Ｈ－１号住居址

位 置 Ｅ－17、Ｅ－18、Ｆ－17、Ｆ－18

標 高 132.5ｍ　　**時 期** 古墳時代前期

挿 図 Fig. 14、32、40　　**写 真** ＰＬ．３、９

面 積 12.3㎡　　**方 位** Ｎ－30°－Ｗ

形 状 長軸3.74ｍ、短軸3.48ｍの長方形を呈する。壁高は32㎝を測る。

床 面 張床をもたず、掘り込んだハードローム面を直接床としており、全体的に平坦である。特に炉を中心にして固くしまっていた。精査の結果柱穴は検出されなかった。

炉 址 中央部やや西よりに１基検出。40㎝×50㎝のほぼ楕円形を呈した地床炉で、中心部は約９㎝の深さで焼土化していた。

貯蔵穴　P_1を南隅に検出。直径38cmの円形を呈し、深さ36cmを測る。

備　考　調査区内の最も東に位置する。周囲は丘陵地の裾の部分でほぼ平坦である。50cm北に遺物に接合関係が認められたD－1がある。

遺　物　本住居址からの出土遺物は土師器60点でほぼ全域から偏りなく出土している。図示したものは器台1点、高坏1点、甕3点の5点で、1の器台は脚部に3つの穿孔を持ち外面、内面共にヘラ磨きの調整が施され焼成も良好で完形の状態で炉の北西隅より出土した。2は大型高坏で炉址周辺に集中して出土しほぼ完全に復元できた。この高坏は脚部に3孔を有し裾部に向かって大きく開き、坏部は下部に陵を持ち直線的に立ち上がり口唇部で僅かに内湾する。3の小甕は床面直上から出土し残存状態も良好であった。折り返し口縁で平底を呈し外面、内面共ヘラケズリの調整がなされ胴部上位に最大径を持ち底部に向かってすぼまっている。6の甕は本遺構の北に位置するD－1出土遺物との接合関係を持っている。

H－2号住居址

位　置　G－17、G－18、H－17、H－18

標　高　132.1m　　時　期　古墳時代前期

挿　図　Fig.15、32、41　　写　真　PL.3、9、14

面　積　23.6㎡　　方　位　N－40°－W

形　状　長軸5.00m、短軸4.90mのほぼ正方形を呈する。壁高は65cmを測る。

床　面　張床をもたず、ハードローム面まで掘りこんで直接床としている。全体的にほぼ平坦で、炉を中心として固くしまっている。構築材とみられる炭化物が若干検出された。柱穴は4個検出され、大きさはP_1が40cm×35cm×48cm、P_2が39cm×35.5cm×51cm、P_3が44cm×34.5cm×51.5cm、P_4が45cm×40.5cm×45cmであった。貯蔵穴は検出されなかった。

炉　址　P1とP2を結んだ線よりやや内側に1基検出。直径30cmの円に32cm×21cmの楕円をつなげたような形をしており中央の細長い石1個を炉縁石とした地床炉である。中央部は深さ4cm程度まで焼土化していた。

備　考　H－1と同様調査区の最も東で丘陵の裾に位置する。可能な限り調査区を広げて完掘に努めたが東隅が残ってしまった。

遺　物　本住居址からは総数で179点の遺物が出土した。実測可能な土器は坏1点、坩1点、甕1点、台付甕1点、凹石1点の5点である。1の坏は完形で西壁隅の床面直上から出土した。底部は小さな平底で胴部は深くほぼ均一した厚みを持ち内面・外面共にヘラケズリの調整が施されている。2の坩は橙色を呈し焼成良好な土器で南西隅より出土し接合・復元の結果完形となった。器形は丸底で口唇部に向かって直線的に開き内面に陵を持つ。器肉が薄くヘラミガキが良く施されている。3の甕は遺構中央部に散在して出土した。赤褐色を呈し胴部球形で口縁部はくの字に屈曲し外傾する。4の台付甕は脚部のみであるがやや内湾ぎみに開き、裾部を内傾に折り返して

いる。なお凹石は床面から30cm浮いた状態で出土しており住居埋没途中に流れ込んだ可能性が強い。

H－3号住居址

位　置　I－17、I－18、J－17、J－18

標　高　132.4m　　時　期　古墳時代前期

挿　図　Fig.16、32、41　　写　真　PL.3、9

面　積　16.2㎡　　方　位　N－25°－E

形　状　長軸4.20m、短軸4.11mのほぼ正方形を呈する。壁高は19cmを測る。

床　面　全体的に平坦である。ソフトロームまで掘り込み直接床としている。全面にわたり非常に柔らかかったが炉址が検出されたので床と判断した。貯蔵穴は検出されなかった。

炉　址　南西隅、P_2に近く、ほぼP_1とP_2を結んだ線上に58cm×43cm不整楕円形の地床炉を1基検出。中央部は9cmの深さまで焼土化していた。

柱　穴　4個検出。北壁と南壁際にあり、かつP_3とP_4はそれぞれ東壁との角にある。大きさはP_1は43cm×35cm×23cm、P_2は37cm×32.5cm×15.5cm、P_3は38cm×34cm×33cm、P_4は36.5cm×32cm×21cmである。

遺　物　本住居址の遺物総数は土師器195点で実測可能となった遺物は甕3点、坩1点、器台1点、台付甕1点の6点である。1の小甕は遺構内の西壁隅に集中して出土した。器形は口縁部が長く内湾し胴部中央に最大径を持ち小さな平底を有している。2の甕は口縁部のみであるが口唇端部に調整が施され明瞭な稜を持つ。3の小甕は肩部から口縁部にかけて残損しており、1の小甕に類似した器形と推定される。4の坩は口縁部が直線的に開き頚部内面に稜を有す。5の器台は脚部に大きさの異なる円形の透かし孔を千鳥に6箇所配しており、横俣遺跡群にも同様な土器がみられる。6の台付甕は脚部のみで裾部内傾に折り返しを有し指頭による調整が施されている。

H－4号住居址

位　置　I－16

標　高　132.8m　　時　期　古墳時代前期

挿　図　Fig.17　　写　真　PL.3

面　積　8.0㎡　　方　位　N－25°－E

形　状　長軸3.15m、短軸2.65mの長方形を呈する。壁高は17cmを測る。

床　面　壁高17cmと浅く残存状態は悪い。全体的に平坦であるが非常に柔らかく、炉と柱穴を共にもたず検出は困難であった。貯蔵穴もなく規模もごく小さい。

備　考　H－1～3とともに丘陵の裾部分に位置する。ソフトロームの床で、踏み固められた痕跡がみられない。H－16とともに他の住居より著しく貧弱である。

遺　物　出土遺物総数は僅かに12点で本住居址内より散在して出土した。そのすべてが土師器の小破片で接合復元までには至らなかった。

H－5号住居址

位　置　B－14、B－15、C－13、C－14、C－15、D－14、D－15

標　高　132.3m　　時　期　古墳時代前期

挿　図　Fig.18、33、34、35、42、43、44、45　　写　真　PL.4、9、10

面　積　43.1m²　　方　位　N－35°－E

形　状　長軸7.12m、短軸6.08mの長方形を呈する。壁高は93cmを測る。

床　面　ハードローム層まで掘り込んで作った平坦な床である。全体的に踏み固められ、よくしまっており南東角以外は特に固い。南壁寄りに5～10cmの馬蹄形状の高まりが見られるが、その周囲が踏み固められていることや炉址の反対側に位置することなどから入り口施設のひとつではないかと考えられる。張り床はもたない。構築部材と思われる炭化物が若干検出された。

炉　址　P_1とP_4を結ぶ線上中央に1基検出。70cm×34cmの不整楕円形の地床炉で、中央部は5cmの深さまで焼土化していた。

柱　穴　P_1～P_4まで比較的径は小さいが4個検出した。大きさはそれぞれ30cm×23cm×57cm、42cm×40cm×51.5cm、29cm×21cm×47cm、30.5cm×25cm×61.5cmであった。

備　考　本調査区で最大の規模である。埋土の最上部に浅間B軽石およびBアッシュが、床から10cmほど上部にFAが堆積していた。

遺　物　本住居址からの遺物は総数で1043点にのぼり調査区内の住居址の中で最も出土量が多く、また全域に亙り出土した。図示したものは甕10点、台付甕4点、器台1点、高坏3点、甑1点、壺4点の23点である。1の大甕は炉址周辺に集中して出土した。石田川系の特徴がみられ口縁部には3段からなる粘土帯を装飾的に残し口唇部に陵を有す。球形で胴部中央に最大径を測り全体的に器肉が厚く平底を呈する。3の広口甕は平底で口縁部に最大径を持ち外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリの調整が施されている。9の甕は樽系で口縁部から肩部にかけて横描波状文、頸部に簾状文が施文されているがすでにその規則性を失っている。11の大甕はほぼ同レベルであるが広範囲に亙る接合関係を持っており、平底で中央部に最大径を有し胴部は緩やかに膨らんでいる。8の台付甕は本遺構内南西隅の床面直上から出土した。赤井戸系で折り返し状の段を持ち口縁部から胴最大径部分までRL縄文を施文しており接合の結果ほぼ完形となった。そのほか13,24,25の台付甕はS字状口縁を呈し外面・内面共に口縁部ヨコナデ、胴部ハケメの調整が施されている。器台は4の1点のみで脚部に3つの穿孔を持っていた。5の甑は胴部中央に1つの穿孔を有し太田東長岡に類例をみる。2の壺は胴部球形で中央よりやや上部に最大径を持ち頸部はくの字に屈曲し口縁部は折り返し状でやや外反ぎみに大きく開く。この土器は赤井戸系で見立溜井に類例がみられ胴上半分から肩部にかけてLR縄文を横位に施文しており完形の状態で住居内南西隅より

出土した。また7の甕は球形で中央に最大径を持ち埼玉県吉ケ谷に類例がみられ、20は二段口縁で頸部が直立し口縁端部で大きく外反し口唇部に稜を有するものであった。

H－6号住居址

位　置　E－14、E－15、F－14、F－15、G－14、G－15

標　高　132.5m　　時　期　古墳時代前期

挿　図　Fig.19、35、36、45、46　　写　真　PL.5 11、

面　積　16.5㎡　　方　位　N－35°－E

形　状　長軸4.62m、短軸3.72mの長方形を呈する。壁高は75cmを測る。

床　面　しっかりしたハードロームで全体に踏み固められている。南壁側に10cm程の高さのベッド状遺構が見られる。ベッドはローム土を固めて作っており、これを取り除くと北側の床の続きが見られ、この部分も踏み固められている。一度平坦な床を作り、後にベッドを作ったものと考えられる。炉址の反対側に中にピットをもった馬蹄形状の高まりをもつ。H－5同様入り口施設の一つと考えている。

炉　址　中央西よりに67cm×45cmの楕円形の地床炉を1基検出。中央は6cmの深さまで焼けていた。

柱　穴　ベッドと反対側の角に1個づつ合計2個検出された。規模はP_1 P_2それぞれ37cm×35cm×36cm、44cm×38cm×37　であった。

備　考　埋土の床上30cmのところにセカンダリーのFAがブロック状に堆積していた。東西の傾斜地に位置し、山側の一部は早期に崩れた痕跡が見られる。

遺　物　本住居址からの出土遺物は土師器329点で1点の碗と5点の甕が図示できた。1の碗は住居内西側において完形で出土し、胴部が内湾し口縁部が厚く外傾する布留系の特徴を呈す。2の甕は口縁部が短く外反し胴部は球形であるが下部に最大径を持つ。3はP_2より完形で出土した。赤井戸系の小甕で口縁部から胴上半分にかけてRL縄文が横位に施文されている。4，5，6はともに胴部球形で中央に最大径を持つ甕である。特に5の大甕は遺構中央部に集中して出土し、口唇部に高坏の器形の特徴を有している。

H－7号住居址

位　置　H－11、H－12、I－11、I－12、J－11、J－12

標　高　133.5m　　時　期　古墳時代前期

挿　図　Fig.20、37、47　　写　真　PL.5、11

面　積　31.4㎡　　方　位　N－35°－E

形　状　長軸6.03m、短軸5.83mの長方形を呈する。壁高は81cmを測る。

床　面　しっかりしたハードロームの床で全体的に踏み固められている。炉址の周囲は特に固い。

北側にベッド状の遺構をもつ。このベッドは後から作られたものではなく、竪穴を掘り込む際初めから段差を設け構築している。周溝が一周巡り、更にベッドと床の境も周溝と同じ溝で仕切られている。住居の構築材と思われる炭化物が若干検出された。

炉　址　西側の二つの柱穴を結ぶ線上中央に90cm×54cmの楕円の地床炉を1基検出した。中央は10cmの深さまで焼土化していた。

柱　穴　ベッド際に2個、反対側に2個、合わせて4個検出した。床面積の割に細くP_1～P_4それぞれ35cm×22cm×60cm、37cm×32cm×60cm、30cm×27cm×49cm、35.5cm×29.5cm×46cmを測る。

貯蔵穴　P_5を南東角に検出。70cm×60cm×80cmを測り壁から斜め下方に作られていた。

備　考　床より約20cm上方にＦＡブロックが、最上層に浅間Ｂ軽石及びＢアッシュが堆積していた。東西の傾斜地にあるので残存壁高に最大80cm程の差が見られた。山側の壁の立ち上がり角度がやや緩いのも、それゆえ比較的早い時期に崩れたものと思われる。

遺　物　本住居址からは総数で89点の遺物が出土した。実測が可能となったのは15点で、内訳は甕4点、台付甕2点、高坏7点、器台2点である。出土状態はほぼ全域に亙り散在して出土しており、特に図示した高坏、器台は総て床面直上から出土している。2の小甕は口縁部を欠損しているが球形で胴部中央に最大径を持ち平底を呈している。4と15はともに赤井戸系で、4の甕は折り返した口縁部分は無文で胴上半分にＲＬ縄文が施文され上縄引に同型の例をみる。15は逆に折り返した口縁部のみにＲＬ縄文が施文されている。13,14は台付甕脚部で内面ヘラケズリ、外面ヘラミガキの調整がなされている。1の高坏は遺構内北西隅より完形品で出土した。坏部は内湾し3つの穿孔を有す脚部も裾部において内湾する。3の高坏は内面・外面共にヘラミガキの調整が施され、比較的浅い坏部を持ち内湾して立ち上がり脚部は直線的に開く。1，3ともに樽系の技法を残す。10の器台は南壁隅より出土し脚部に3つの不定の三角形をした透かし孔を有し荒砥堤東に類例がみられる。

Ｈ－8号住居址

位　置　Ｊ－9、Ｊ－10、Ｊ－11、Ｋ－9、Ｋ－10

標　高　134.4m　　**時　期**　古墳時代前期

挿　図　Fig.21、37、47、48　　**写　真**　ＰＬ.6、12

面　積　21.8㎡　　**方　位**　Ｎ－44°－Ｅ

形　状　長軸5.93m、短軸4.30mの長方形を呈する。壁高は35cmを測る。

床　面　ソフトロームまで掘り込んだ浅く平坦な床で非常に柔らかい。プラン確認段階でははっきりしなかったが、床上に炉址や柱穴が検出出来た。

炉　址　北側柱穴外でP_1寄りに不整円形の地床炉を1基検出。規模は80cm×56cmを測り、中央部は7cmの深さまで焼土化していた。

柱　穴　4個検出。規模はP_1からP_4まで、それぞれ43cm×38cm×45.5cm、51cm×44cm×52cm、

47cm×44cm×25cm、41cm×39cm×37cmであった。

備　考　本住居址は、プラン確認の段階では調査区内に北隅のみ確認した。そこで、隣地の管理者の協力を得て調査区を広げて全住居址を発掘したものである。南半分は昨年度の調査区に入っていたが、昨年度の確認面では検出出来なかった。

遺　物　本住居址から出土した遺物は総数で86点あるがすべて小破片で図示できたものは僅かに3点のみであった。1の甕は口縁部のみであるが比較的薄手で内湾しており口唇部が短く開く。2の壺と3の甕は共に折り返し口縁を持つ赤井戸系の土器で、2,3ともに外面の磨滅がやや激しいが2は折り返した口縁部からＬＲ縄文が、3も口縁部よりＲＬ縄文を施す。

Ｈ－9号住居址

位　置　Ｈ－7、Ｈ－8

標　高　135.6m　　**時　期**　古墳時代前期

挿　図　Fig.22　　**写　真**　ＰＬ.6

面　積　9.8㎡　　**方　位**　Ｎ－44°－Ｅ

形　状　長軸3.35m、短軸3.21mの長方形を呈する。壁高は58cmを測る。

床　面　ハードローム層まで掘り込み平坦な床を作っている。全体的に踏み固められており非常に固い。西壁寄りに、入り口施設の一つと思われる馬蹄形状の若干の高まりを認めるが、炉址の近くに位置していることに疑問を残す。柱穴、貯蔵穴共に検出されなかった。

炉　址　南西の位置に50cm×38cmのほぼ楕円形の地床炉を1基検出。中央部は4cmの深さまで焼土化していた。

備　考　本住居址はＨ－15の上に作られている。Ｈ－15上の壁はロームブロックが混じった攪乱土が目立ち、人為的に埋めて新たに作ったものと思われる。

遺　物　本住居址からの出土遺物総数は41点でほぼ全域から散在して出土した。しかし土師器の小破片が殆どで接合・実測には至らなかった。

Ｈ－10号住居址

位　置　Ｅ－6、Ｈ－7、Ｆ－6、Ｆ－7、Ｆ－8、Ｇ－7

標　高　135.8m　　**時　期**　古墳時代前期

挿　図　Fig.23、38、48　　**写　真**　ＰＬ.6、12

面　積　25.9㎡　　**方　位**　Ｎ－40°－Ｅ

形　状　長軸5.49m、短軸4.90mの長方形を呈する。壁高は80cmを測る。

床　面　ハードローム層まで掘り込んだ床で全体的に平坦である。全体的に踏み固められているが炉址のある南半分は特に固い。本住居址の構築材料の炭化物と思われるものが若干残っていた。

炉　址　南の2本の柱穴を結ぶ線よりやや外側中央に楕円形の炉址を1基検出。炉址内に2個の

炉縁石をもつ地床炉で、規模は72cm×57cmであった。中央部は6cmの深さまで焼土化していた。

柱　穴　4個検出された。4個の柱穴を結んだ形は、P_2がP_1寄りにあるため長方形にならない。P_1～P_4の大きさはそれぞれ29cm×23.5cm×57cm、29cm×26cm×61cm、25cm×23cm×59cm、36cm×30cm×55cmであった。

貯蔵穴　P_5を南隅に検出。規模は73cm×35cm×63cmを測る。P_6も貯蔵穴と思われ規模は50cm×41cm×67cmを測る。

備　考　本住居址は丘陵地の頂上付近に位置している。覆土の最上層に浅間B軽石及びBアッシュが検出された。

遺　物　本遺構からの出土遺物は総数で土師器68点である。そのうち実測可能な土器は甕3点、高坏1点、紡錘車3点の7点であった。1の甕は住居南壁隅において完形品で出土した。広口口縁を持ち胴上部に最大径を有す丸胴の小型甕で千葉県地方に同様な例がみられる。3の小甕は完形に近い状態で床面直上から出土し一括して取り上げた。この土器は赤井戸系であるが十王台式の器形に類似しており口縁部には粘土帯を4段にわたって装飾的に残した段状口縁を有している。7は一部分のみであるが樽系の小甕で折り返した口縁部から肩部にかけて櫛形工具による櫛描波状文が施文されている。2の高坏は橙色を呈し炉址南側において完形の状態で出土した。内面・外面共にヘラミガキの調整が施され坏部は比較的深く口縁部が緩やかに内湾している。また紡錘車3点は床面直上から出土しており共に土製で平面は円形で断面がほぼ長方形であった。全面にヘラミガキがなされ軸孔は穿孔後に調整されたものである。

H－11号住居址

位　置　C－7、C－8、D－7、D－8

標　高　134.2m　　**時　期**　古墳時代前期

挿　図　Fig.24、38、48、49　　**写　真**　PL.6、12

面　積　11.9㎡　　**方　位**　N－40°－W

形　状　長軸3.57m、短軸3.56mのほぼ正方形を呈する。壁高は58cmを測る。

床　面　ハードローム層を掘り込んで作った全体的に平坦な床である。全面踏み固められているが炉址の周辺は特に固い。構築材料と思われる炭化物が少量検出された。柱穴は検出されなかった。

炉　址　中央と西角の間に楕円形の炉址を1基検出。65cm×53cmの地床炉で、中央に廃棄された土器片2片が炉縁石の代わりに埋め込まれていた。炭化物も検出。中央部は深さ7cmまで焼土化していた。

貯蔵穴　P_1を南隅に検出。規模は49cm×43cm、深さ42cmを測る。

備　考　丘陵地の上部に位置している。本住居址が埋まった後で溝W－1が作られている。

遺　物　本住居址からの遺物総数は土師器94点でほぼ全域から偏りなく出土した。図示したもの

は甕３点、壺２点、甑２点、高坏１点、椀１点、器台１点、片口土器１点の11点である。甕の２，７，９はいずれも樽系の小甕で口縁部から肩部にかけて櫛形工具による波状文が、頸部には同一工具による簾状文が施文されている。11の壺は口縁部のみであるが頸部から直線的に立ち上がり折り返し口縁を有す。12の壺は胴部上位や底部を欠損しており炉縁石のかわりに二等分した形で炉内中央部より出土した。３と５は鉢形平底の甑で遺構内ほぼ中央で完形の状態で出土した。３は中央に径1.2cmほどの穴を持ち折り返し口縁を有す大型甑である。４の高坏もほぼ完形品で出土し、内湾する坏部と直線的に開き裾部で緩やかに外傾する脚部を有す。内面・外面共に良くミガキが施され脚部内面を除く全面に赤色塗彩が施されている。１の片口土器は住居南壁隅より集中して出土し接合の結果ほぼ完形になった。器形は平底で胴部は僅かに内湾しながら立ち上がり口縁部に稜を持ち内傾する。内面・外面共にケズリの調整がなされ片口部は指の押えによって作り出している。

Ｈ－12号住居址

位　置　Ｈ－４、Ｈ－５、Ｉ－４、Ｉ－５、Ｊ－４、Ｊ－５

標　高　136.0m　　**時　期**　古墳時代前期

挿　図　Fig.25、39、49　　**写　真**　ＰＬ.７、13

面　積　22.7㎡　　**方　位**　Ｎ－40°－Ｅ

形　状　長軸5.03m、短軸4.75mの正方形に近い形を呈する。壁高は76cmを測る。

床　面　ハードローム層まで掘り込んだ平坦で正方形に近い形の床である。全体的に踏み固められている。構築材と思われる炭化物が若干検出された。

炉　址　北西の２個の柱穴を結んだ線上中央に楕円形の炉址を１基検出。炉縁石を１個配した地床炉である。大きさは87cm×56cmで中央部は９cmの深さまで焼土化していた。

柱　穴　P_1からP_4まで４個検出。大きさはそれぞれ36cm×29cm×54cm、26cm×24cm×67cm、41cm×30cm×57cm、31.5cm×30cm×57cmを測る。

貯蔵穴　P_5を東壁寄りに検出。規模は52cm×40cm、深さ32.5cmを測る。

備　考　丘陵地の頂上近くに位置する。埋土の最上層に浅間Ｂ軽石及びＢアッシュが検出された。

遺　物　本住居址からは総数で25点の遺物が出土した。図示したものは小甕３点、高坏２点の５点である。１は赤井戸系の小甕で東壁隅より出土し口縁部から肩部にかけてＲＬ縄文が施文されている。平底で胴部中央より上位に最大径を持ち広口口縁を呈す。５の小甕はほぼ完形品でこの１の甕の中に重なり合って出土した。２の小甕は胴部球形で底部が大きく器形は下郷系の特徴を呈している。３の高坏はP_4隅の床面直上からまとまって出土しほぼ完形に近い接合が可能になった。この高坏は吉ケ谷２Ｂタイプに比定され、口縁部に４段にわたって装飾としての輪積痕をそのまま残し坏部は内湾ぎみに緩やかに開く。脚部も裾部に向かって内湾し裾端部は平らに調整されている。本高坏は、やや器肉が薄くより土師的様相がみられるし、口唇部の形状が多少異なる

が、粕川村教育委員会の小島氏が赤井戸Ⅱに比定したものに酷似している。

H－13号住居址

位　置　J－1、J－2、K－1、K－2

標　高　135.8m　　時　期　古墳時代前期

挿　図　Fig.26、39、50　　写　真　PL.7、13

面　積　21.3㎡　　方　位　N－30°－E

形　状　長軸5.07m、短軸4.22mの長方形を呈する。壁高は70cmを測る。

床　面　ハードローム層まで掘り込んで作られている。平坦で全体に踏み固められている。ピットが5個検出された。（うち2個は昨年度調査による）昨年度検出の南隅のものは形状・規模から貯蔵穴と思われるが、他の4個は特定できない。

炉　址　中央北寄りに円形を呈する焼土を検出し、炉址と判断したが、焼土範囲が狭いこと、あまり焼けていないことからやや決め手に欠ける。

貯蔵穴　南隅に検出。円形を呈し、直径56cm、深さ50cmを測る。

備　考　南隅の約四分の一は昨年度の調査で検出されたものである。丘陵地の頂上近くに位置する。

遺　物　今年度本住居址から出土した遺物は総数で30点（昨年度11点）である。殆どが土師器の小破片で図示できたものは遺構内西壁隅より出土した高坏1点のみであった。この高坏は脚部の大部分が欠損しているが坏部の残存状態からやや膨らみを持って広がっているものと推定される。坏部は比較的浅く内湾しており内面・外面共にヘラミガキの調整が施され全面に赤色塗彩が施されている。

H－14号住居址

位　置　G－10、H－9、H－10、H－11

標　高　134.9m　　時　期　古墳時代前期

挿　図　Fig.27、39、50　　写　真　PL.7、13

面　積　17.1㎡　　方　位　N－30°－E

形　状　長軸4.67m、短軸3.63mの長方形を呈する。壁高は26cmを測る。

床　面　ソフトローム層まで掘り込んで作られた平坦な床である。地表から浅く、非常に柔らかい。柱穴、貯蔵穴共に検出されなかったが炉址は検出された。

炉　址　中央西寄りにほぼ円形の炉址を1基検出。78cm×70cmの大きさで、中央部は10cmの深さまで焼土化していた。

備　考　形状・規模共にH－15と似ている。

遺　物　本住居址からの出土遺物は総数で176点で実測可能となったものは甕3点と土製紡錘車

1点がある。2の甕は折り返し口縁を持つ赤井戸系の土器で、口縁部から胴上半分にかけて縄文LRが施文されている。3，4は口縁部から肩部にかけて櫛描波状文が施文され頸部には同一工具による廉状文が施されており、3の甕は5の字状口縁を呈し北陸月影系の土器に類似している。1の土製紡錘車は垂直分布において確認面に近いレベルで出土しているため他遺構からの混入遺物である可能性も考えられる。

H－15号住居址

位　置　H－6、H－7、H－8、I－6、I－7

標　高　135.8m　　時　期　古墳時代前期

挿　図　Fig.28、39、50　　写　真　PL.6、13

面　積　16.3㎡　　方　位　N－44°－E

形　状　長軸4.69m、短軸3.58mの長方形を呈する。壁高は52cmを測る。

床　面　ハードローム層を掘り込んで作られている。全体的に平坦で固くしっかりした床面である。半分ほどH－9によって壊されているので、炉があったかどうか不明である。なお、ピットが1個検出されたが、性格は不明である。炭化物が若干検出された。

遺　物　本遺構より出土した遺物は総数で土師器54点である。そのうち図示したものは甕2点である。1の大甕は住居内の北東隅において胴部の下半分を欠損した状態で出土した。外面は口縁部から肩部にかけて右下がりのハケメが入り、同一工具により頸部に廉状文が施されている。器形は肩部は丸みを帯び、口縁部は頸部より緩やかに立ち上がり口唇部分で大きく外反している。2の甕は赤井戸系で折り返した口縁部から胴部上位にかけてRL縄文が施文されている。

H－16号住居址

位　置　D－16、E－16

標　高　132.7m　　時　期　不明

挿　図　Fig.17　　写　真　PL.7

面　積　6.0㎡　　方　位　N－44°－E

形　状　長軸2.61m、短軸2.39mの長方形を呈する。壁高は26cmを測る。

床　面　全体的に非常に軟質の床で深さは浅い。規模は本調査区の中で最も小さい。柱穴、炉址、貯蔵穴いずれももたない。

備　考　床の状態や柱穴・貯蔵穴・炉址がいずれもないこと、また遺物も認められなかったことなどから、人が生活した痕跡が見られず本遺構を住居址とするにはやや根拠に乏しいが、形状からして現段階では一応住居址と断定した。

W－１号溝

位　置　Ａ－５からＧ－18にかけて存在。

形　状　調査区北西隅からＨ－11の上を通りＫ－１までの約34mとＨ－２の上約４mが検出された。幅80～100cmで深さ約25cmを測る。断面は楕円形を半裁した形をしている。覆土は浅間のＣ軽石やＢ軽石を含む褐色土が主体である。Ｈ－２、Ｈ－11が完全に埋まった後に作られたもので、Ｋ－１号炭窯で壊されている。

備　考　遺物は住居址の上に集中しており溝の時期を特定できる遺物は出土しなかった。

Ｄ－１号土坑

位　置　Ｅ－17

標　高　132.9m　　時　期　古墳時代前期

挿　図　Fig.30、50　　写　真　ＰＬ．７、14

面　積　0.85㎡　　方　位　Ｎ－24°－Ｅ

形状等　1.2cm×0.8cmの長方形で深さ２mを測る。平坦なハードロームの床が検出され、壁はほとんど垂直に立ち上がっている。上部は楕円形プランを呈するが、埋まる過程で角が崩れたものと推定される。井戸を思わせる形状であるが壁の下部が水の影響を受けていないように見えること、また時代的にみて近隣の類例に乏しいこと等から現段階では井戸以外の用途に使用されたものではないかと推測される。

遺　物　土器片総数27点であった。主なものは、Ｓ字の台付甕の口縁部、器台や高坏の脚部等であるが特筆されることは本遺構から出土した甕の口縁部がＨ－１出土の土器と接合関係があったことである。共にそれぞれの床直上からの出土であり、同時期に存在していたと推測することができよう。

その他の土坑

土坑名	所在グリッド	規模(長軸×短軸×深さ)	平面形	備　考
Ｄ－２	Ｃ－１３,Ｄ－１３	2.80×2.40×0.20	楕円形	遺物１点
Ｄ－３	Ｇ－１２	1.93×1.43×0.28	楕円形	
Ｄ－４	Ｇ－１１,Ｇ－１２	1.30×1.34×0.30	円形	
Ｄ－５	Ｇ－９,Ｇ－１０	1.33×1.22×0.33	円形	
Ｄ－６	Ｅ－７	1.27×1.34×0.25	楕円形	
Ｄ－７	Ａ－１０,Ｂ－１０	1.80×1.63×0.65	楕円形	遺物７点

K－1号窯址

位　置　E－13　F－12　F－13

標　高　134.0m　　時　期　不明

挿　図　Fig.29　　写　真　PL.7

面　積　3.1㎡　（炭化室床面）　方　位　N－84°－E

形状等　丘陵中腹の傾斜地に、K－2を壊して構築されたもので、加熱室前部に平坦な作業場所がひろがる。天井部分は既に崩落しており、窯内部と推定される部分は2.7cm×1.9cmの楕円形で残存深さ78cmを測る。床はハードロームで10cm程度の深さまで焼土化していた。加熱室と推定される部分は床と壁面（南側のみ）に石組が残っていた。覆土中からは焼けた粘土塊と共に多量の割石が検出されたことから石組は広範囲に及んでいたものと推定される。遺物は全く検出されず、構築時期は不明である。

遺　物　皆無であった。

K－2号窯址

位　置　E－12　E－13　F－13

標　高　134.0m　　時　期　不明

挿　図　Fig.29　　写　真　PL.8

面　積　2.1㎡　（炭化室床面）　方　位　N－87°－W

形状等　丘陵中腹の傾斜地に煙道部を山側に向けて構築されている。後に作られたK－1により南側半分を破壊されている。K－1と同様、加熱室前部に平坦な作業場所がひろがる。天井部分は既に崩落しており、窯内部と推定される部分は2.6cm×1.5cmの楕円形で残存深さ92cmを測る。床はハードロームで、焼土は全く見られなかった。炭化室と推定される部分の一部には壁面等の石を抜き取った痕跡が見られる。なお、煙道部は、奥壁に広い面を内側に2段、両側は目地に粘土を使用した小口積の石組がそっくり残っていた。K－1の構築により広範囲に破壊されており煙道部から炭化室北側にかけて以外は遺構範囲が明確ではない。前部の作業場所にあたる部分もK－1の構築でいじられた可能性もある。遺物は全く検出されず、構築時期は不明である。

遺　物　皆無であった。

3．第 Ⅲ 調 査 区

（1） 概　観

本調査区は後二子古墳の北側にあたり、緩い北斜面に立地する。標高は130.6m～131.9mであった。調査を進めるにあたり、4mグリッドは設定せず、後二子古墳の国史跡指定境界杭の1本（国家座標Ⅸ系x＝＋43.07, y＝－57.02）を基準に遺構の位置を求めた。調査区内には石材等の障害物が多く、それらをよけてL字型に表土を排除して遺構の確認を行った。

調査で検出された遺構は石田川期の住居址1軒のみであった。約1m幅のトレンチ内に検出されたもので、全容は明らかでない。

（2） 遺　構

H－1号住居址

標　高 131.3m　**時　期** 古墳時代前期

挿　図 Fig.30、53　**写　真** PL.8

面　積 28㎡（推定）　**方　位** W－57°－N

形　状 一辺が5.3mで残存壁高は40cmを測る。

床　面 張り床は見られず掘り込んだローム面を直接床としている。全体的に踏み固められておらず柔らかく、南側は周溝が見られる。焼土が2カ所検出されたが表面がごく僅か焼けているだけであり、形からも炉址とは認めがたい。柱穴、貯蔵穴ともにトレンチ内には検出されなかった。

備　考 ソフトローム上面に入れた幅約1mのトレンチ内に検出。耕作等によりかなり削平されており、床までの深さは浅いほうでは約20cmで残りが悪い。床面から約10cm上に8cm程度浅間C軽石の純層が検出された。トレンチ内の発掘調査のためその全容は明らかではないが、床の状態やセクション、遺物等から、昨年度検出の住居址に類似したものがあることを付け加えておきたい。

遺　物 遺物総数は47点で図示できたものは土師器4点である。1は小破片のため器形は不明だが櫛形工具による波状文が施文されたいわゆる樽系の土器片で、2も器形は不明だが折り返し口縁にRL縄文を施したいわゆる赤井戸系の土器片である。3，4はともに復元して掲載したが、3は壺又は甕の口縁部で、直線的にやや開き内側はヘラ調整、外側は縦方向にミガキが見られる。4は小型の甕の口縁部から胴上部にかけての1部と思われる。口唇部に明瞭な稜をもち内外面共横方向にミガキが入る。

4．第 Ⅳ 調 査 区

（1） 概　観

本調査区は後二子古墳の南東部から中二子古墳の北側にかけての約200㎡の調査区である。4グリッドは設定せず、後二子古墳の国史跡指定境界杭の1本（国家座標Ⅸ系 x＝＋42.96, y＝－56.97）を基準に調査区内の遺構の位置を求めた。

調査区の標高は130.00m～132.00mである。

調査で検出された遺構は調査区最南部の9世紀後半の溝1条であった。

（2） 遺　構

W－1号溝（Ⅳ区）

位　置　挿図参照

挿　図　Fig.31、53　　**写　真**　PL.8、13

形状等　調査区南端に東西に検出。西端に最大幅・最大深さを測り、それぞれ7mと1.8mであった。東に下るにつれ徐々に浅くなり、9mで消滅するが、先端部は中央に溜まり状のくぼみを呈する。ハードローム層まで掘り込んで作られた底は固く残りは良好であった。本遺構は2層の耕作土の下のソフトローム上面にセカンダリーの汚れた浅間B軽石のプランで確認された。

遺　物　総数で9点出土したが、図示できたのは3点である。2点は円筒埴輪の破片で、覆土上層より出土した。もう1点は直径15cm高さ6cmの土師の高台付き椀で、緩やかに内湾した体部は外側はヘラ削り調整が見られ、口唇部はヨコナデにより薄く、やや外傾する。高台部はハの字に開き体部との接合部は内外共ヨコナデ調整。内側は全体に幅の狭いヘラミガキが施され、更に黒色に仕上げられている。外側2カ所に「干」とも「土」とも読み取れる墨書が見られるが、大阪大学助教授東野治之氏に鑑定していただいた結果、文字ではなく何らかの記号であろうとのご意見をいただいた。本墨書土器の年代から9世紀後半～10世紀前半に比定したい。

Ⅵ　ま　と　め

今年度は、62年度の試掘と63年度の一部発掘に続く３年目の調査である。ここでは、過去２年間の発掘成果と併せて考察してみたい。

（１）墓域について（Fig.58）

今年度の調査により第１調査区で古墳１基と石槨墓１基が検出された。昨年度のM－１号墳を含めて公園予定地には合計９基の古墳が確認されたわけである。そもそも本遺跡群周辺は古墳の密集地であり、赤堀茶臼山古墳、伊勢山古墳群、七ッ石古墳群、阿久山古墳群など、実に多くの古墳が林立する。その中で、大室古墳群は前・中・後の三二子古墳を中心に、公園予定地内の９基をはじめ、上縄引遺跡の調査で検出された11基、県道今井・前橋線をはさんで存在する２基等で構成されている。上縄引遺跡には古墳と併せて10基の周溝墓が検出されており、弥生時代には既に当地は墓域であったことがうかがわれる。古墳では五料山頂上の荒砥村58号墳が、立地条件から古式古墳の可能性があり、最も古いものと思われる。続いて、前、中、後二子古墳が構築されるが、最後の後二子古墳は６世紀後半代には存在していたと推定されている。今年度検出されたM－５号墳は、周溝の覆土下層にＦＡが、上層にはＦＰが検出された。最上層は浅間Ｂ軽石及びＢアッシュである。遺物がないので明確な時期判定はできない。帆立貝式古墳M－１号墳（荒砥村57号墳）は６世紀後半代に比定されている。なお、中二子古墳と後二子古墳の間は、確認されているM－３号墳以外にも雨上がりの畑にうっすらとロームの円形が数基見られることから小古墳の数はさらに増えるものと思われる。また、古墳の間隙を埋めるかのように新しい墓地が点々と存在する。こうして見ると、上縄引遺跡から五料沼西側さらにその南にかけて弥生時代から現在に至るまで一大墓域であったと考えることが妥当であろう。

（２）住居址について（Fig.59）

今年度は第Ⅱ調査区で16軒、第Ⅲ調査区で１軒住居址が検出された。第Ⅱ調査区は昨年度の調査区に隣接しており、しかも同一丘陵にあるのでFig.59に併せて示した。その際、今年度分についてはH－１～16と表し、昨年度のものは（１）～（19）と表した。ただしH－13と（18）は同じものである。

まず、覆土中の軽石について見てみる。ここではほぼ純層と思われる堆積が認められた浅間Ｂ軽石、浅間Ｃ軽石、ＦＡに着目した。最上層にＢ軽石が検出されたのはH－２、５、７、10、12で当時まだくぼみを残していたことを示す。ＦＡはH－２、４、６、７で検出され、ＣＰは（１）、（５）、（７）、（９）、（10）、（15）と今年度の第Ⅲ調査区H－１で検出された。形状を見るとＦＡ検出住居は柱穴を有した比較的大きなものであり、ＣＰは（15）を除き柱穴をもたない比較的小型の住居址に認められた。また、Ｂ軽石はＦＡ検出の大形住居に見られた。

柱穴については完掘出来なかった第Ⅲ調査区の1軒を除いた34軒のうちH－2、5、6、7、8、10、12、(3)、(15)、(16) の10軒に認められた。このうちH－6はベッド状遺構の反対側に2個、形態を異にして検出された。本住居址以外はどれも一定以上の床面積を有する。

ベッド状遺構についてはH－6、7、(5)、(13) に検出した。H－6は平坦な床の上にロームを張って作ったものであるが他の3軒は当初から掘り残して作られたものである。なお、H－6、7、(15) には周溝がめぐっていたが、H－7はベッドと床の境にも同様の溝が検出された。

住居の入り口施設の一つと思われる馬蹄形状遺構はH－5、6、9、(15) に見られた。このうちH－9以外は中にピットをもっていた。

34軒の住居址は規模、形状は異なるが、丘陵頂上を中心としてほぼ同心円を描いてまとまっている様に見える。それぞれの主軸方位と他の要素の関係については考察するには資料に乏しく、現段階では言及しない。

2年間で検出された住居址は5世紀の中頃に位置付けた (19) を除きすべて4世紀初頭から4世紀後半にかけてのものであった。東隣は試掘の結果から竈をもつ住居址が確認されており、一帯には古墳時代の住居址が数世紀にわたって存在していたものと思われ、今後の調査が期待される。

(3)　歴史的景観の推移について

発掘調査を実施した区域が時代と共にどのように変遷していったか、そのあらましについて述べる。ただし、他の3調査区と隣接していない第Ⅳ調査区は本考察では除外する。

まず縄文時代であるが、第Ⅰ調査区で早期後半の刺突を有する土器片が1片、前期諸磯b式、後期称名寺式、堀之内式等の土器片が約60点出土している (Fig.51～53参照)。接合の結果40%程度復元できた堀之内式の深鉢も第Ⅰ調査区からの出土であるが、遺構は全く検出されなかった。第Ⅱ調査区では、北の境界線近くで称名寺式土器の小破片2点が出土したのみであり、ここでも遺構は検出されなかった。昨年度調査区でも第Ⅰ調査区と同様の土器片が出土しているが、検出された遺構は堀之内Ⅰ式土器の埋め甕1基だけであった。こうしてみると、縄文時代に当地を生活の本拠地としてはおらず、遺物だけが何等かの方法で持ち込まれたと解釈するのが妥当ではなかろうか。しかし、多少にかかわらず遺物の存在そのものが生活の明かしであるとする考え方もあり、一概には生活の有無を語れない。

弥生時代と古墳時代がオーバーラップする4世紀前半になると、第Ⅱ、第Ⅲ調査区と昨年度調査区に竪穴住居址が作られた。覆土に浅間C軽石が純層堆積していたものがその一例である。主に櫛形工具による波状文をもつ樽系土器や口縁部に輪積み痕を残したものや縄文を施文した赤井戸系土器を出土する。上縄引遺跡の周溝墓はこのころ作られたものである。第Ⅱ調査区には続いて4世紀後半まで住居が作られた。4世紀後半の住居址には覆土にFAが検出されたものもあり、遺物は主に赤井戸系に混じり石田川系の土器が見られる。このころ、あるいは少し後に第Ⅰ調査

区のM－5やZ－1等が構築されたものと思われる。昨年度調査区には中期の住居址が他とは離れて1軒検出されたが、同時期の集落は形成されず、その性格は不明である。62年度の試掘の結果によれば、集落はもう少し時代が下ると昨年度調査区及び第Ⅱ調査区の東隣に移動することが確認されている。そのころになると、前・中・後の三二子古墳やM－1等の古墳が作られるのである。

第Ⅱ調査区にはそれ以後、2基の炭窯（近世以降のものと思われる）が構築されるまでの住居址等の遺構は検出されていないが、これはM－5が作られたことにより墓域と考えられるようになったためであろう。

昨年度調査区ではブクリョウ（伏苓）というキノコが数多くみつかった。このキノコは松林を伐採後数年経過してから地中に成育するもので、当調査区は一時期松林であったことがわかる。後に人々により開墾され、現在まで桑園、果樹園として利用されていたのである。

本発掘調査が公園建設に先立って行われたことはすでに本書の冒頭で述べた通りである。現在、国指定史跡の三二子古墳をはじめ予定地内の歴史的史料、景観を公園に最大限生かそうと公園緑地部と教育委員会関係者を中心に「大室公園史跡整備委員会」を組織し、公園施設と調和のとれた史跡整備の在り方を模索している。

本発掘調査の結果がこうした公園建設に十分生かされるとともに、広く考古学研究の参考になれば幸いである。

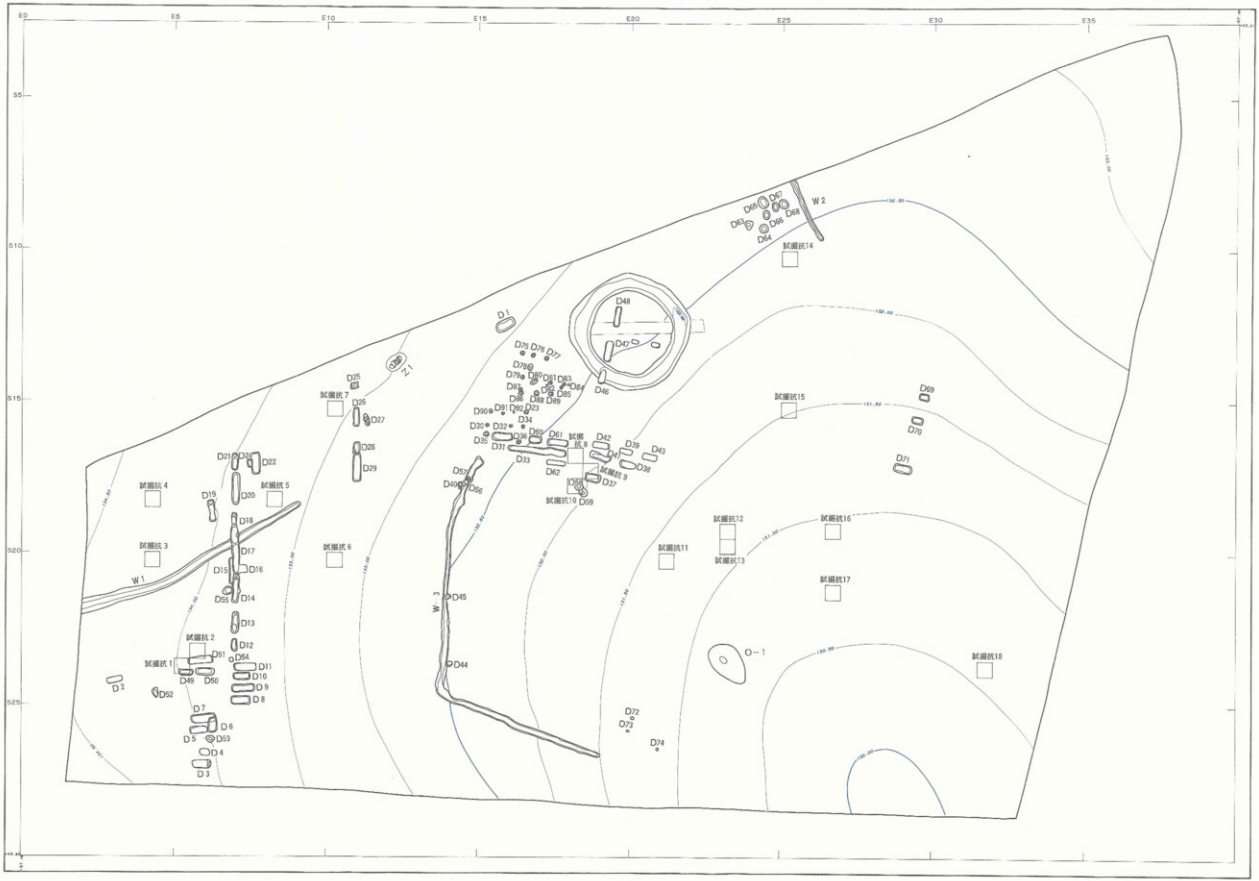


Fig 6　第Ⅰ調査区全体図

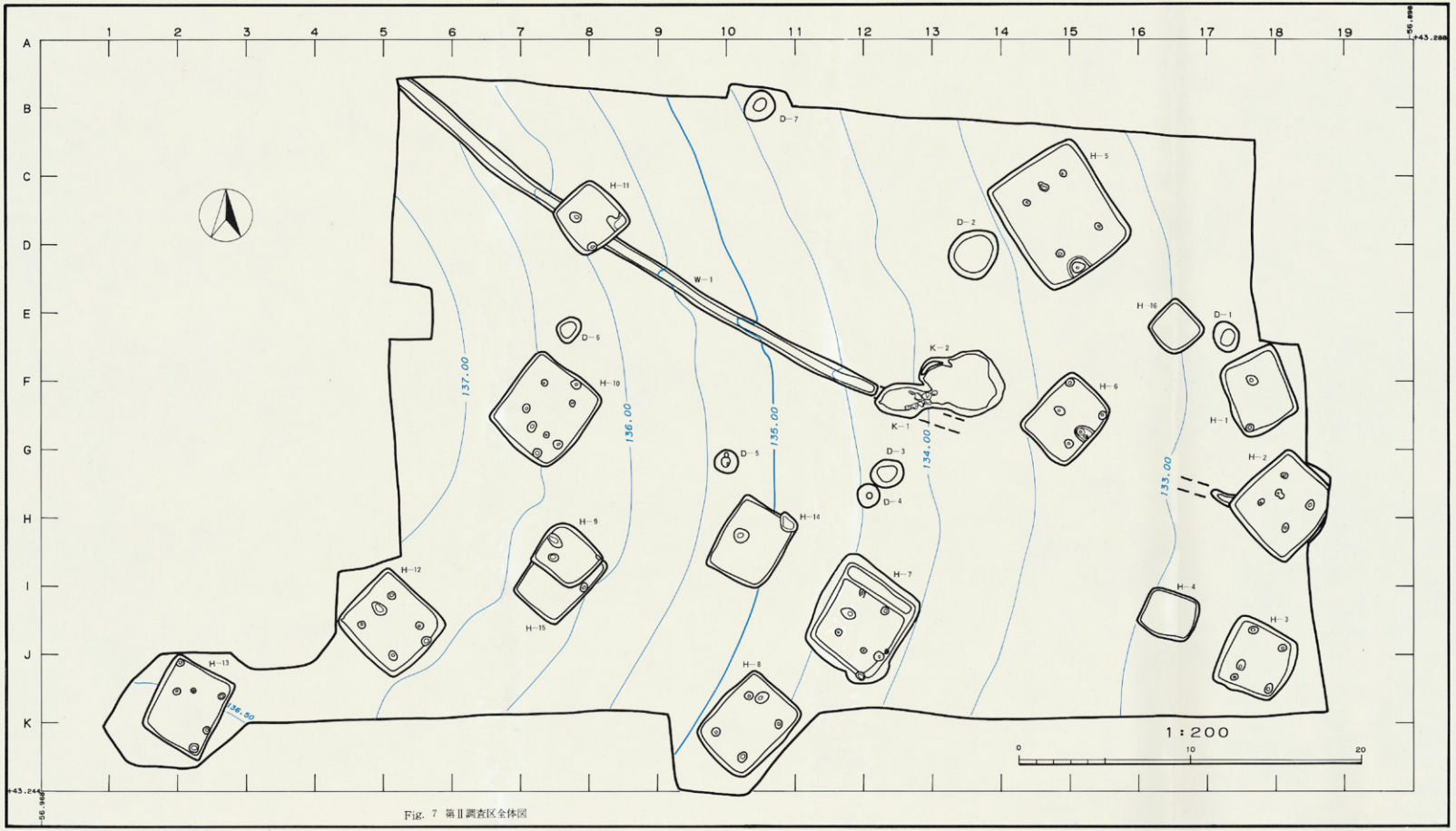
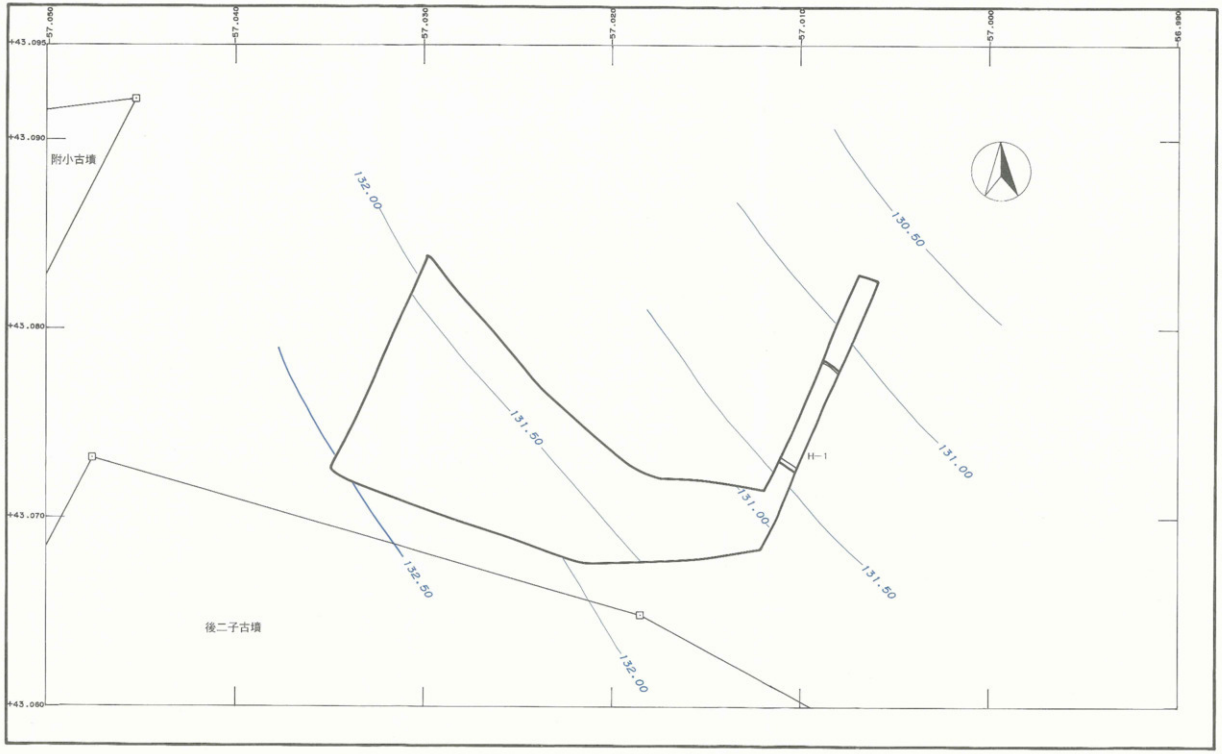


Fig. 7 第Ⅱ調査区全体図



1:200

0 10 20

Fig. 8 第Ⅲ調査区全体図

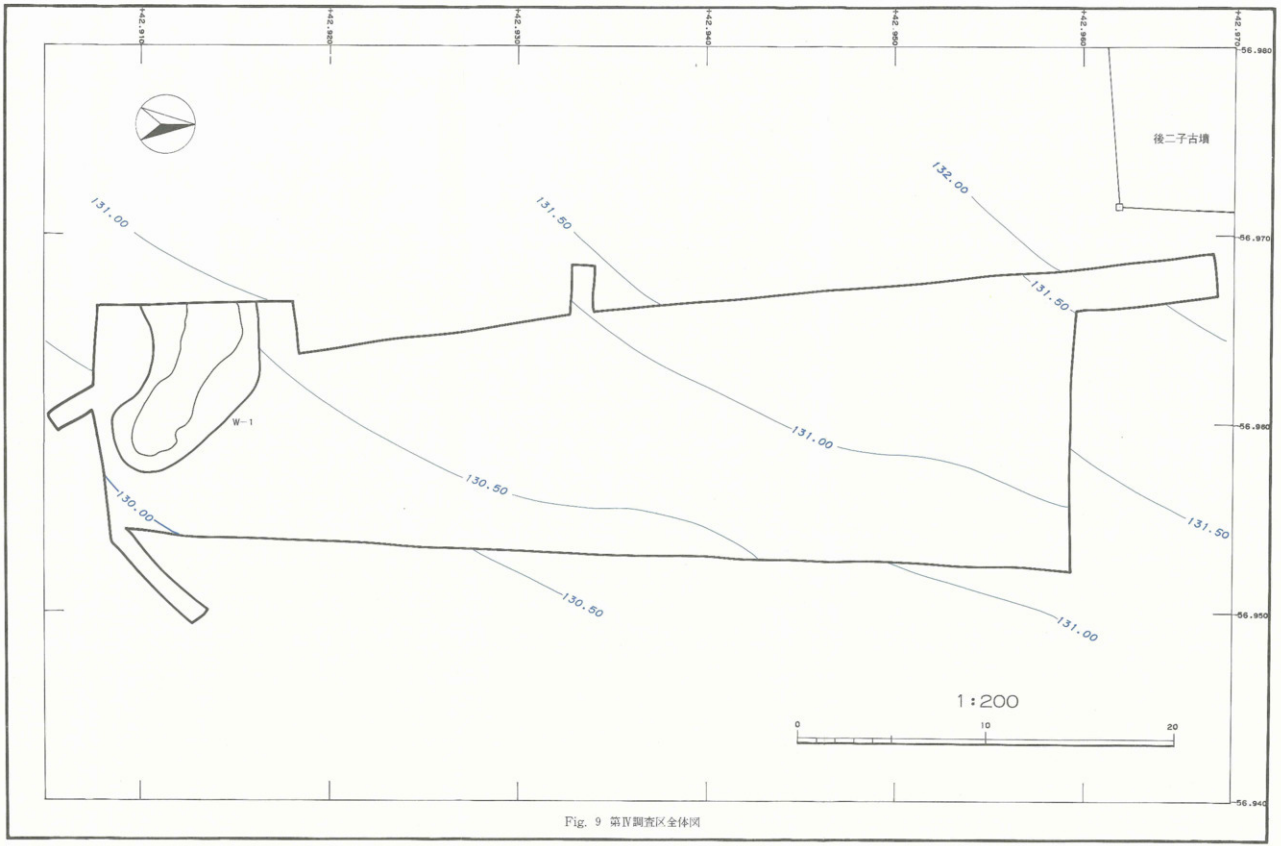
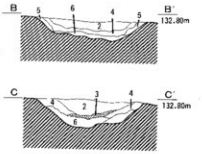
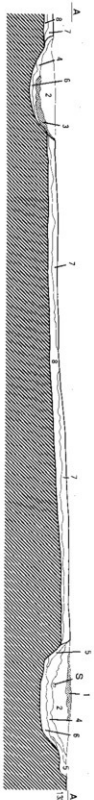


Fig. 9 第Ⅳ調査区全体図





1層　褐色土層（7.5YR4/6）細砂
φ1浅間B、及びBアッシュを含む。しまりややあり、粘性なし。
2層　黒色土層（7.5YR2/1）細砂
φ2～3のCPを20%、φ30～50中には100～150の大きいFPが混入している。しまりあり、粘性ややあり。
3層　F A 層
4層　暗褐色土層（10YR3/3）細砂
φ1～2のCPを7%、φ30～30のFPを5%程含む。2層とソフトローム層の混合層である。しまり、粘性共にややあり。
5層　褐色土層（7.5YR4/6）細砂
ソフトローム層を上体とした層である。軽石はCP1%・FP1%程度である。しまり、粘性共にややあり。
6層　褐色土層（10YR4/6）細砂
ハードロームブロック（φ5～7）を多量に含む。ソフトロームを主体としているが、崩落等によりハードロームが混入したものと思われる。しまりややあり、粘性なし。
7層　黒色土層（7.5YR2/1）細砂
基本層序Ⅱ層にあたる。
8層　褐色土層（7.5YR4/6）細砂
基本層序Ⅲ層にあたる。

0　1：80　4m

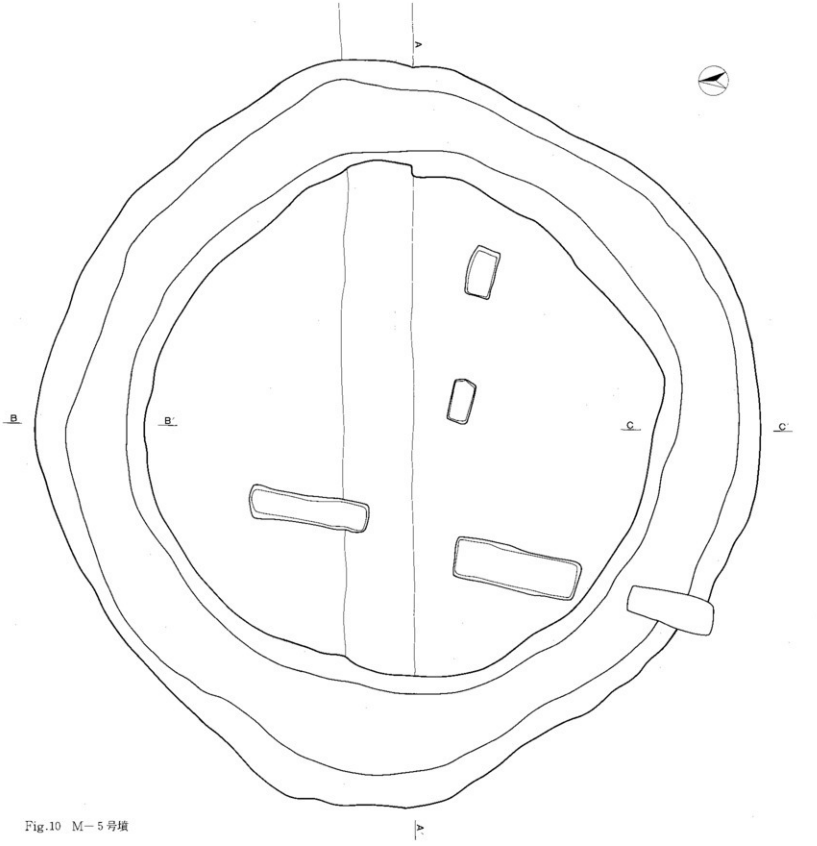


Fig.10　M－5号墳

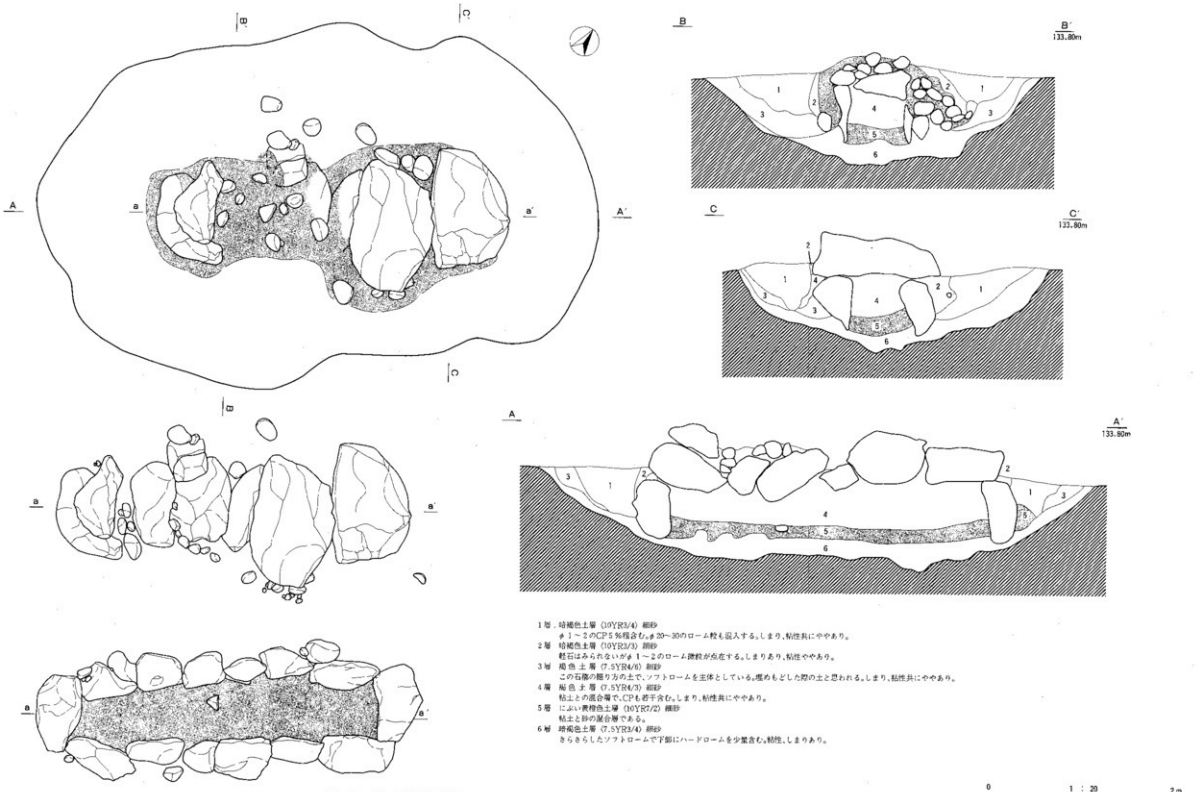


Fig.11 Z－1号石棺墓(1)

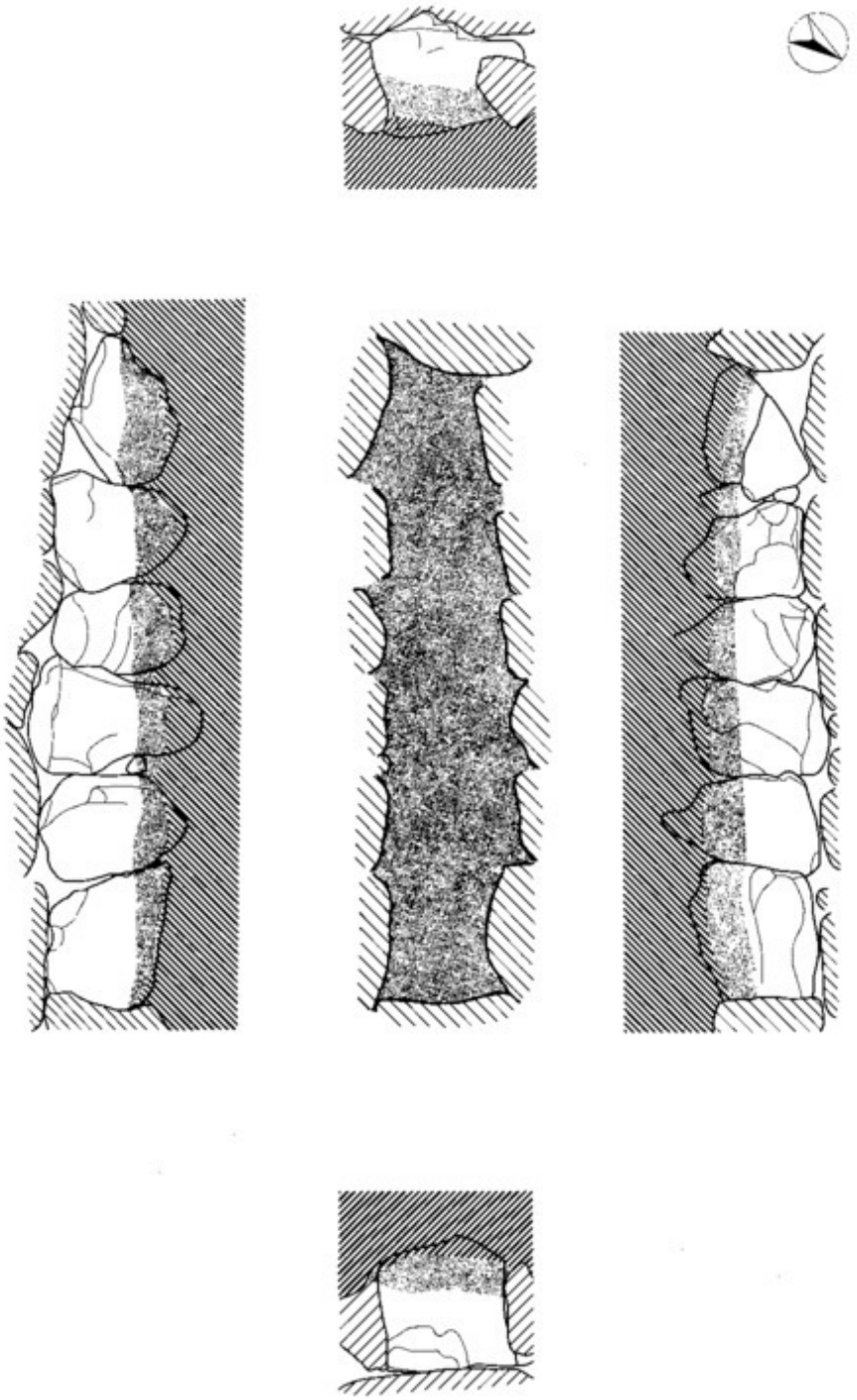
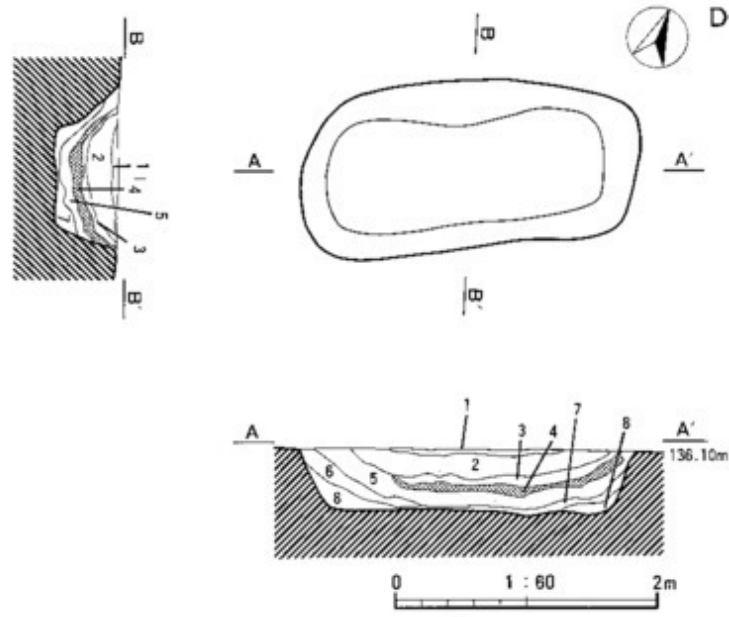


Fig. 12 Z—1号石槨墓（2）



D—1

1層 黒色土層（10YR2/1）細砂
φ1浅間Bを3%程含む。しまりはあるが粘性はあまりみられない。

2層 黒色土層（7.5Y2/1）細砂
φ2～3のCPを5%、FP5%を含んだ層である。しまり、粘性共にややあり。

3層 暗褐色土層（10YR3/3）細砂
φ2～3%のFP5%、CP3%程含んだ層である。しまり、粘性共にややあり。

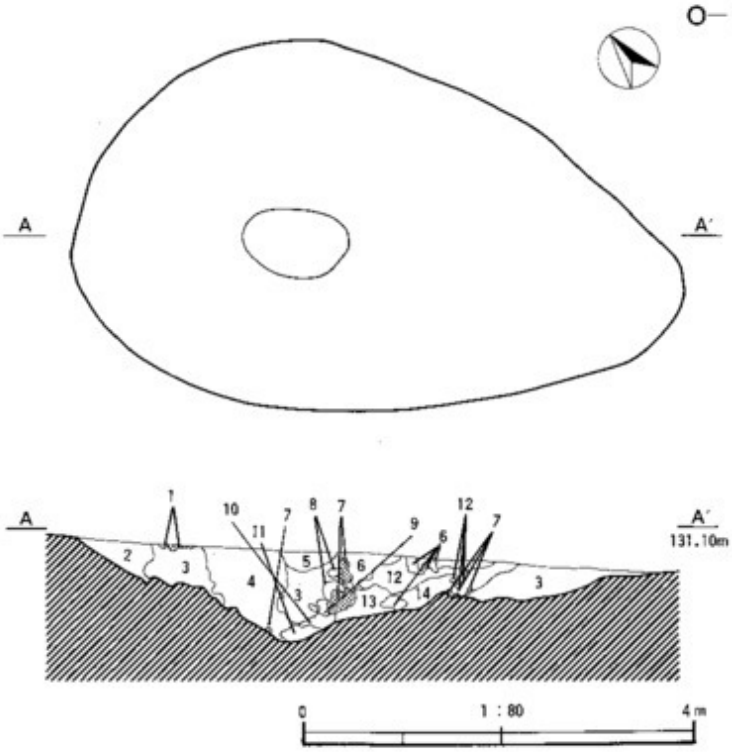
4層 黄褐色土層（10YR5/6）粗砂
FA純層。

5層 暗褐色土層（10YR3/4）細砂
φ1～2のCP3%程含む。ローム粒も散在する。しまり、粘性共にややあり。

6層 暗褐色土層（10YR3/4）細砂
CP1%程と微粒のローム粒を5%程含む。しまり、粘性共にややあり。

7層 黄褐色土層（10YR5/6）細砂
YP5%程含む。しまりややあり、粘性なし。

8層 黄褐色土層（10YR5/8）細砂
YP層



O—1

1層 黒褐色土層（10YR2/3）細砂
浅間B軽石を土体に上部にBアッシュを含む。しまりあり。粘性なし。

2層 褐色土層（10YR4/6）細砂
ソフトローム。上部にφ1のCPを含む。やわらかいがしまりあり。

3層 暗褐色土層（10YR3/4）細砂
ソフトロームに黒色土がまじる。φ1のCP、YPを含む。しまりがあるがやわらかい。粘性ややあり。

4層 黒色土層（10YR2/1）細砂
φ1～2のCPを5%程含む。しまりややあり、粘性なし。

5層 褐色土層（10YR4/6）細砂
ソフトロームにφ1のYPを少量含む。しまりあり。

6層 黄褐色土層（10YR5/8）細砂
ソフトロームにYPが50%程混じる。しまりあり。

7層 明褐色土層（10YR6/8）
YP純層、かたくしまりあり。

8層 褐色土層（10YR4/4）細砂
YPを含み非常に固い。

9層 黄褐色土層（10YR5/8）細砂
ロームで非常にかたくしまりあり、粘性なし。

10層 褐色土層（10YR4/6）細砂
YP、ローム、黒色土のまじり。水の影響を受けている。粘性あり。

11層 暗褐色土層（10YR3/4）細砂
ローム、黒色土の中に部分的にYPブロックを含む。10層と同じく水の影響を受けている。

12層 褐色土層（10YR4/6）細砂
7層＋黒色土、YP20%を含む。しまりあり。

13層 明黄褐色土層（10YR6/6）細砂
ロームが粘土化している。部分的に粗砂を含む。非常にかたくしまりあり。φ5～10の酸化鉄粒を1%含む。粘性あり。

14層 黒褐色土層（10YR2/3）細砂
やわらかいがしまりあり。φ10のローム粒、YPブロックを含む。粘性あり。

Fig. 13 D—1号土坑・O—1号落ち込み（第Ⅰ調査区）

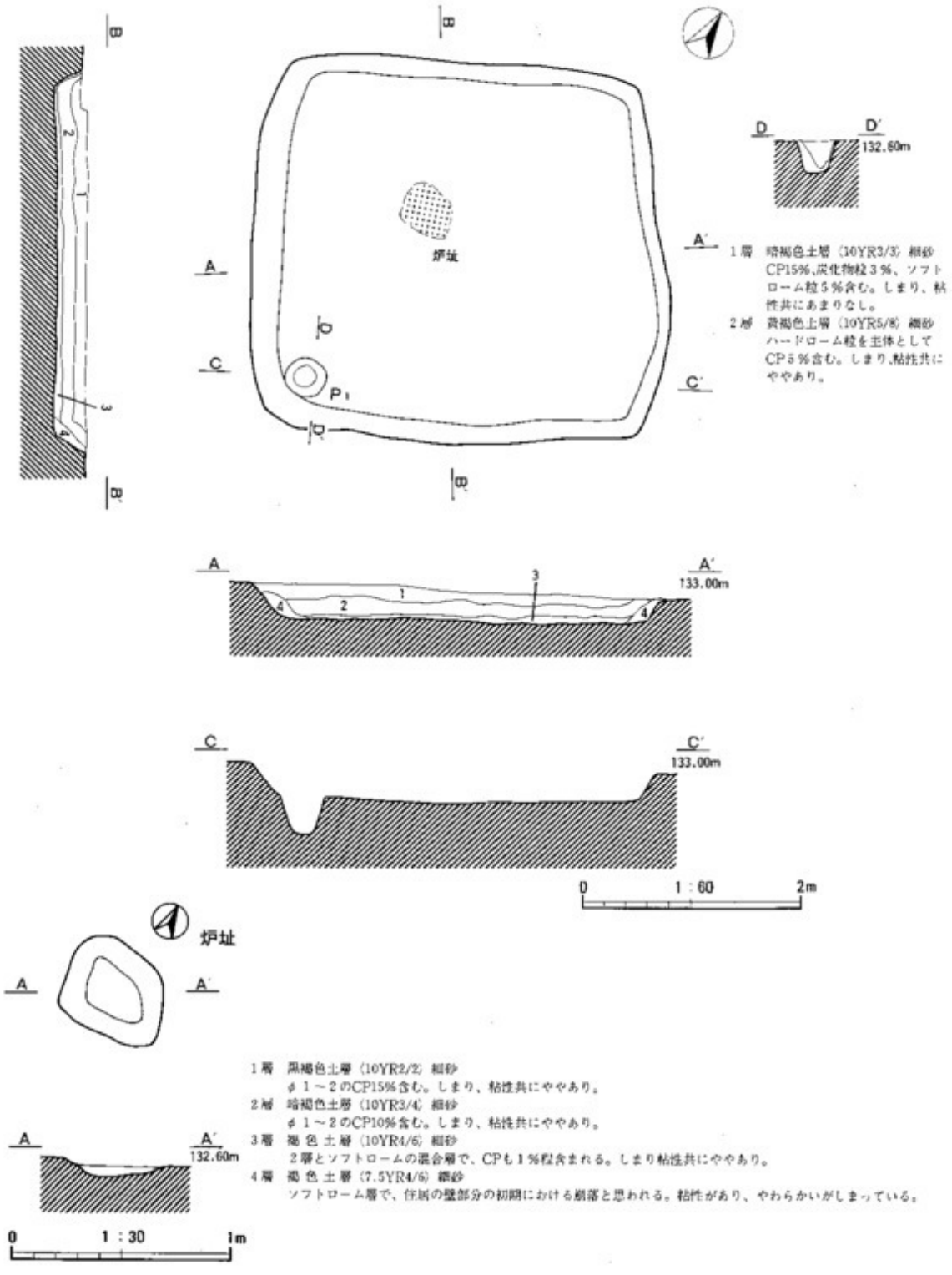
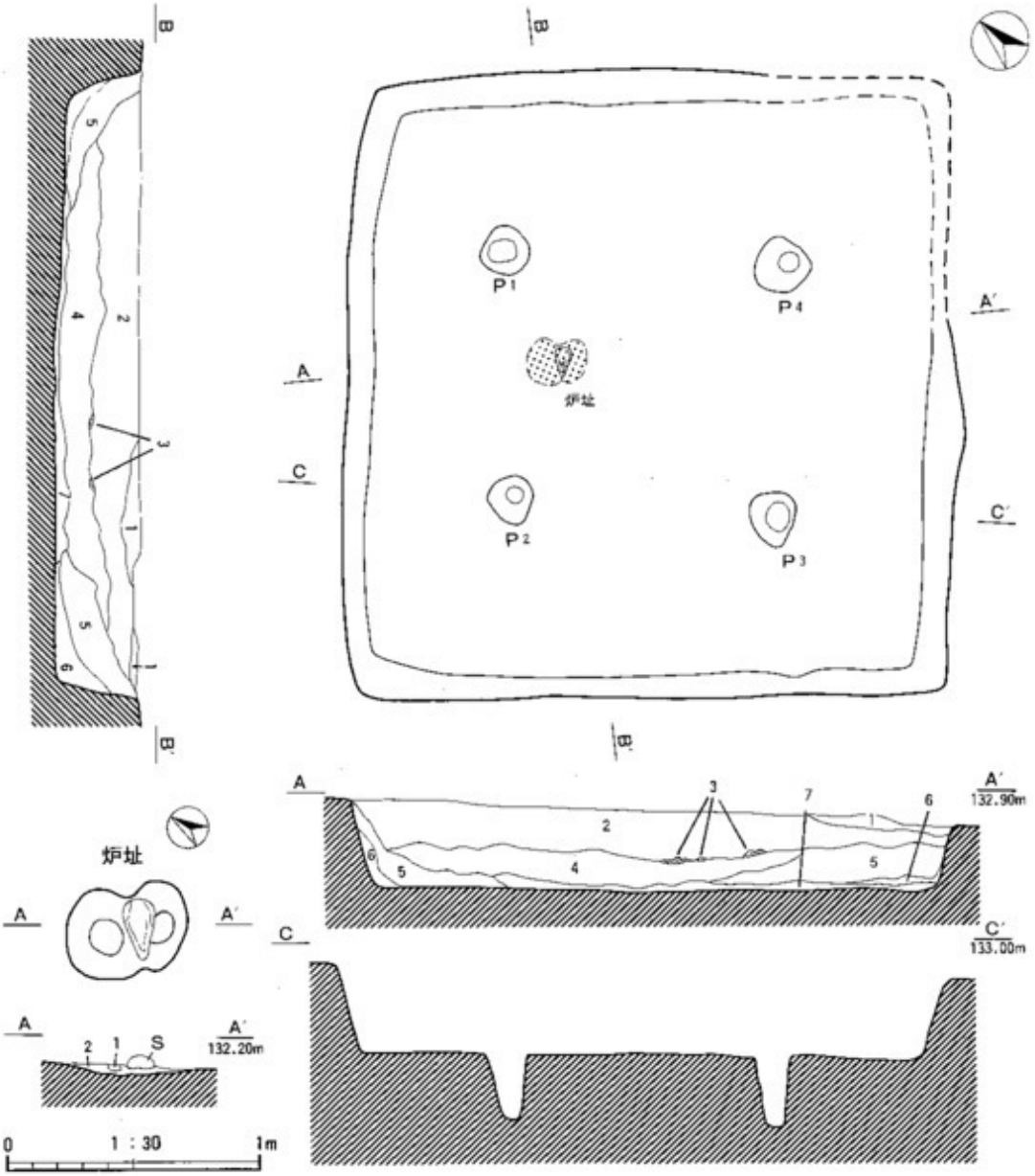


Fig. 14 H—1号住居址



1層　橙色土層（5YR6/8）細砂
焼土。二次的なロームブロック3%含む。しまりあり、粘性ややあり。

2層　褐色土層（10YR4/4）細砂
CP1%、炭化物粒2%、焼土粒10%を含む。しまりあり、粘性ややあり。

1層　暗褐色土層（10YR3/3）細砂
浅間B40%、CP3%程含む。しまり、粘性なし。

2層　黒褐色土層（10YR2/2）細砂
φ2～5のFP5%、φ1～2のCP10%程含む。若干ソフトローム粒もみられる。しまりややあり、粘性なし。

3層　黄褐色土層（10YR5/8）粗砂
FAブロック層。しまり、粘性なし。

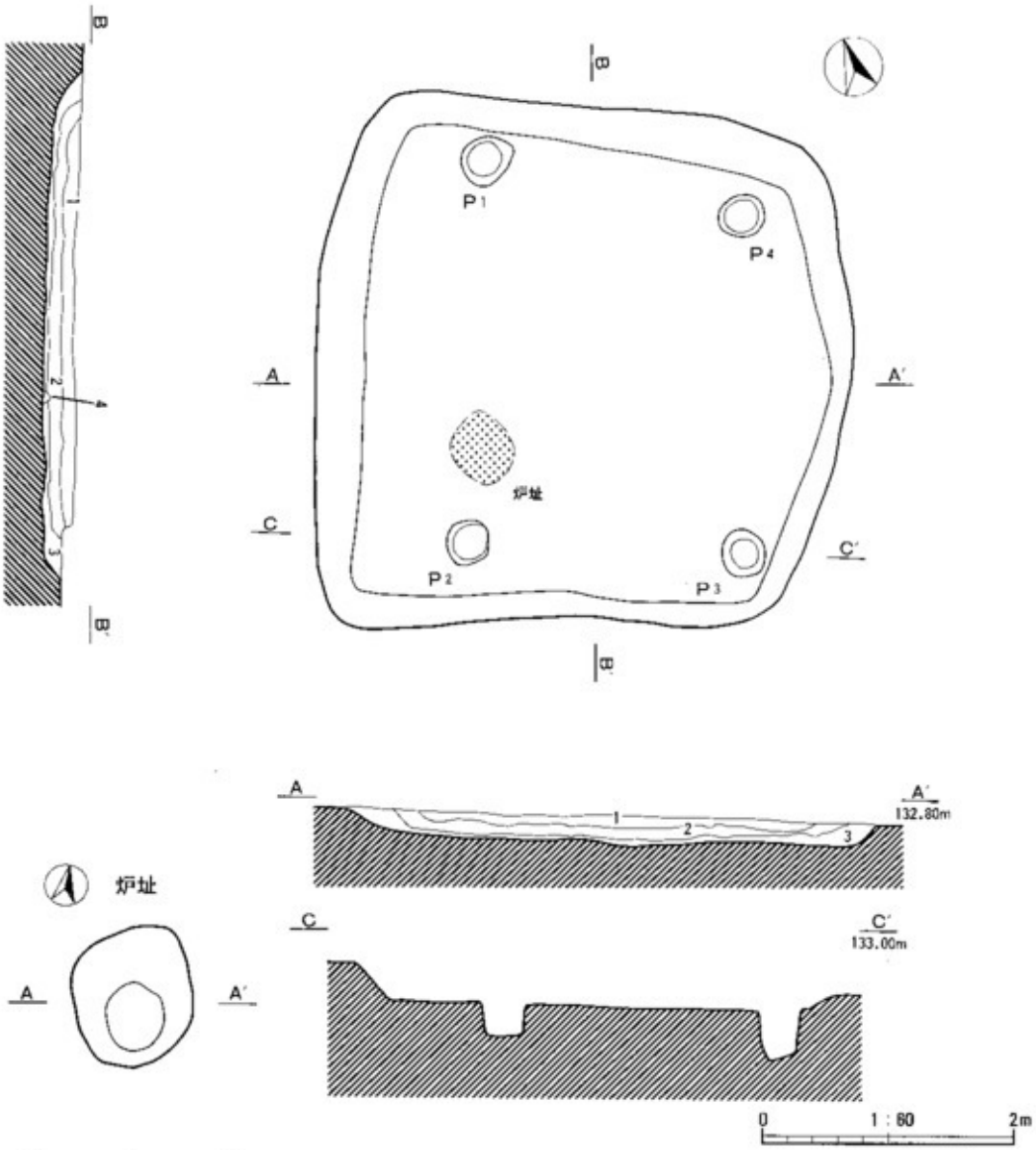
4層　黒色土層（10YR2/1）細砂
φ2～5のFP3%、φ1～2のCP15%程含む。焼土粒も点在する。しまりあり、粘性なし。

5層　暗褐色土層（10YR3/4）細砂
φ2～3のFP1%、φ1～2のCP7%、炭化物1%、焼土粒1%含む。しまり、粘性共にややあり。

6層　褐色土層（10YR4/4）細砂
ロームブロック10%、CP1%、炭化物粒1%含む。粘性共にややあり。

7層　黄褐色土層（10YR5/6）細砂
φ5～10のロームブロック40%、焼土粒3%含む。しまり、粘性ややあり。

Fig. 15 H－2号住居址



1層　暗褐色土層（10YR3/3）細砂
CP1%、二次的ソフトローム粒を若干含む。しまり、粘性共にややあり。

2層　橙色土層（5YR6/8）細砂
焼土。ロームブロック3%を含む。しまりあり、粘性ややあり。

3層　褐色土層（10YR4/4）細砂
φ1のCP1%、炭化物粒3%、焼土粒3%含む。しまりあり、粘性ややあり。

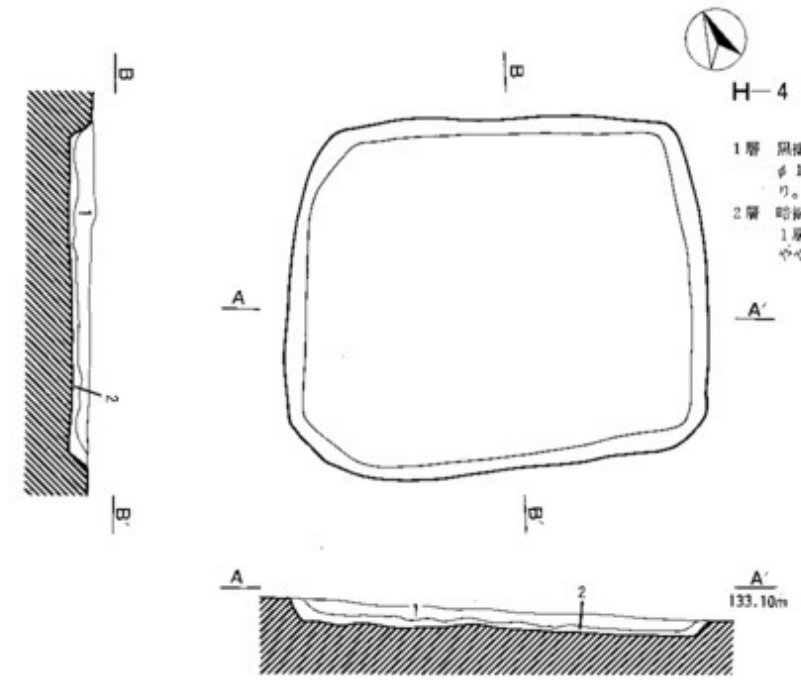
1層　黒褐色土層（10YR2/2）細砂
φ2－3のCP15%を含む。しまり、粘性共にややあり。

2層　黒色土層（10YR2/1）細砂
φ1～2のCP30%含む。しまり、粘性共にややあり。

3層　暗褐色土層（10YR3/4）細砂
2層とソフトロームの混合層。しまり、粘性共にややあり。

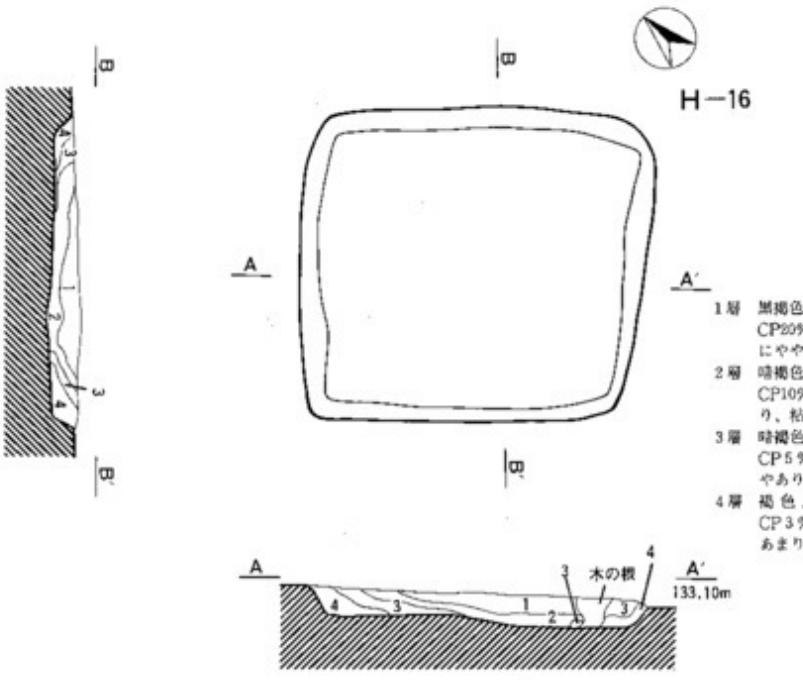
4層　ロームブロック

Fig. 16　H－3号住居址



1層　黒褐色土層（10YR2/3）細砂
φ1－2のCP30%含む。しまり、粘性共にややあり。

2層　暗褐色土層（10YR3/4）細砂
1層とソフトロームの混合層。しまりなし、粘性ややあり。



1層　黒褐色土層（10YR2/2）細砂
CP20%、ソフトローム粒5%含む。しまり、粘性共にややあり。

2層　暗褐色土層（10YR3/3）細砂
CP10%、ローム粒1%、炭化物粒3%含む。しまり、粘性共にややあり。

3層　暗褐色土層（10YR3/4）細砂
CP5%、ローム粒5%含む。しまり、粘性共にややあり。

4層　褐色土層（10YR4/4）細砂
CP3%、ローム粒10%、焼土粒1%含む。粘性はあまりなく、やわらかいがしまっている。

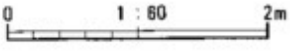
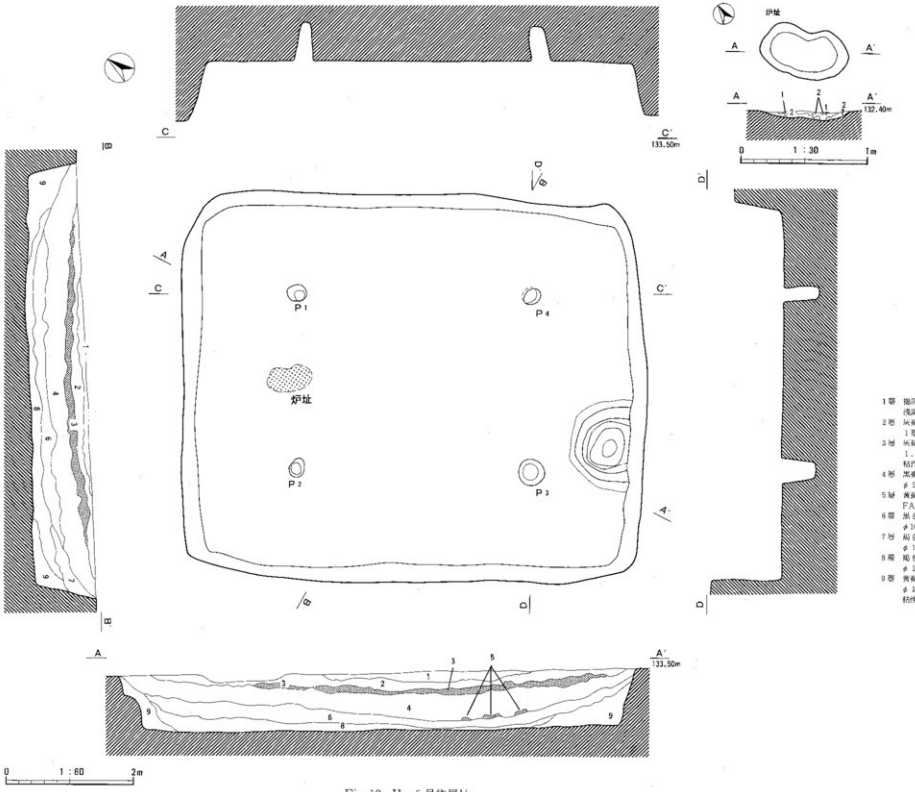


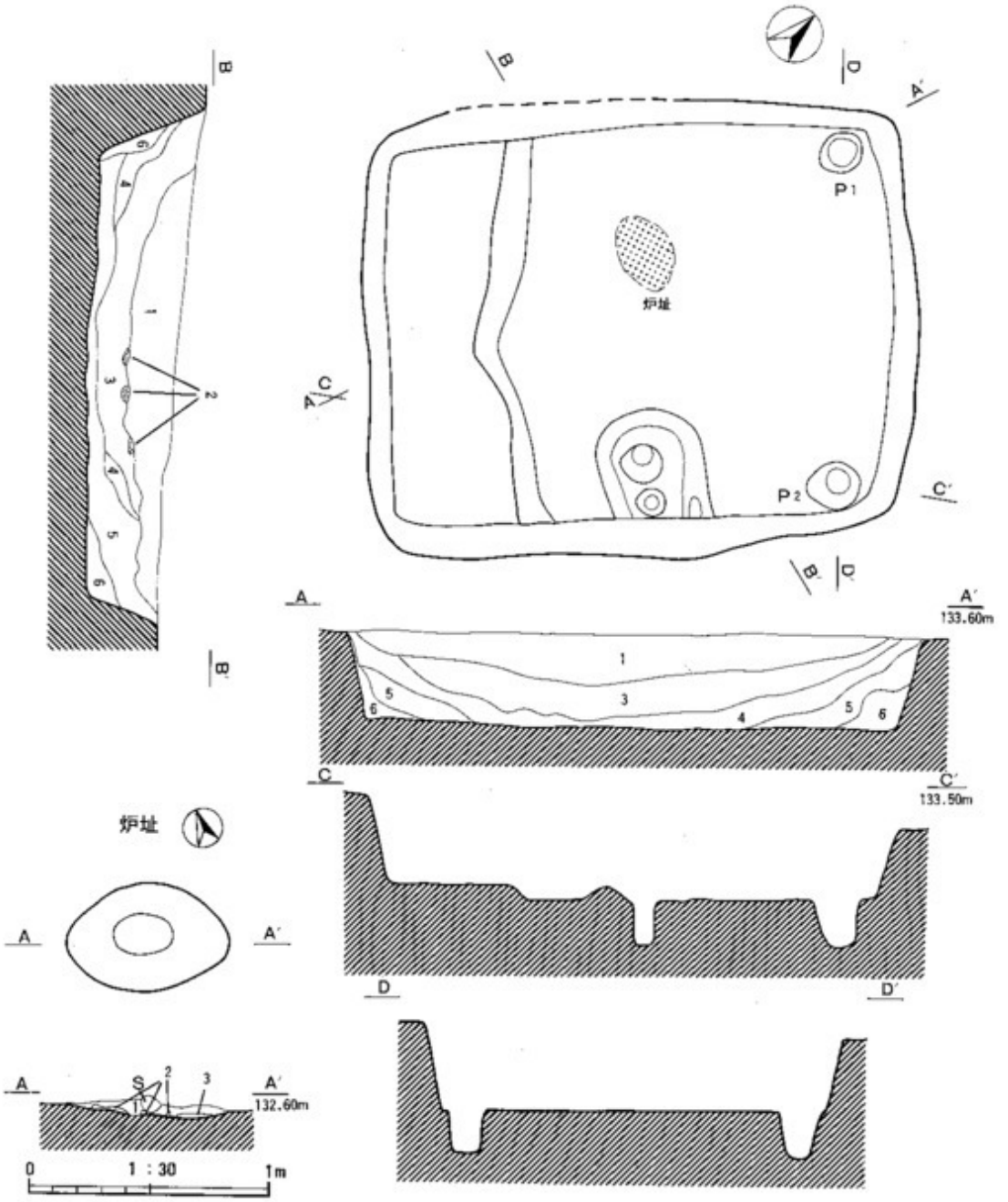
Fig. 17　H－4・16号住居址



1層 褐色土層 (10YR4/4) 細砂
CP1%、炭化物粒1%、焼土粒5%含む。しまりあり、粘性ややあり。
2層 橙色土層 (5YR6/8) 細砂
焼土でロームブロックを3%程含む。しまりあり、粘性ややあり。

1層 褐灰色土層 (7.5YR4/1) 細砂
浅間B層、φ1のCP1%含む。しまり、粘性なし。
2層 灰褐色土層 (7.5YR4/2) 細砂
1層と同じく浅間B層、CP3%含む。しまり、粘性なし。
3層 灰褐色土層 (7.5YR5/2) 細砂
1、2層と同じく浅間B層、Bアッシュ(明褐灰色、(5YR7/2))をブロック状に含む。しまり、粘性なし。
4層 黒褐色土層 (10YR3/1) 細砂
φ5～100のFP10%、φ1～2のCP40%含む。しまりあり、粘性はあまりみられない。
5層 黄褐色土層 (10YR5/6) 粗砂
FAブロック層。しまり、粘性なし。
6層 黒色土層 (10YR2/1) 細砂
φ10～100のFP5%、CP30%、ローム粒1%、炭化物粒1%含む。しまりあり、粘性ややあり。
7層 褐色土層 (10YR4/4) 細砂
φ1のCP30%、炭化物粒1%、焼土粒1%含む。しまり、粘性共にややあり。
8層 褐色土層 (10YR4/6) 細砂
φ1～2のCP10%、炭化物粒5%、ローム粒5%、焼土粒3%含む。しまり、粘性共にややあり。
9層 黄褐色土層 (10YR5/8) 細砂
φ1～2のCP20%、炭化物粒3%、ローム粒1%、焼土粒1%、主体はソフトローム。しまり、粘性共にあまりみられない。

Fig.18 H－5号住居址



1層　黒褐色土層（10YR2/2）細砂
焼土粒5％、炭化物粒3％含む。しまり若干あり。粘性ややあり。

2層　橙色土層（5YR6/8）細砂
焼土である。しまりあり、粘性ややあり。

3層　黄褐色土層（10YR5/8）細砂
焼土粒5％を含む。しまりあり、粘性あり。

1層　黒褐色土層（10YR2/3）細砂
φ1～2のCP30％、φ2～3のFP5％含む。しまりあり、粘性ややあり。

2層　黄褐色土層（10YR5/6）粗砂
FA層。

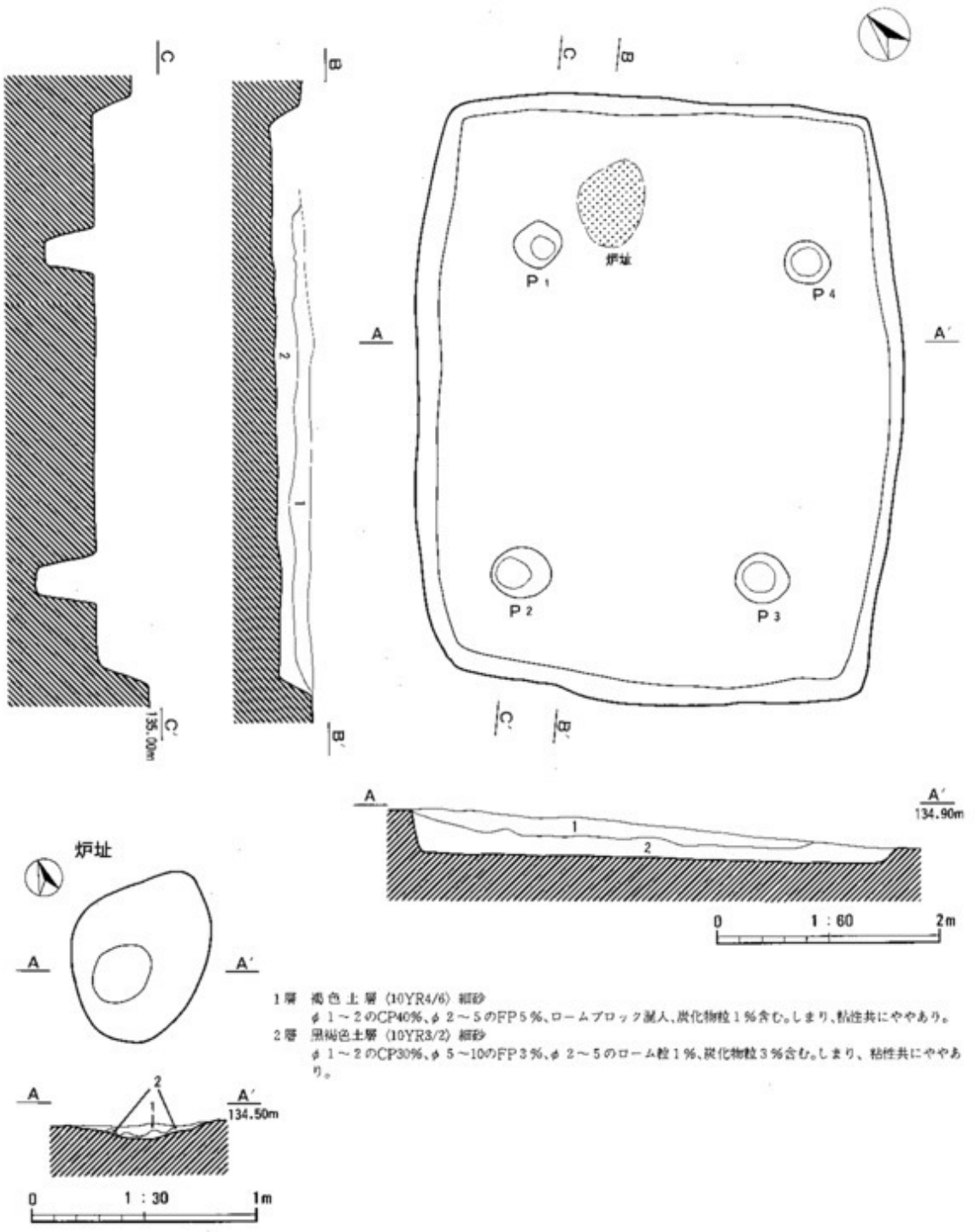
3層　黒色土層（10YR2/1）細砂
φ1～2のCP20％、φ2～3のFP3％含む。しまり、粘性共にややあり。

4層　褐色土層（7.5YR4/4）細砂
φ1のCP7％、φ1～2のローム粒3％含む。しまり、粘性共にややあり。

5層　褐色土層（10YR4/6）細砂
φ1～2のCP5％、φ2～5のローム粒3％、焼土粒1％含む。しまり、粘性共にややあり。

6層　暗褐色土層（10YR3/4）細砂
φ2～10のローム粒5％、CP2％含む。しまりあり、粘性ややあり。

Fig 19　H―6号住居址



1層　褐色土層（10YR4/6）細砂
φ1～2のCP40%、φ2～5のFP5%、ロームブロック混入、炭化物粒1%含む。しまり、粘性共にややあり。

2層　黒褐色土層（10YR3/2）細砂
φ1～2のCP30%、φ5～10のFP3%、φ2～5のローム粒1%、炭化物粒3%含む。しまり、粘性共にややあり。

1層　橙色土層（5YR6/8）細砂
ロームブロック3%含む。焼土。しまりあり、粘性ややあり。

2層　褐色土層（7.5YR4/4）細砂
焼土粒5%含む。しまり、粘性共にややあり。

Fig.20　H－8号住居址

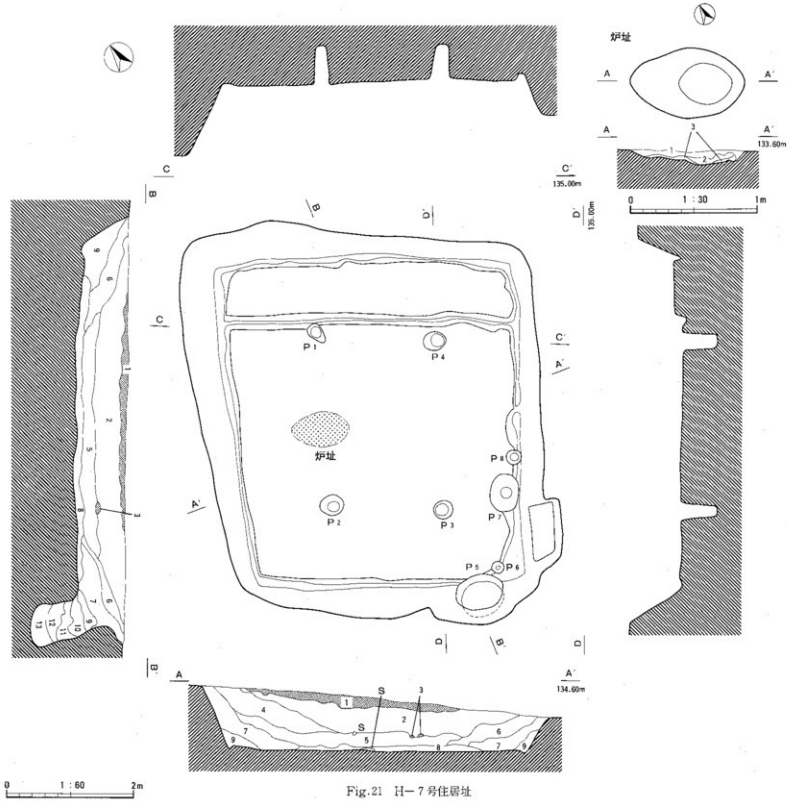
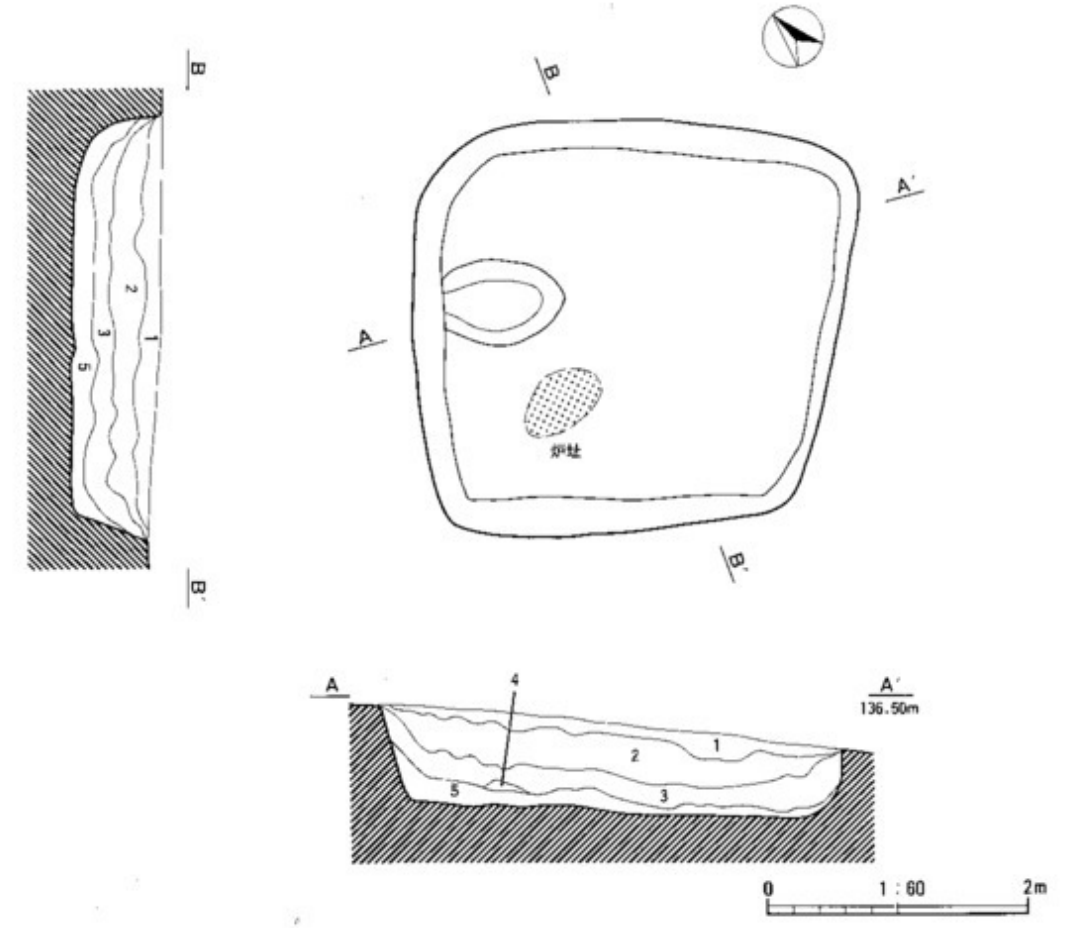
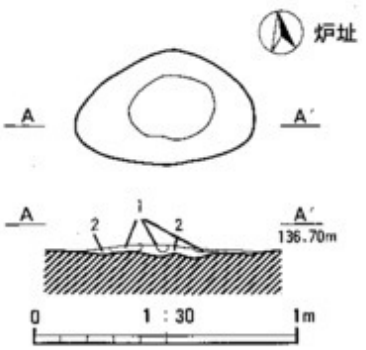


Fig.21 H－7号住居址

1層 黒褐色土層（10YR2/2）細砂
焼土粒10%、炭化物粒5%含む。しまり、粘性共にややあり。
2層 粒色土層（5YR6/8）細砂
焼土の中に若干ロームブロックが含まれる。しまりあり、粘性ややあり。
3層 黄褐色土層（10YR5/8）細砂
焼土粒7%程含む。しまりあり、粘性あり。

1層 灰褐色土層（7.5YR5/2）細砂
浅間B層を主体にBアッシュ（明褐灰色、5YR7/2）をブロック状に含む。しまり、粘性なし。
2層 黒褐色土層（10YR3/1）細砂
φ5～100のFP10%、φ1～2のCP40%含む。しまりあり、粘性はあまりみられない。
3層 FAブロック
4層 褐色土層（10YR4/6）細砂
φ1～2のCP7%、ローム粒5%含む。しまり、粘性共にややあり。
5層 黒色土層（10YR2/1）細砂
φ10～100のFP5%、CP30%、ローム粒1%、炭化物粒1%含む。しまりあり、粘性ややあり。
6層 黒褐色土層（10YR2/3）細砂
φ1～5のCP5%、FA混入あり。しまり、粘性共にあり。
7層 黄褐色土層（10YR5/8）細砂
ソフトロームを主体にφ1～2のCP20%、炭化物粒3%、ローム粒1%、焼土粒1%含む。しまり、粘性共にあまりみられない。
8層 黒褐色土層（10YR2/2）細砂
φ1のCP1%、ソフトローム粒混入。やわらかいがしまりあり、粘性ややあり。
9層 褐色土層（10YR4/4）細砂
CP10%、ソフトローム粒5%含む。しまり、粘性共にややあり。
10層 褐色土層（10YR4/6）細砂
ローム粒1%含む。しまり、粘性あまりなし。
11層 黒褐色土層（10YR2/3）細砂
ローム粒3%含む。しまり若干あり。粘性あり。
12層 褐色土層（10YR4/4）細砂
細かいローム粒5%混入、CP1%含む。しまり、粘性共にややあり。
13層 にぶい黄褐色土層（10YR4/4）細砂
ロームブロック30%混入、CP1%含む。しまり、粘性共にややあり。

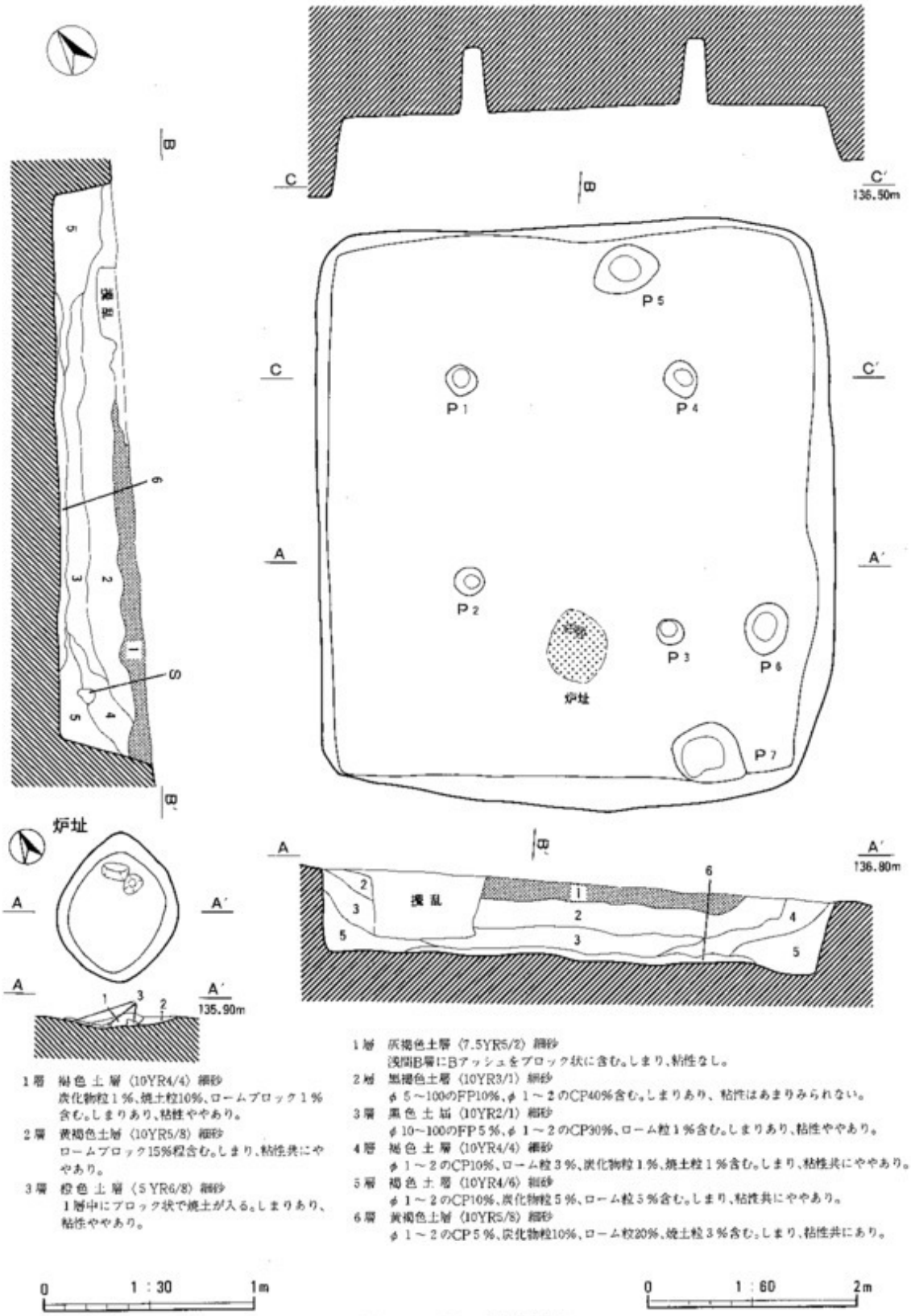




1層　暗褐色土層（10YR3/3）細砂
　φ1～3のCPを5～7%程度含む。しまりよくかたい、粘性ややあり。
2層　褐色土層（10YR4/6）細砂
　φ1～3のCP5%、ソフトローム粒を少々含む。砂っぽく、粘性ややあり。
3層　暗褐色土層（10YR3/4）細砂
　φ1～3のCP2%、部分的にCP集中。やわらかいがしまりあり、粘性ややあり。
4層　3層と同じ
　基本的には、3層であるが、φ15のハードローム粒40%含む。
5層　黒褐色土層（10YR2/2）細砂
　φ1～3のCP1%、ハードローム少量含む。やわらかいがしまりあり、粘性あり。

1層　橙色土層（5YR6/8）細砂
　焼土中にロームブロックを3%程含む。しまりあり、粘性ややあり。
2層　褐色土層（7.5YR4/4）細砂
　焼土粒5%含む。しまり、粘性共にややあり。

Fig.22　H－9号住居址



1層　褐色土層〈10YR4/4〉細砂
炭化物粒1%、焼土粒10%、ロームブロック1%含む。しまりあり、粘性ややあり。

2層　黄褐色土層〈10YR5/8〉細砂
ロームブロック15%程含む。しまり、粘性共にややあり。

3層　橙色土層〈5YR6/8〉細砂
1層中にブロック状で焼土が入る。しまりあり、粘性ややあり。

1層　灰褐色土層〈7.5YR5/2〉細砂
浅間B層にBアッシュをブロック状に含む。しまり、粘性なし。

2層　黒褐色土層〈10YR3/1〉細砂
φ5～10のFP10%、φ1～2のCP40%含む。しまりあり、粘性はあまりみられない。

3層　黒色土層〈10YR2/1〉細砂
φ10～100のFP5%、φ1～2のCP30%、ローム粒1%含む。しまりあり、粘性ややあり。

4層　褐色土層〈10YR4/4〉細砂
φ1～2のCP10%、ローム粒3%、炭化物粒1%、焼土粒1%含む。しまり、粘性共にややあり。

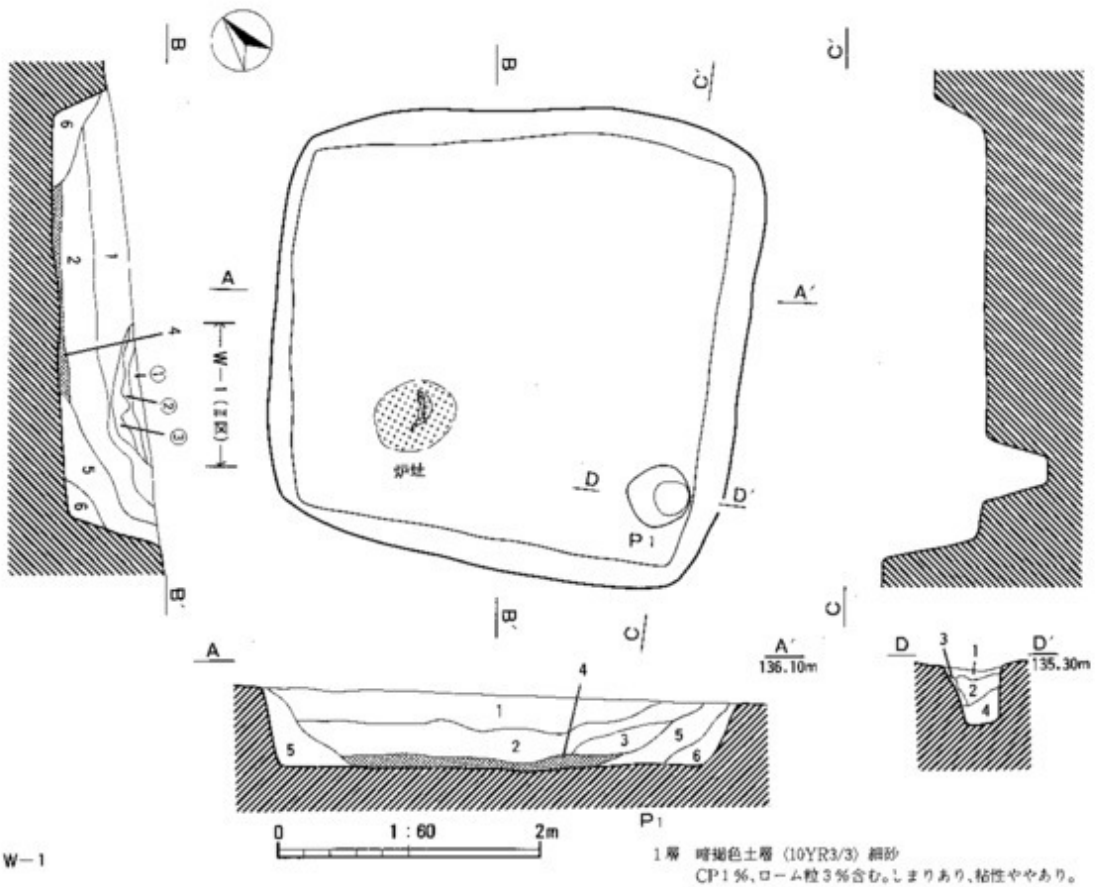
5層　褐色土層〈10YR4/6〉細砂
φ1～2のCP10%、炭化物粒5%、ローム粒5%含む。しまり、粘性共にややあり。

6層　黄褐色土層〈10YR5/8〉細砂
φ1～2のCP5%、炭化物粒10%、ローム粒20%、焼土粒3%含む。しまり、粘性共にあり。

0　1：30　1m

0　1：60　2m

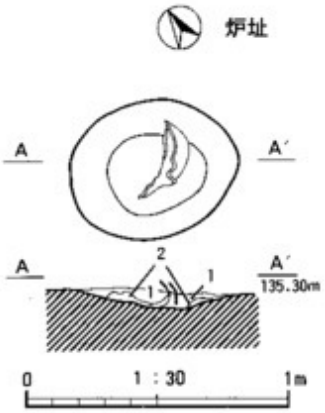
Fig.23　H−10号住居址



W－1

1層　にぶい褐色土層〈7.5YR5/4〉細砂
φ1のCP20%、浅間B軽石20%含む。しまり、粘性なし。
2層　褐色土層〈7.5YR4/3〉細砂
浅間B軽石を主体にCP20%含む。しまり、粘性なし。
3層　暗褐色土層〈7.5YR3/3〉細砂
φ1～2のCP30%、浅間B軽石10%、FP5%含む。しまりややあり、粘性なし。

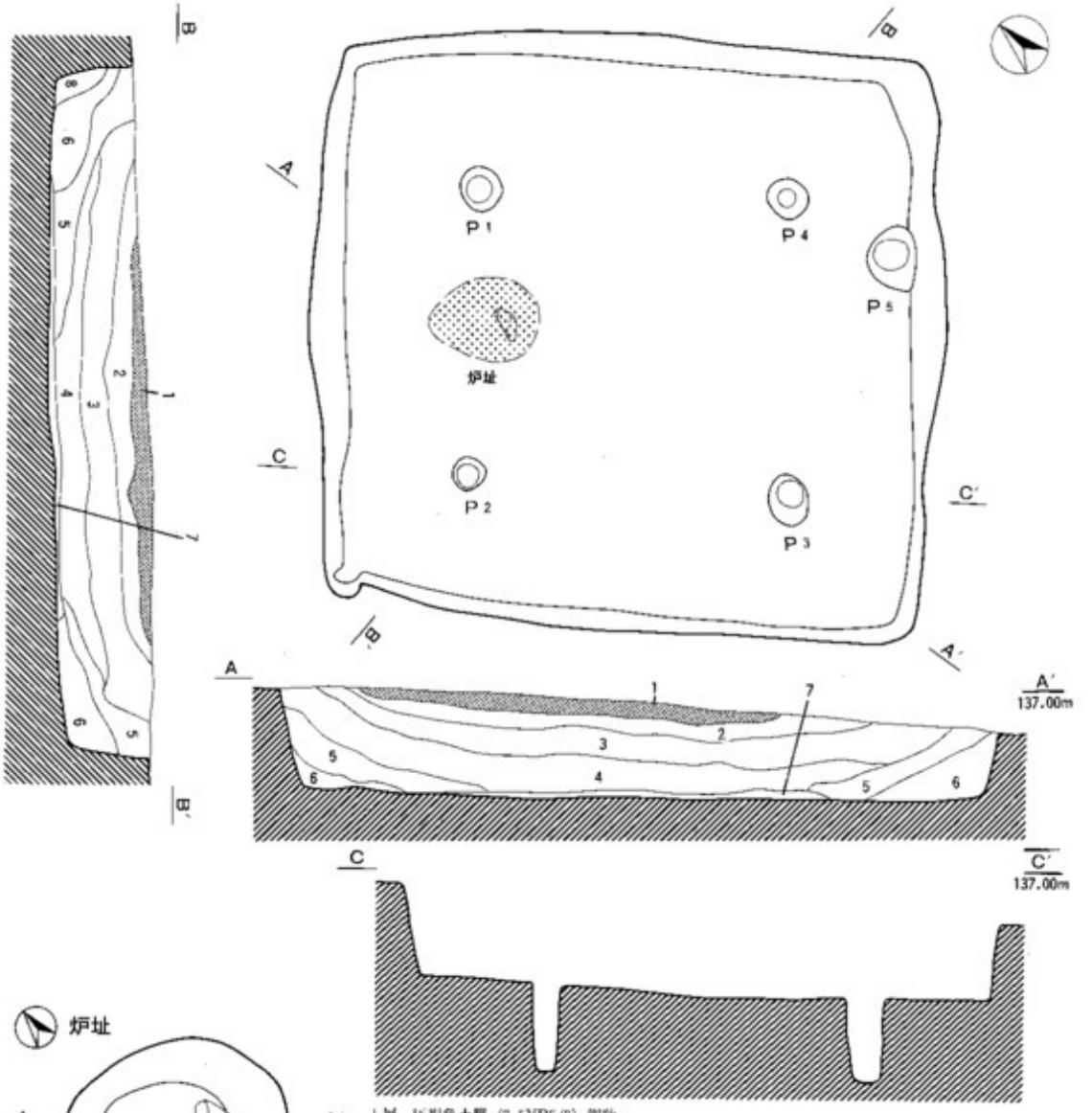
1層　暗褐色土層〈10YR3/3〉細砂
CP1%、ローム粒3%含む。しまりあり、粘性ややあり。
2層　褐色土層〈10YR3/4〉細砂
CP3%、ローム粒5%含む。しまり若干あり、粘性ややあり。
3層　黄褐色土層〈10YR5/6〉細砂
ロームブロック
4層　褐色土層〈10YR4/6〉細砂
CP1%、ローム粒3%含む。しまり若干あり、粘性ややあり。

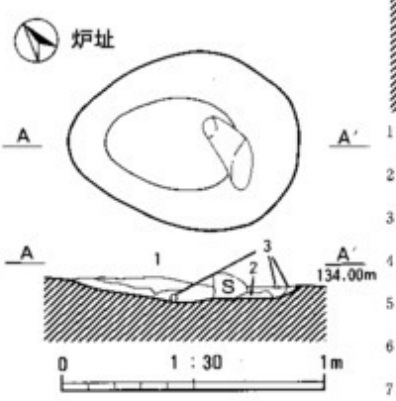


1層　黒褐色土層〈10YR3/1〉細砂
φ5～100のFP10%、φ1～2のCP40%含む。しまりあり、粘性はあまりみられない。
2層　黒色土層〈10YR2/1〉細砂
φ10～100のFP5%、CP30%、ローム粒1%、炭化物粒1%含む。しまりあり、粘性ややあり。
3層　褐色土層〈10YR4/6〉細砂
φ1～2のCP10%、炭化物粒5%、ローム粒5%含む。しまり、粘性共にややあり。
4層　黄褐色土層〈10YR5/6〉粗砂
FAブロック層。しまり、粘性なし。
5層　褐色土層〈10YR4/4〉細砂
φ1のCP30%、炭化物粒1%、焼土粒1%含む。しまり、粘性共にややあり。
6層　黄褐色土層〈10YR5/8〉細砂
ソフトロームを主体にφ1～2のCP5%、炭化物粒10%、焼土粒3%含む。しまり、粘性共にあり。

1層　褐色土層〈10YR4/4〉細砂
φ1のCP3%、炭化物粒1%、焼土粒5%含む。しまりあり、粘性ややあり。
2層　橙色土層〈5YR6/8〉細砂
焼土中にロームブロック3%を含む。しまりあり、粘性ややあり。

Fig.24　H－11号住居址





1層　灰褐色土層（7.5YR5/2）細砂
浅間B層にBアッシュをブロック状に含む。しまり、粘性なし。

2層　褐色土層（10YR4/6）細砂
CP15%、浅間B40%、炭化物粒20%含む。しまり、粘性共になし。

3層　黒褐色土層（10YR3/1）細砂
φ5～100のFP10%、φ1～2のCP40%含む。しまりあり、粘性はあまりみられない。

4層　黒色土層（10YR2/1）細砂
φ10～100のFP5%、CP30%、ローム粒1%含む。しまりあり、粘性ややあり。

5層　褐色土層（10YR4/4）細砂
φ1のCP30%、炭化物粒1%、焼土粒1%含む。しまり、粘性共にややあり。

6層　黄褐色土層（10YR5/8）細砂
ソフトロームを主体にφ1～2のCP5%、炭化物粒10%、焼土粒3%含む。しまり、粘性共にあり。

7層　黄褐色土層（10YR5/6）細砂
ロームブロックを主体にCP10%、炭化物粒5%、焼土粒5%含む。しまりあり、粘性ややあり。

8層　明黄褐色土層（10YR6/8）細砂
ハードロームブロック40%、ソフトロームブロック30%、CP5%含む。しまりあり、粘性ややあり。

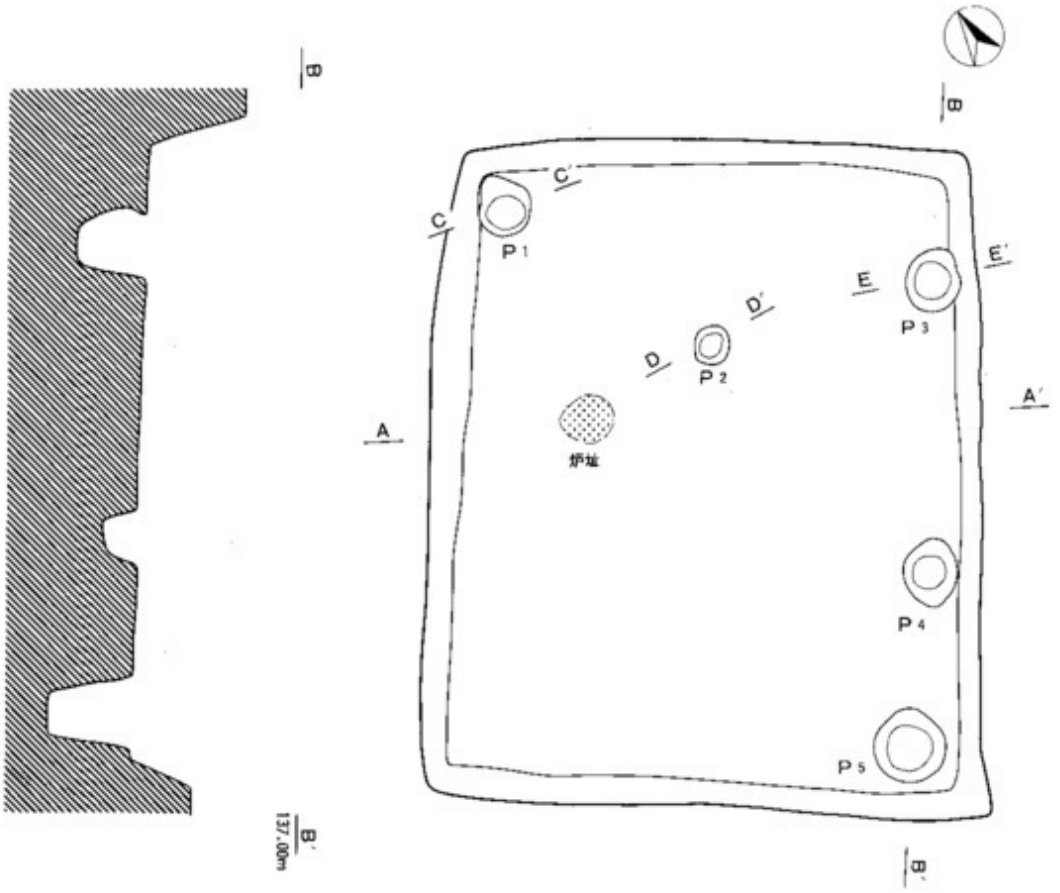
1層　暗褐色土層（10YR3/4）細砂
CP3%、焼土粒1%、炭化物粒3%を含む。しまりあり、粘性ややあり。

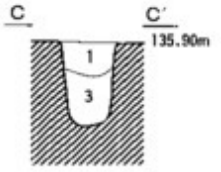
2層　赤褐色土層（5YR4/6）細砂
CP1%、焼土粒5%、炭化物粒1%を含む。しまり、粘性共にややあり。

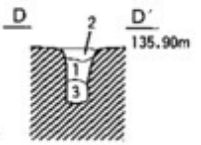
3層　橙色土層（5YR6/8）細砂
焼土。しまりあり、粘性ややあり。

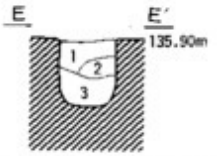
0　1 : 60　2m

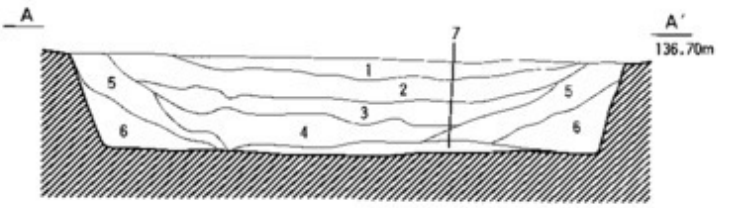
Fig.25　H—12号住居址











1層　暗褐色土層（10YR3/4）細砂
φ1～2のCP15%、φ2～5のFP5%、FAブロックをシミ状に含む。しまりあり、粘性なし。

2層　黒褐色土層（10YR3/1）細砂
φ1～2のCP40%、φ5～10のFP10%、FAブロック20%含む。しまり、粘性共にあり。

3層　黒褐色土層（10YR3/2）細砂
φ1～2のCP30%、φ2～5のFP7%、FAブロック20%含む。しまり、粘性あり。

4層　黒色土層（10YR2/1）細砂
φ1～2のCP30%、φ2～5のFP2%、焼土粒3%、炭化物粒5%、ローム粒1%含む。しまり、粘性共にややあり。

5層　褐色土層（10YR4/4）細砂
φ1～2のCP30%、FP7%、炭化物粒3%、FAがシミ状に入る。しまり、粘性共にややあり。

6層　褐色土層（10YR4/6）細砂
φ1のCP15%、ロームブロック3%、炭化物粒2%含む。壁の崩落層と思われる。しまりあり、粘性ややあり。

7層　暗褐色土層（10YR3/3）細砂
φ5～10のローム粒5%、CP3%、焼土粒5%、炭化物粒5%含む。しまりあり、粘性ややあり。

1層　褐色土層（10YR4/6）細砂
CP3%、ローム粒1%含む。しまり、粘性なし。

2層　黒褐色土層（10YR3/2）細砂
CP5%、ローム粒3%、炭化物粒1%含む。しまり、粘性共にややあり。

3層　褐色土層（10YR4/4）細砂
CP1%、ローム粒5%含む。しまりややあり、粘性なし。

0　1：60　2m

Fig.26　H—13号住居址

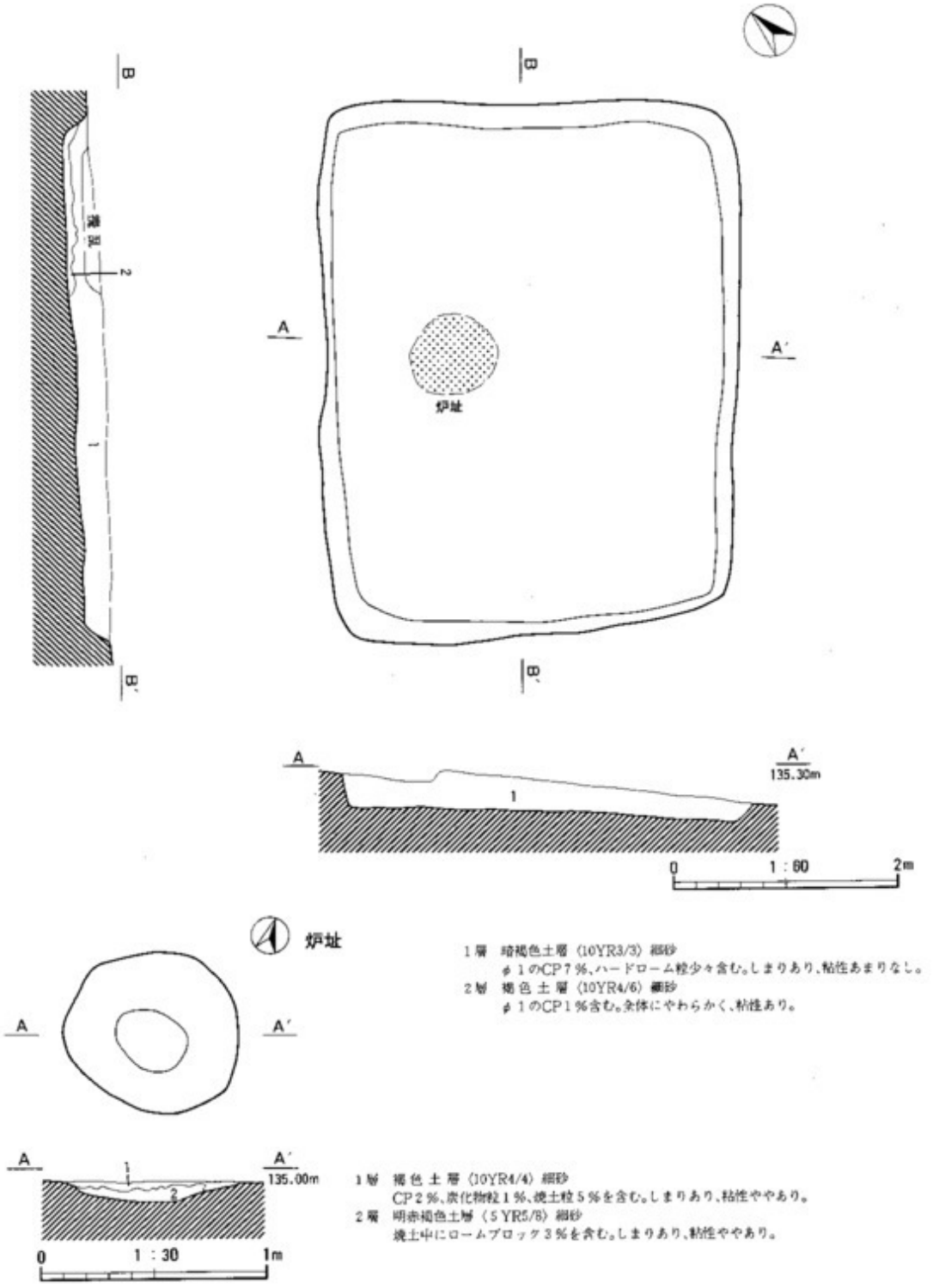
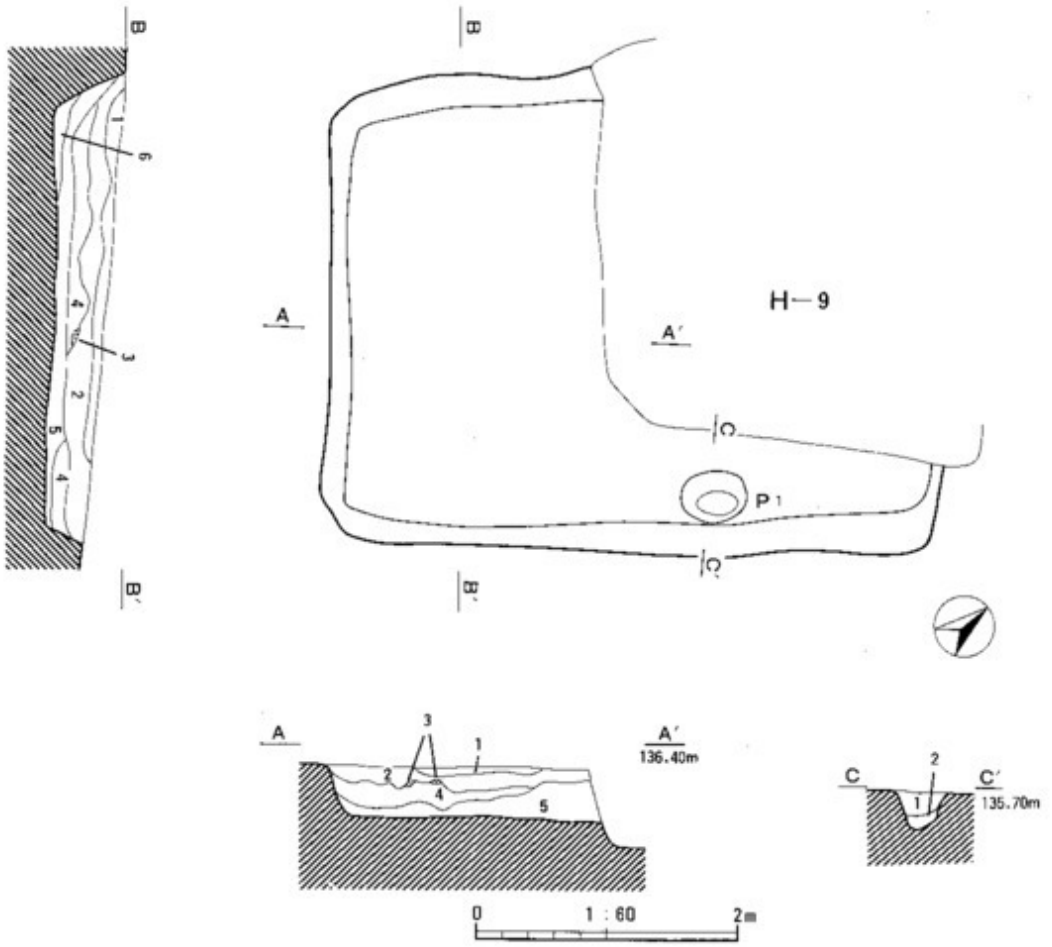


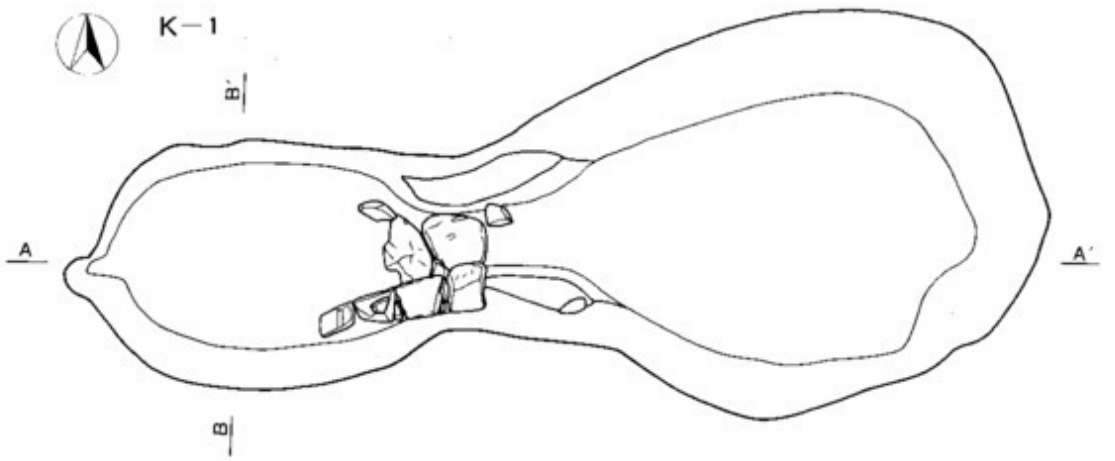
Fig.27 H—14号住居址

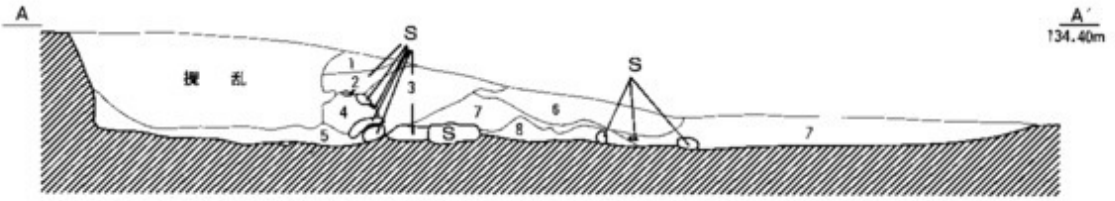


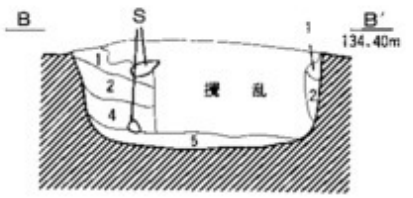
1層　暗褐色土層（10YR3/3）細砂
φ1～2のCP50%、FP2%、脱土粒1%含む。しまりあり、粘性なし。
2層　褐色土層（10YR4/6）細砂
CP40%、ソフトローム粒10%、炭化物粒1%含む。しまりあり、粘性ややあり。
3層　黄褐色土層（10YR5/6）粗砂
FA純層、ブロック状に入る。
4層　黒褐色土層（10YR3/2）細砂
φ1のCP50%、ソフトローム粒5%、炭化物粒5%含む。しまり、粘性共にややあり。
5層　黄褐色土層（10YR5/8）細砂
ソフトローム主体にハードロームブロック30%、CP10%、炭化物粒5%含む。しまり、粘性共にややあり。
6層　暗褐色土層（10YR3/4）細砂
φ1のCP5%、炭化物粒5%、ハードローム粒1%含む。しまり、粘性共にややあり。

1層　褐色土層（10YR4/4）細砂
CP3%、炭化物粒1%含む。しまり、粘性なし。
2層　褐色土層（10YR4/6）細砂
CP1%、ローム粒5%含む。しまり粘性共にややあり。

Fig.28　H—15号住居址







1層　にぶい褐色土層〈7.5YR5/4〉細砂
全体的に砂っぽくφ1の焼土が点在する。またφ1～2の炭化物とCPが若干入る。

2層　橙色土層〈5YR6/8〉粗砂
全体に焼土が混じる。φ2のCP1%と若干の炭化物が見られる。粘性はなく、やわらかいがしまっている。

3層　灰褐色土層〈5YR4/2〉細砂
2層に灰がブロック状に20%程入る。特に上部に多い。

4層　明赤褐色土層〈5YR5/8〉細砂
2層と同質ではあるが炭化物はほとんどみられない。焼けた粘土が20%程混入している。

5層　赤褐色土層〈2.5YR4/8〉細砂
この層が一番焼けている。粘土が50%、炭化物が中間部にしま状に入る。粘性はない。

6層　橙色土層〈5YR6/8〉細砂
暗赤褐色土層〈5YR3/2〉と灰がまじり拳大の焼けた粘土が入る。φ1のCP、φ2の炭化物も混入している。

7層　黒色土層〈5YR1.7/1〉細砂
炭化物と灰に粗砂が混じる。拳大の焼けた粘土が入る。

8層　黒色土層〈10YR1.7/1〉細砂
灰と炭化物の層。しまり、粘性なし。

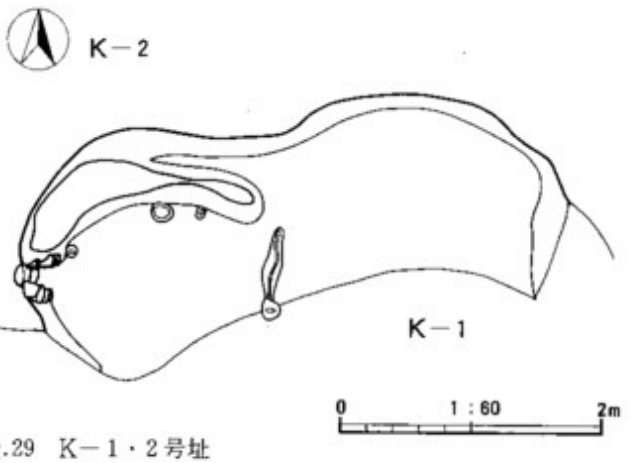
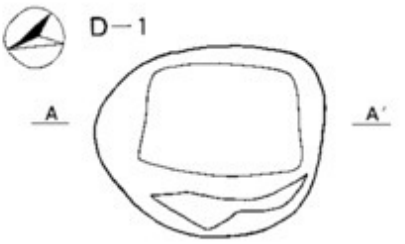
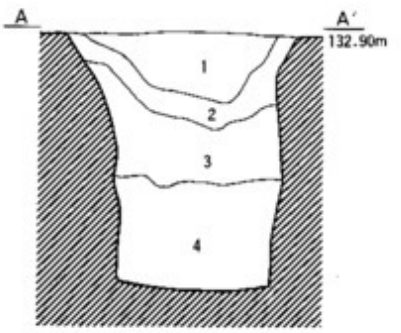
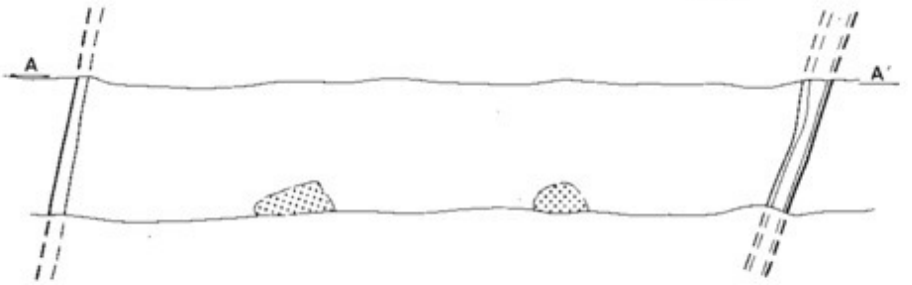


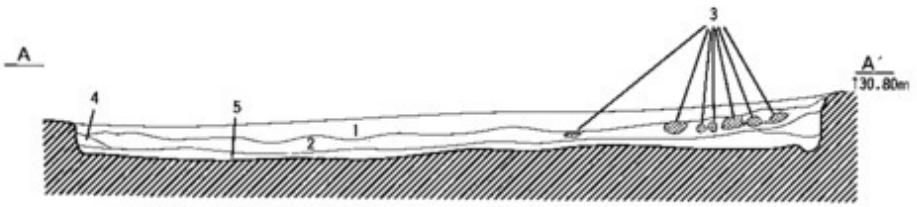
Fig.29　K－1・2号址





1層　黒褐色土層（10YR3/1）細砂
CP30%、FP10%、ソフトローム粒５%を含む。しまりあり、粘性なし。
2層　褐色土層（10YR4/4）細砂
CP10%、YP５%、ロームブロック５%を含む。しまりややあり、粘性なし。
3層　暗褐色土層（10YR3/4）細砂
φ10～20のハードロームブロック30%を含む。しまり、粘性共にややあり。
4層　黄褐色土層（10YR5/6）細砂
ハードロームブロック40%含む。しまり、粘性共にややあり。

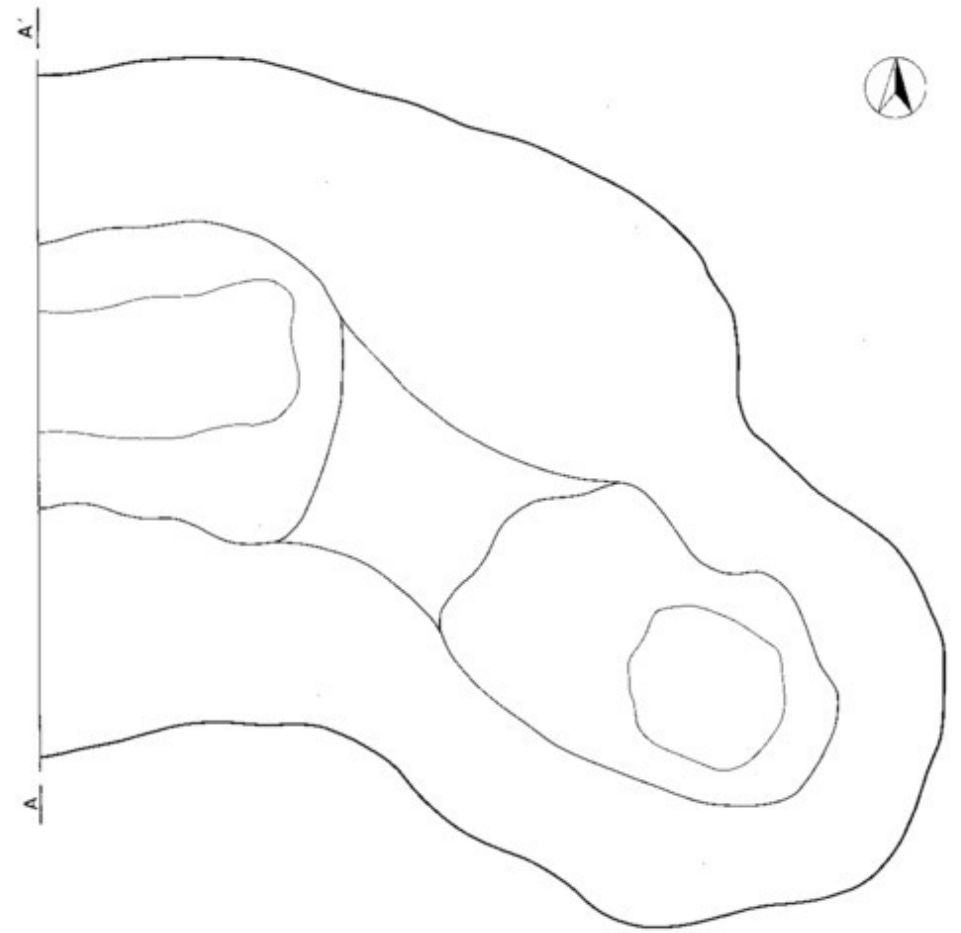


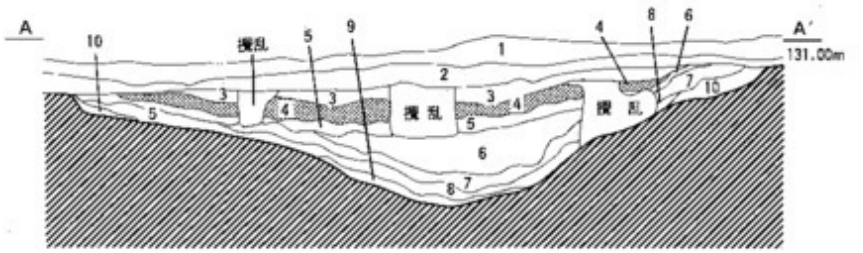


1層　黒褐色土層（10YR3/2）細砂
φ１～２のCP30%、ソフトローム粒３%含む。しまりあり、粘性ややあり。
2層　黄褐色土層（10YR5/6）細砂
CP40%、炭化物粒５%を含む。CPを多く含みしまり、粘性共にあまりみられない。
3層　浅黄色土層（５Y7/3）粘砂
CP純層、しまり、粘性なし。
4層　暗褐色土層（10YR3/3）細砂
CP１%、炭化物粒10%含む。しまり、粘性共にややあり。
5層　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）細砂
炭化物粒20%、焼土粒３%含む。しまり、粘性共にややあり。

0　1：60　2m

Fig 30　D－1（Ⅱ区）　H－1号住居址（Ⅲ区）





1層　基本層序Ⅰ
2層　基本層序Ⅱ
3層　褐灰色土層〈7.5YR4/1〉細砂
　2層、4層との混合層で浅間B軽石を40%程含む。しまり、粘性なし。
4層　灰褐色土層〈7.5YR4/2〉細砂
　浅間B軽石。しまり、粘性なし。
5層　にぶい褐色土層〈7.5YR5/3〉細砂
　浅間B軽石50%　Bアッシュ40%含む。しまりややあり、粘性なし。
6層　黒色土層〈10YR2/1〉細砂
　浅間B軽石10%、CP1%含む。しまり、粘性共にややあり。
7層　褐色土層〈10YR4/4〉細砂
　CP3%、ローム粒5%含む。粘性はみられるがしまりはない。
8層　黄褐色土層〈10YR5/6〉細砂
　ローム粒30%、CP1%含む。しまり、粘性共にややあり。
9層　にぶい黄褐色土層〈10YR5/4〉細砂
　ローム粒10%含む。しまり、粘性共にややあり。
10層　褐色土層〈10YR5/4〉細砂
　CP1%、ローム粒3%含む。しまりあり、粘性あまりなし。

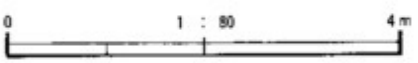


Fig.31　W－1号溝(Ⅵ区)

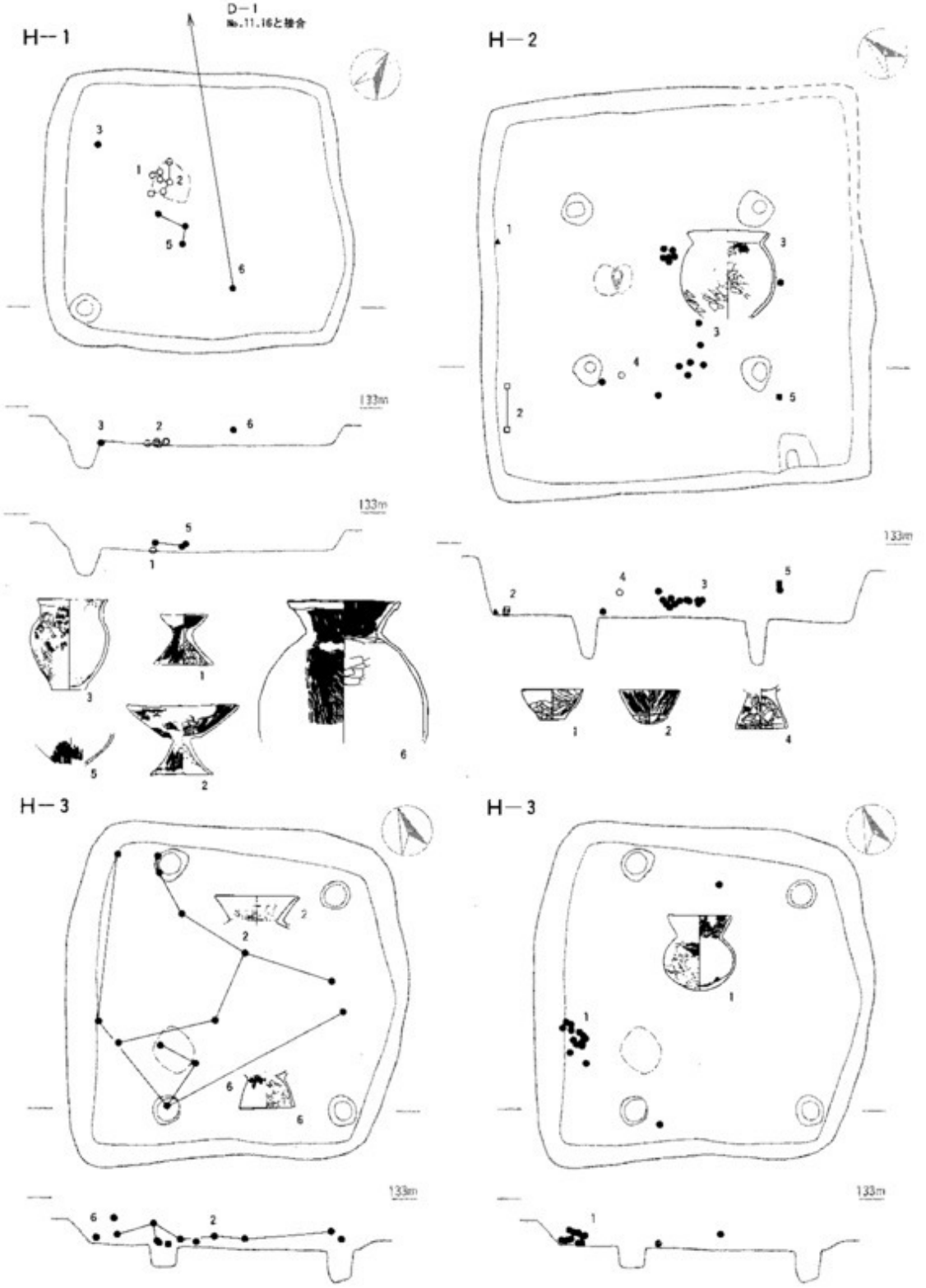


Fig.32　H－1・2・3遺物出土状況

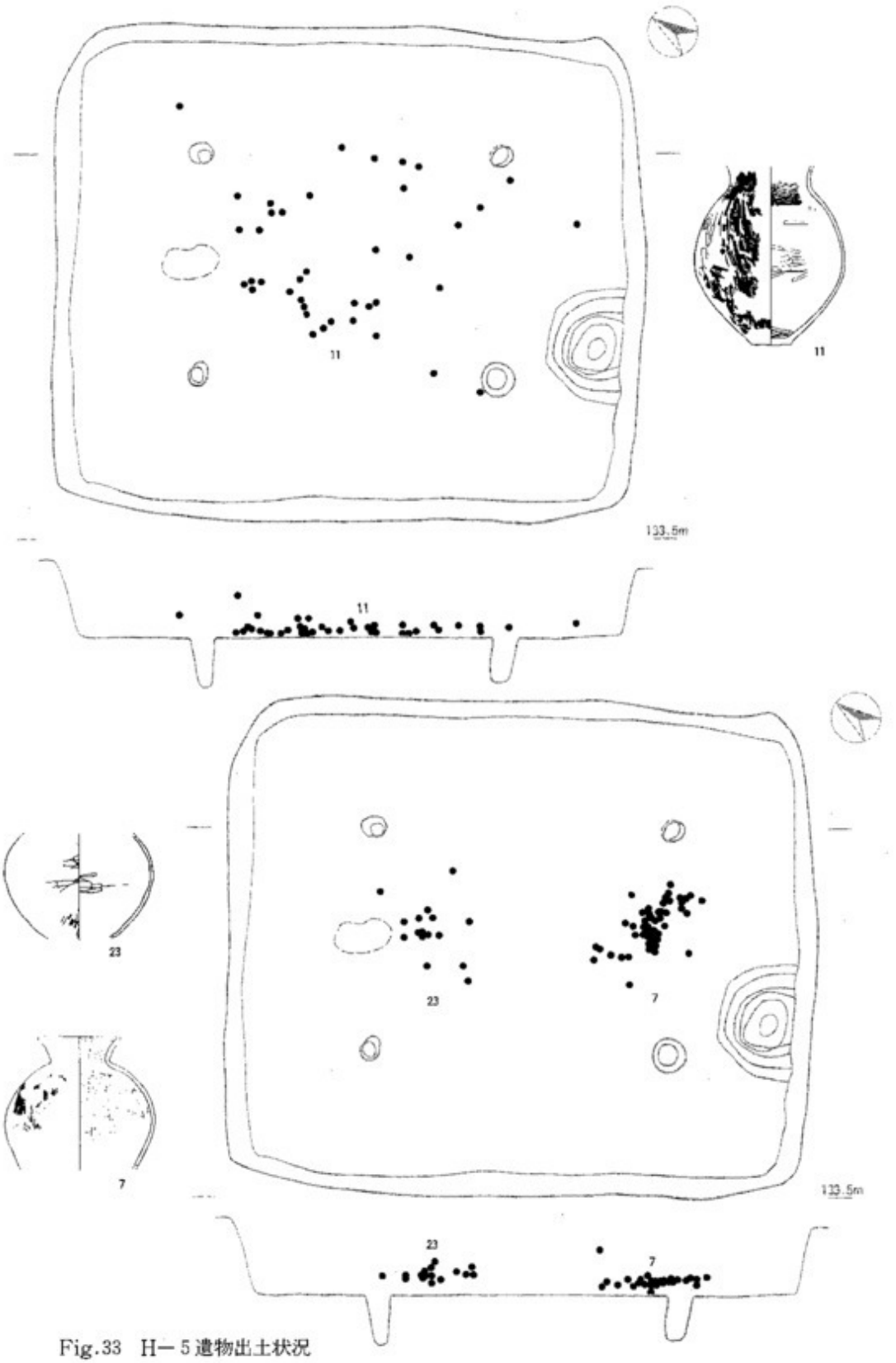


Fig.33　H－5遺物出土状況

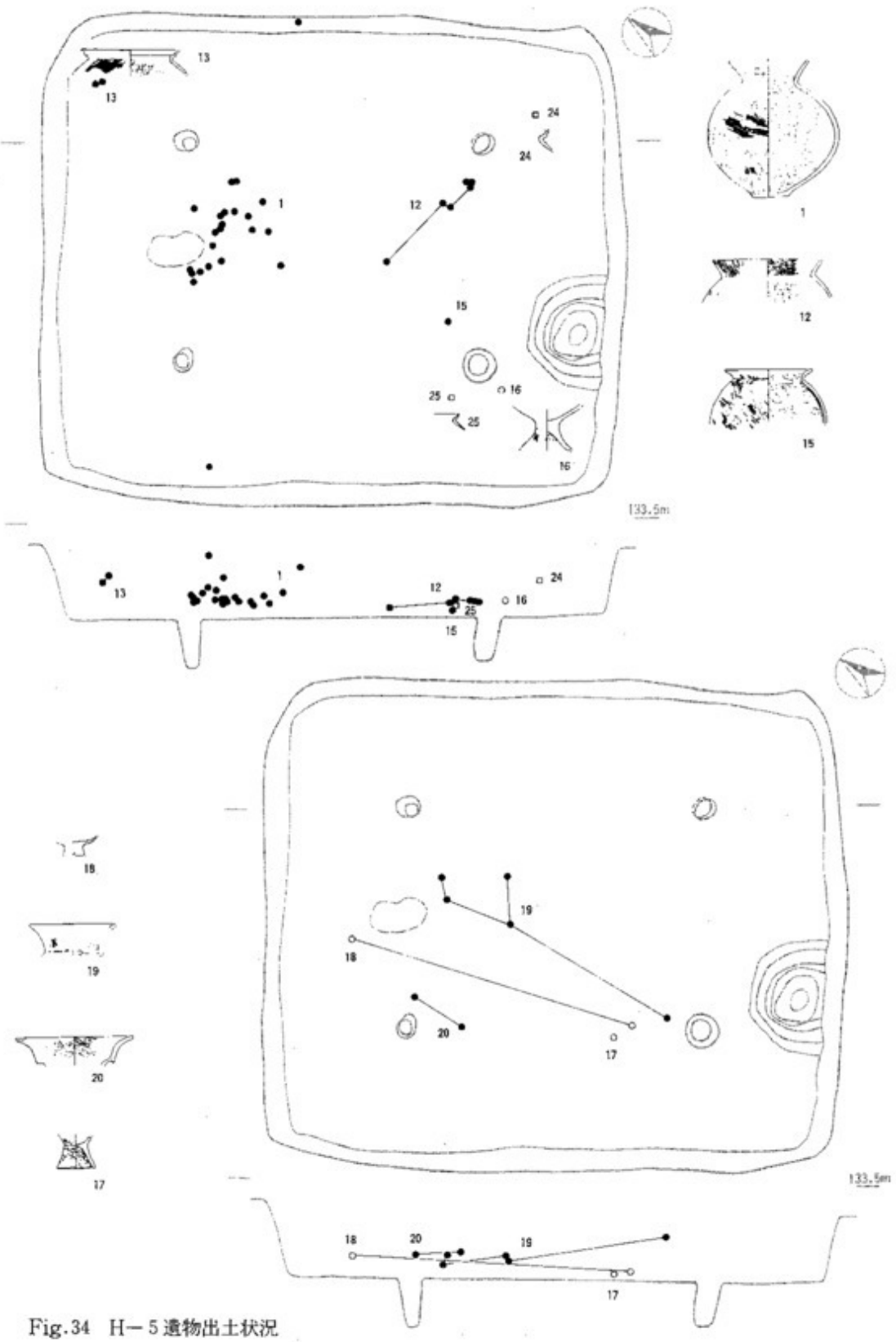


Fig.34　H－5遺物出土状況

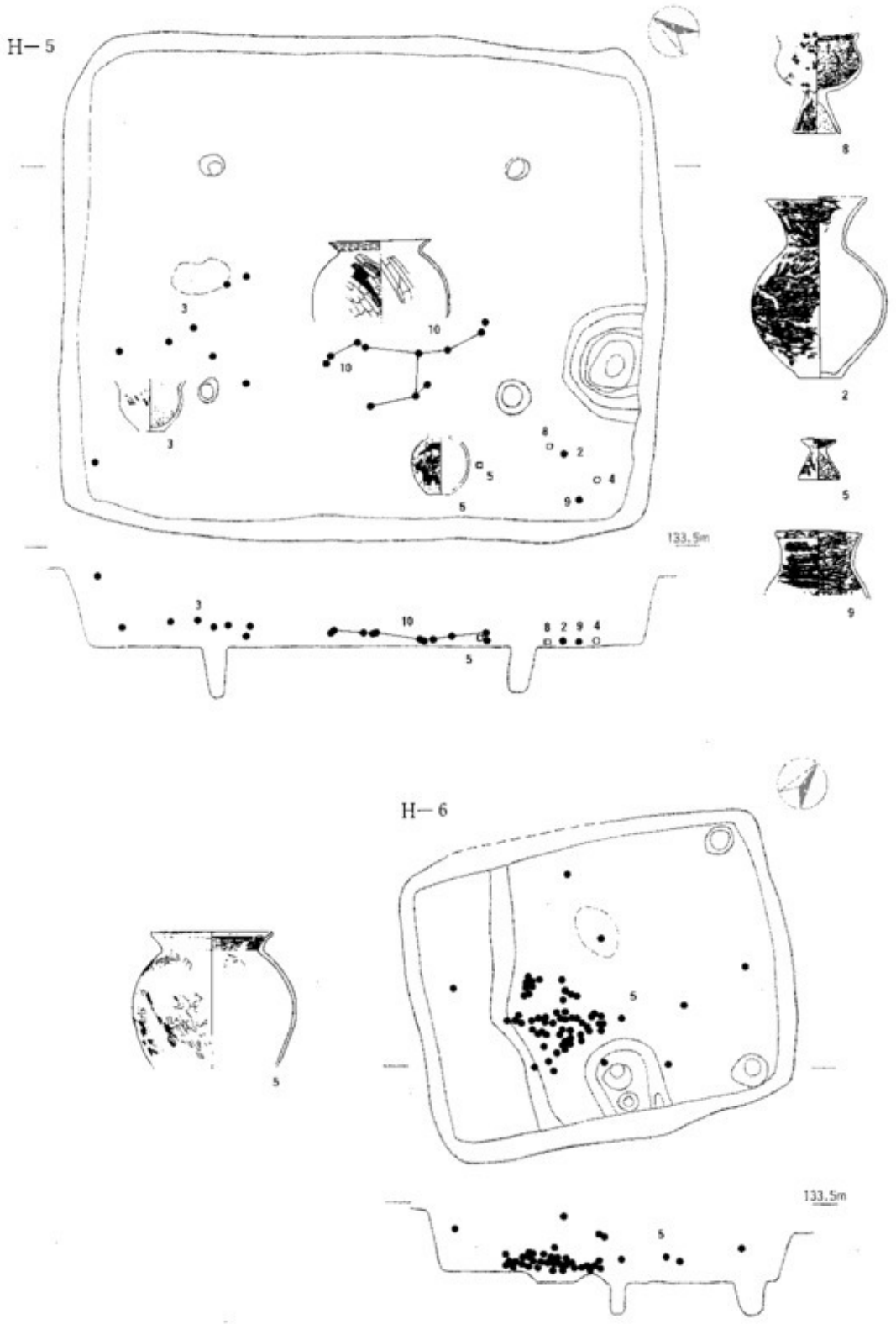


Fig.35　H－5・6遺物出土状況

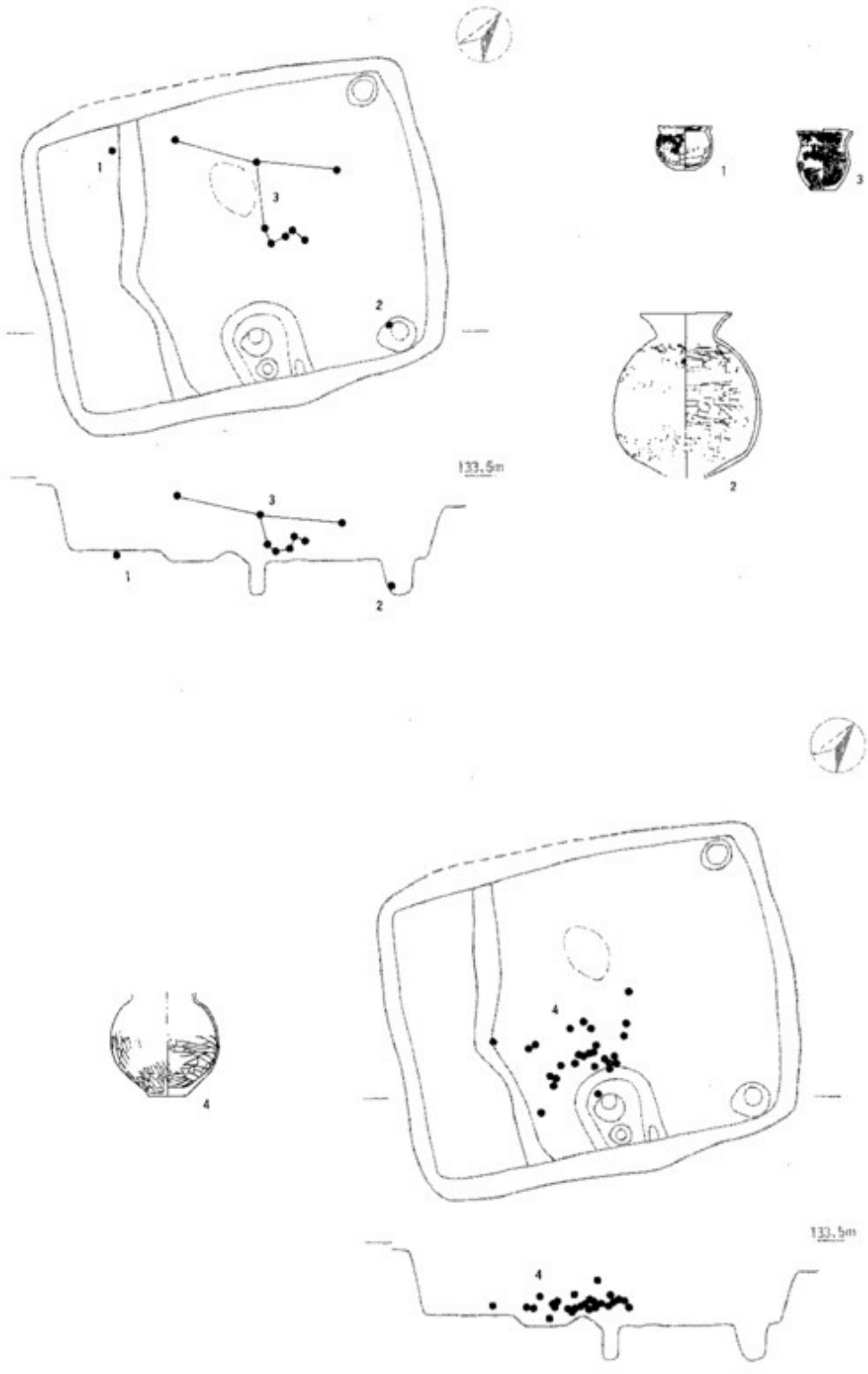


Fig.36　H－6遺物出土状況

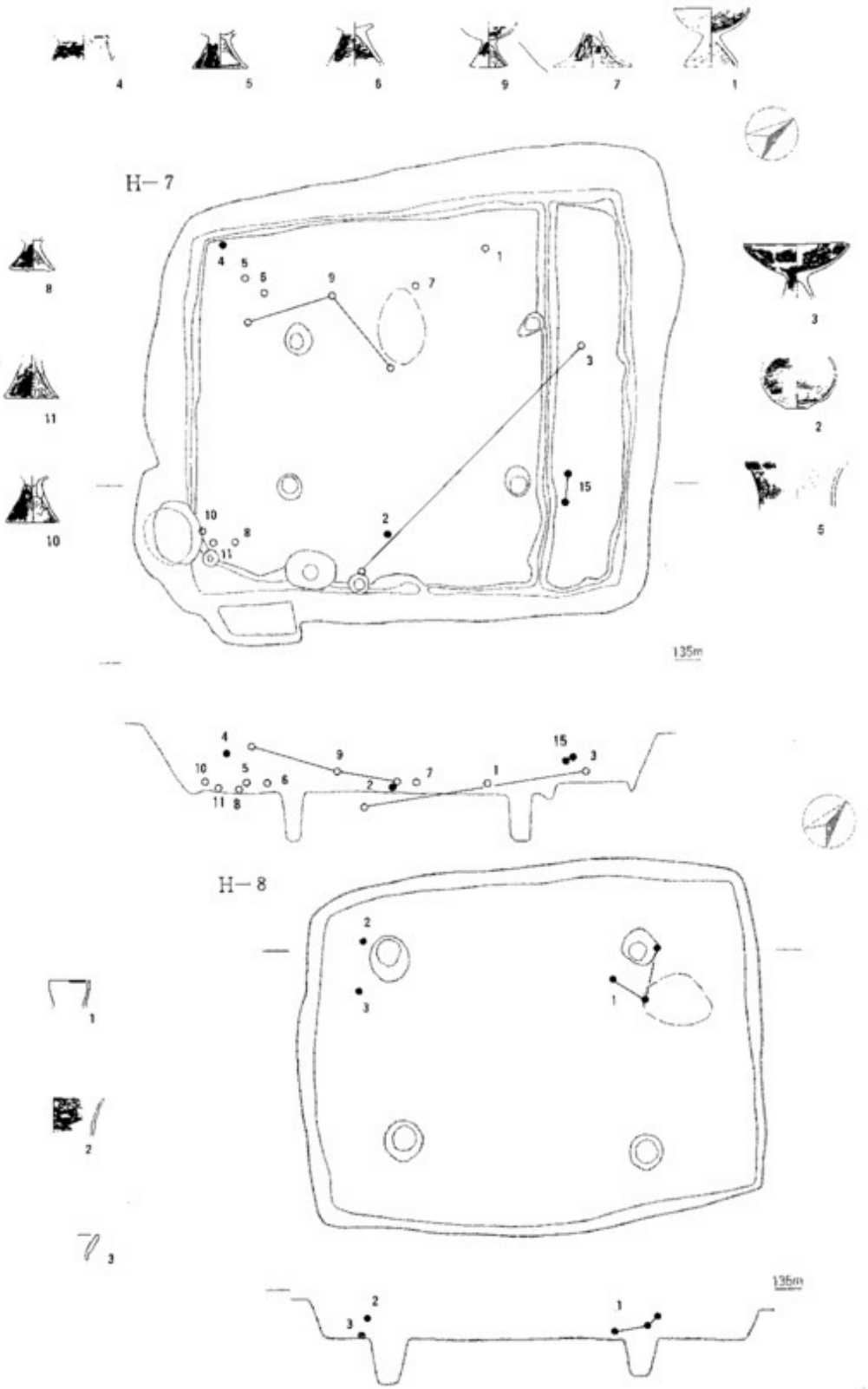


Fig.37　H－7・8遺物出土状況

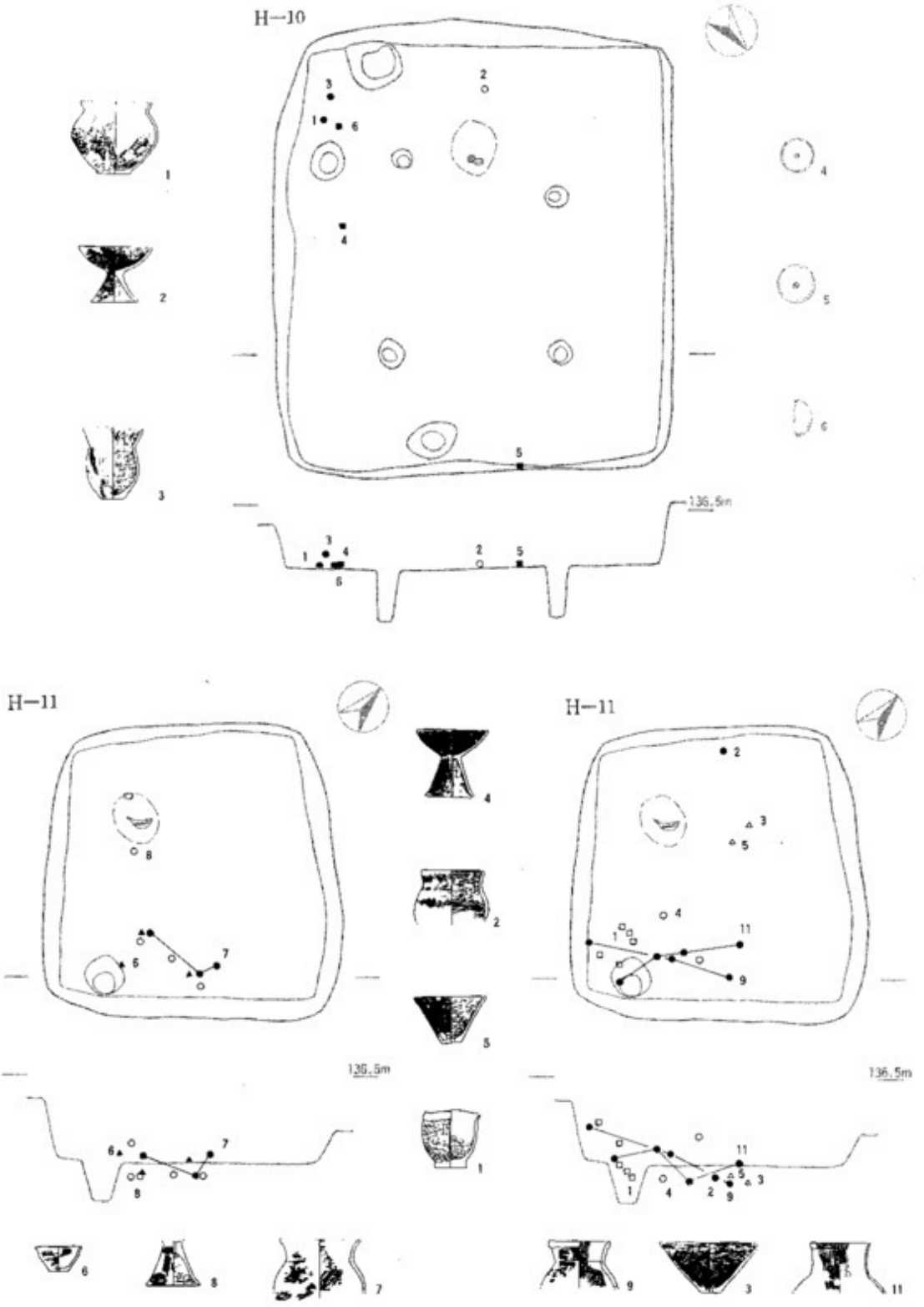


Fig.38　H—10・11遺物出土状況

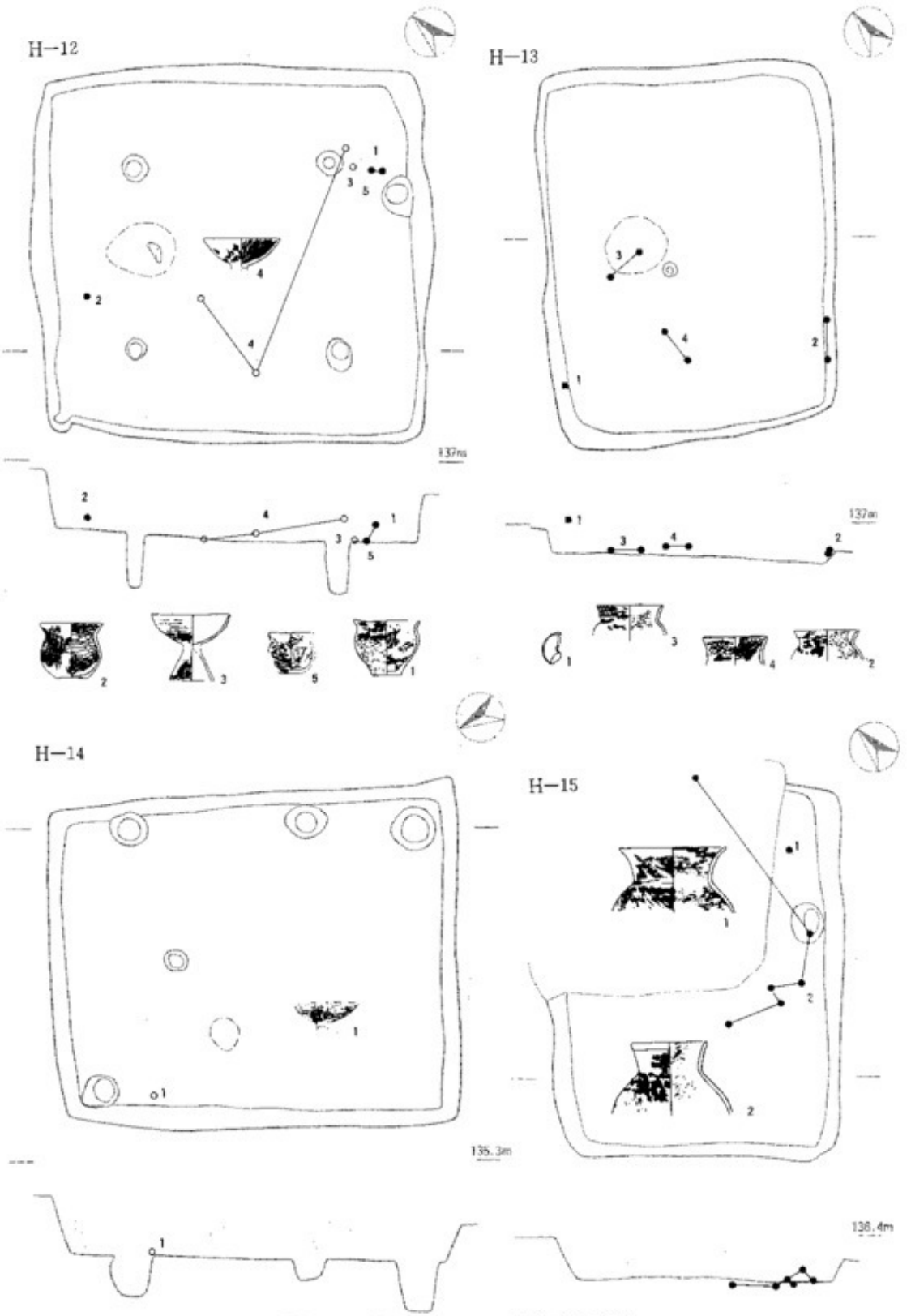
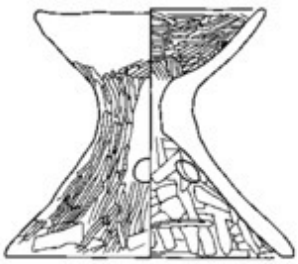
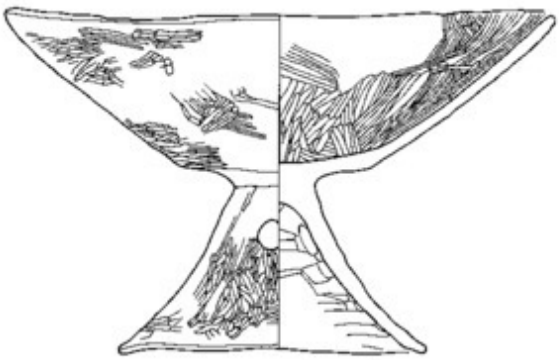


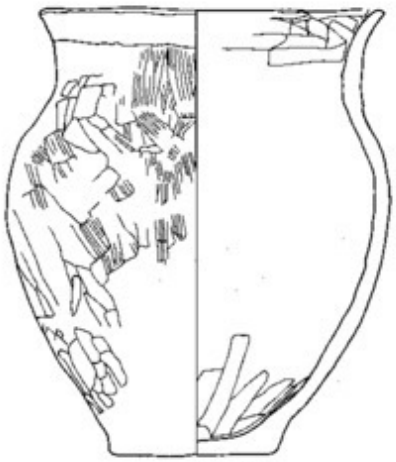
Fig.39　H—12・13・14・15遺物出土状況



H－1 ①

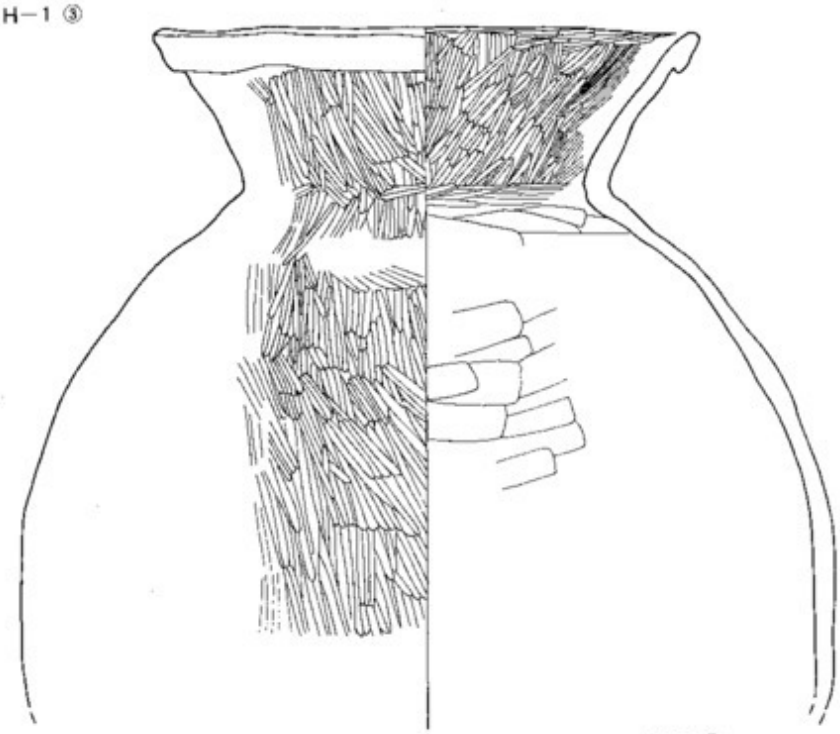


H－1 ②



H－1 ③

H－1 ⑤



H－1 ⑥

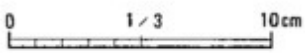
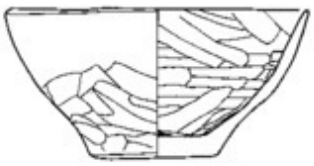


Fig.40　H－1出土土器

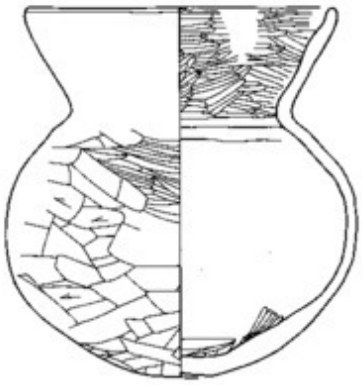


H－2 ①

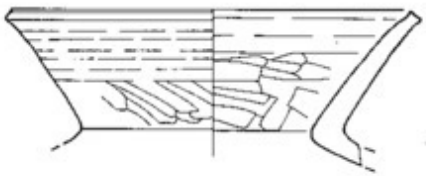
H－2 ②

H－2 ③

H－2 ④

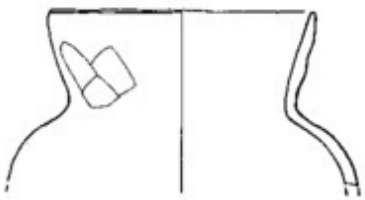


H－3 ①

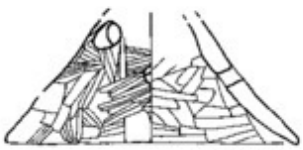


H－3 ②

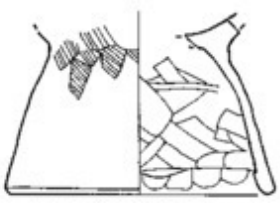
H－3 ④



H－3 ③



H－3 ⑤



H－3 ⑥

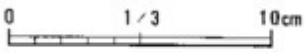


Fig.41　H－2・3出土土器

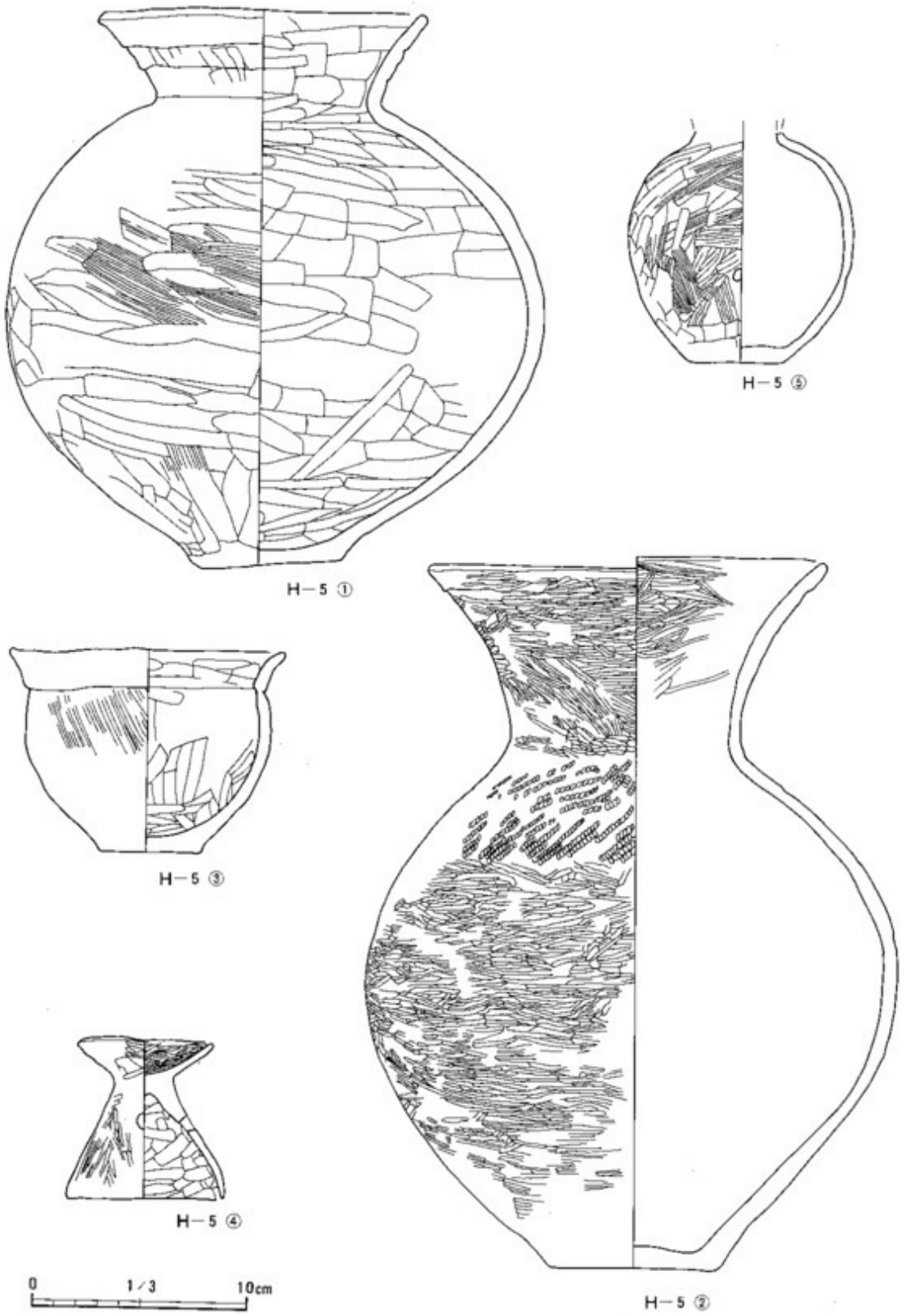


Fig.42　H－5出土土器(1)

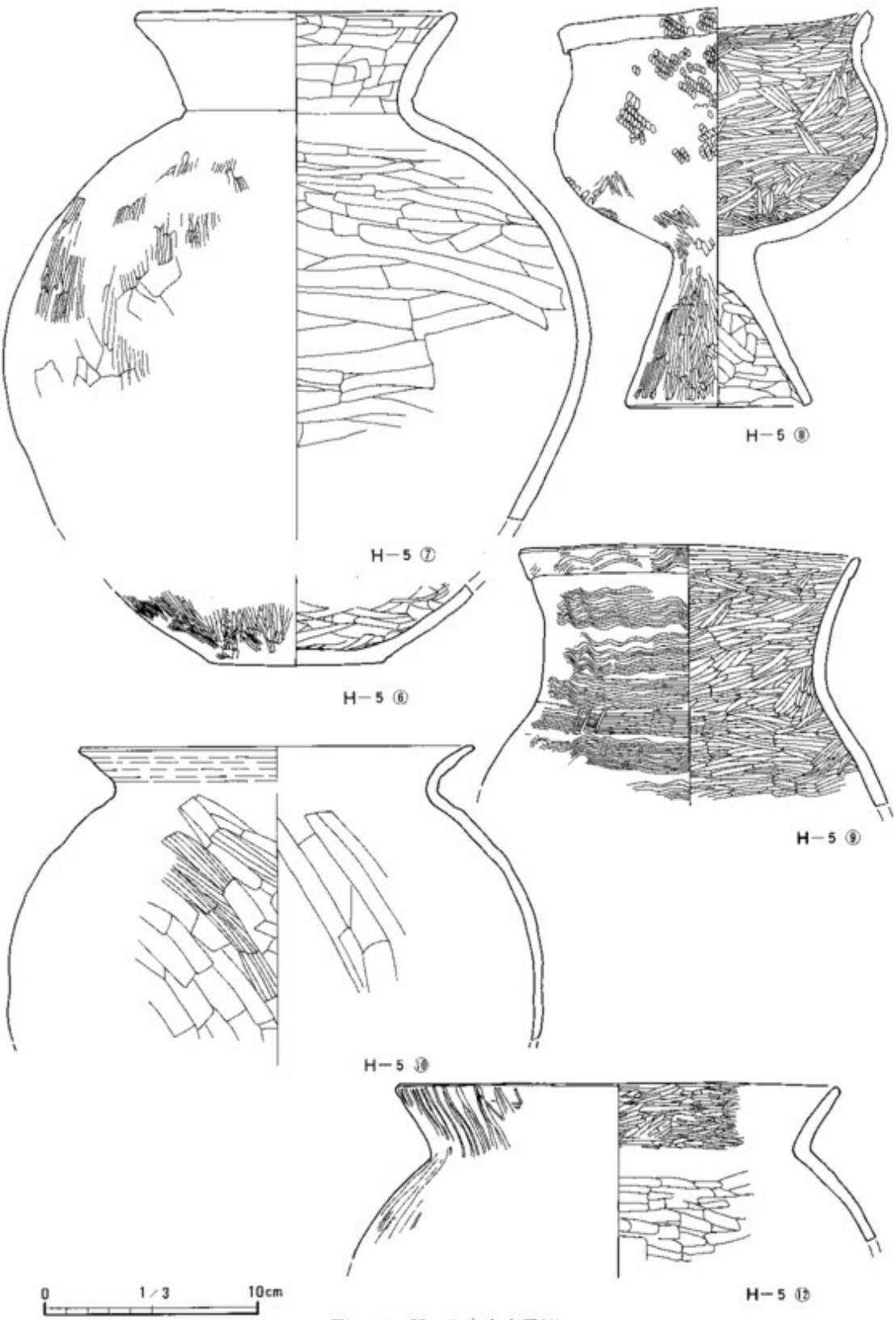


Fig.43　H−5出土土器(2)

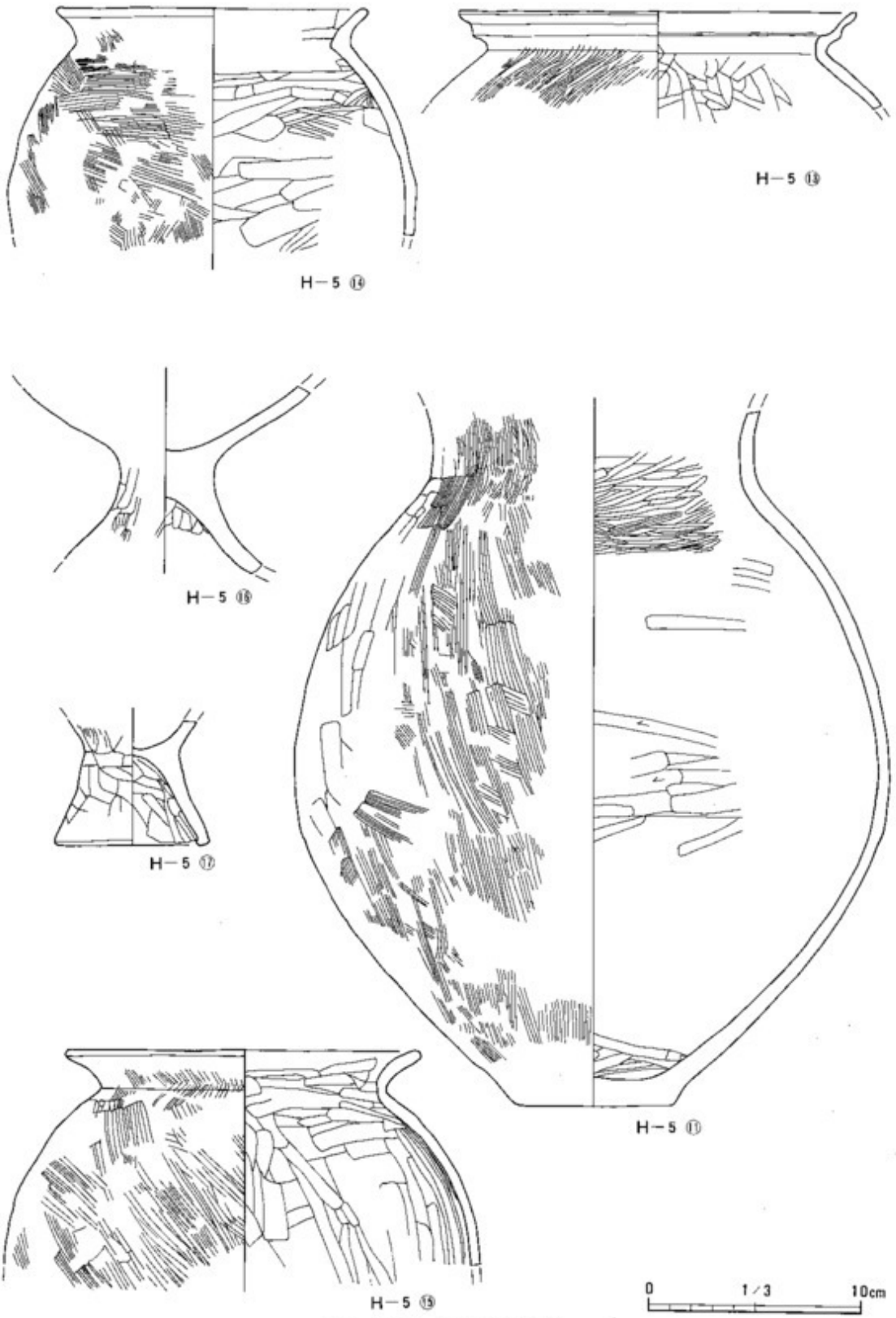
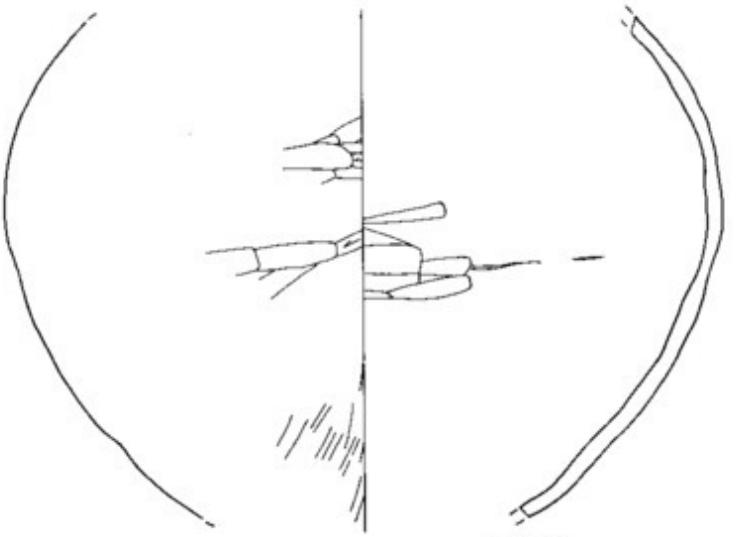


Fig.44　H－5出土土器(3)

H－5 ⑲

H－5 ⑳

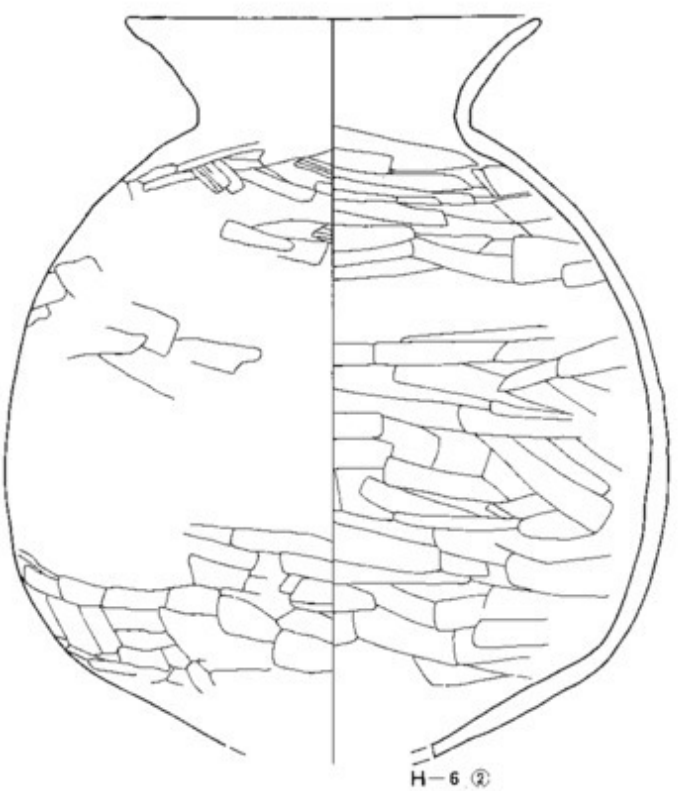
H－5 ⑱



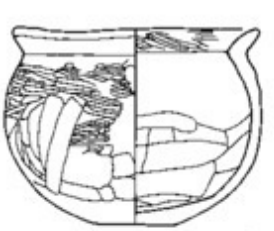
H－5 ㉓

H－5 ㉔

H－5 ㉕



H－6 ②



H－6 ①

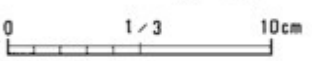
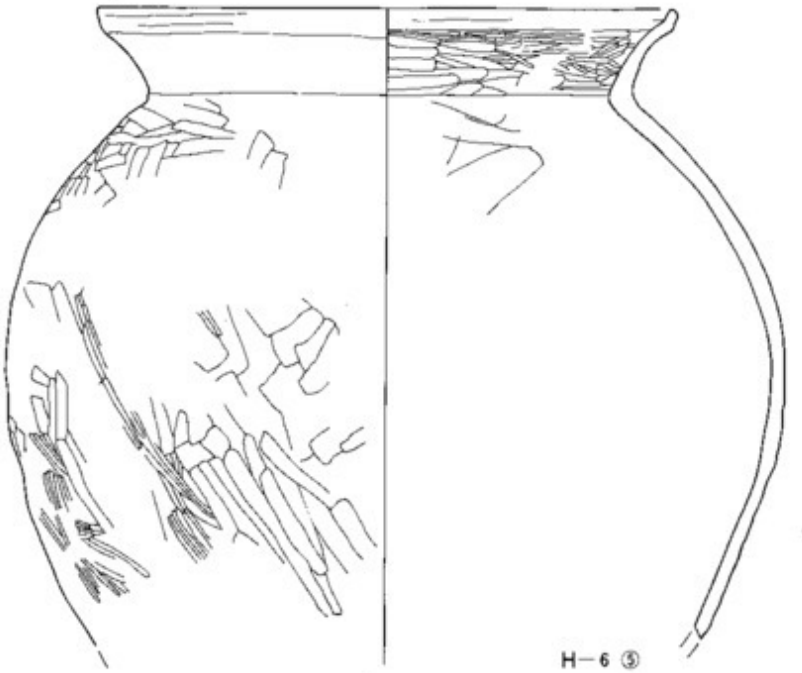
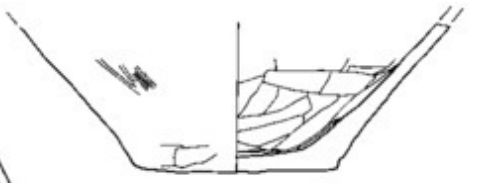


Fig.45　H－5・6出土土器

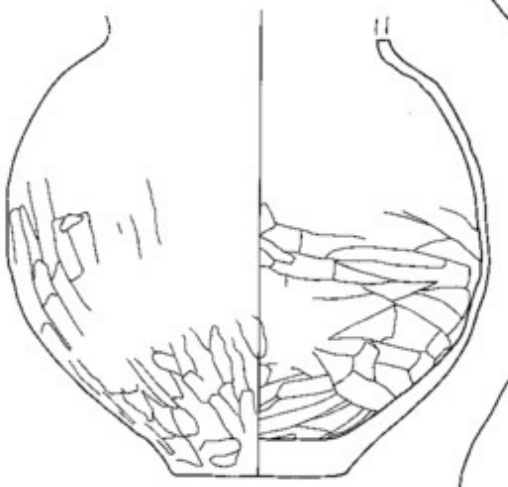
H－6 ③



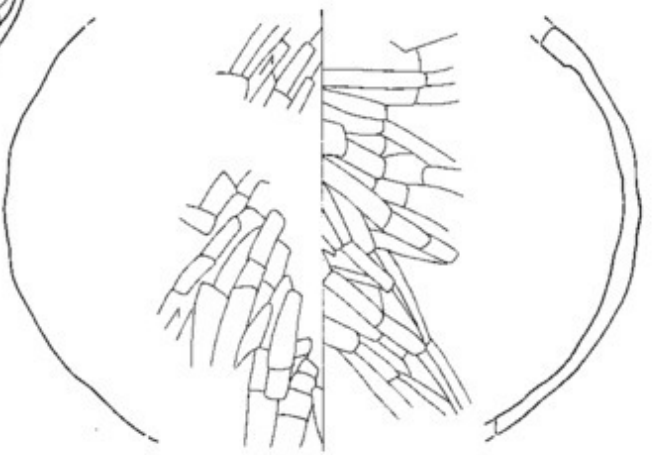
H－6 ⑤



H－6 ⑦



H－6 ④



H－6 ⑥

0 1／3 10cm

Fig.46 H－6出土土器

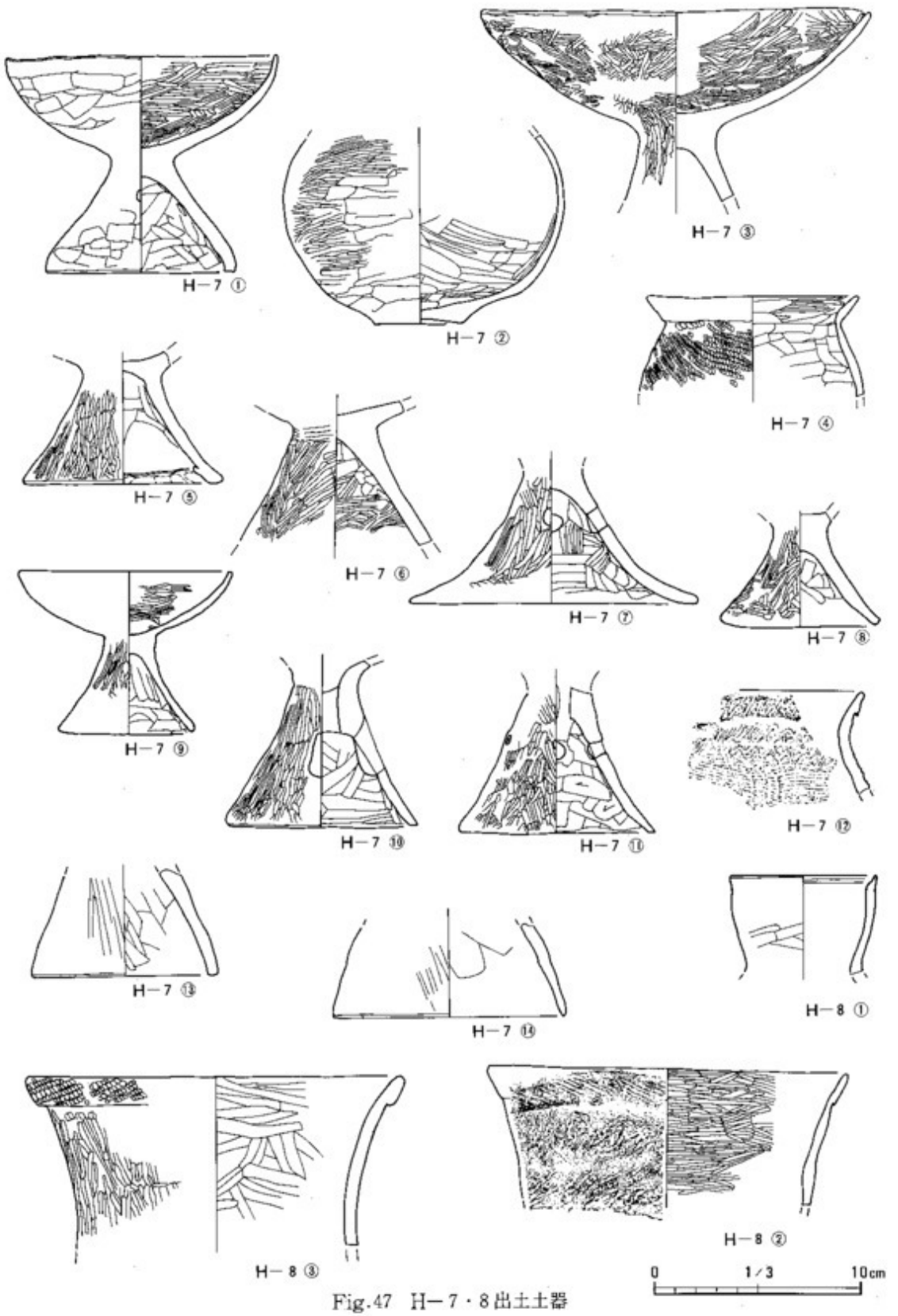


Fig.47　H－7・8出土土器

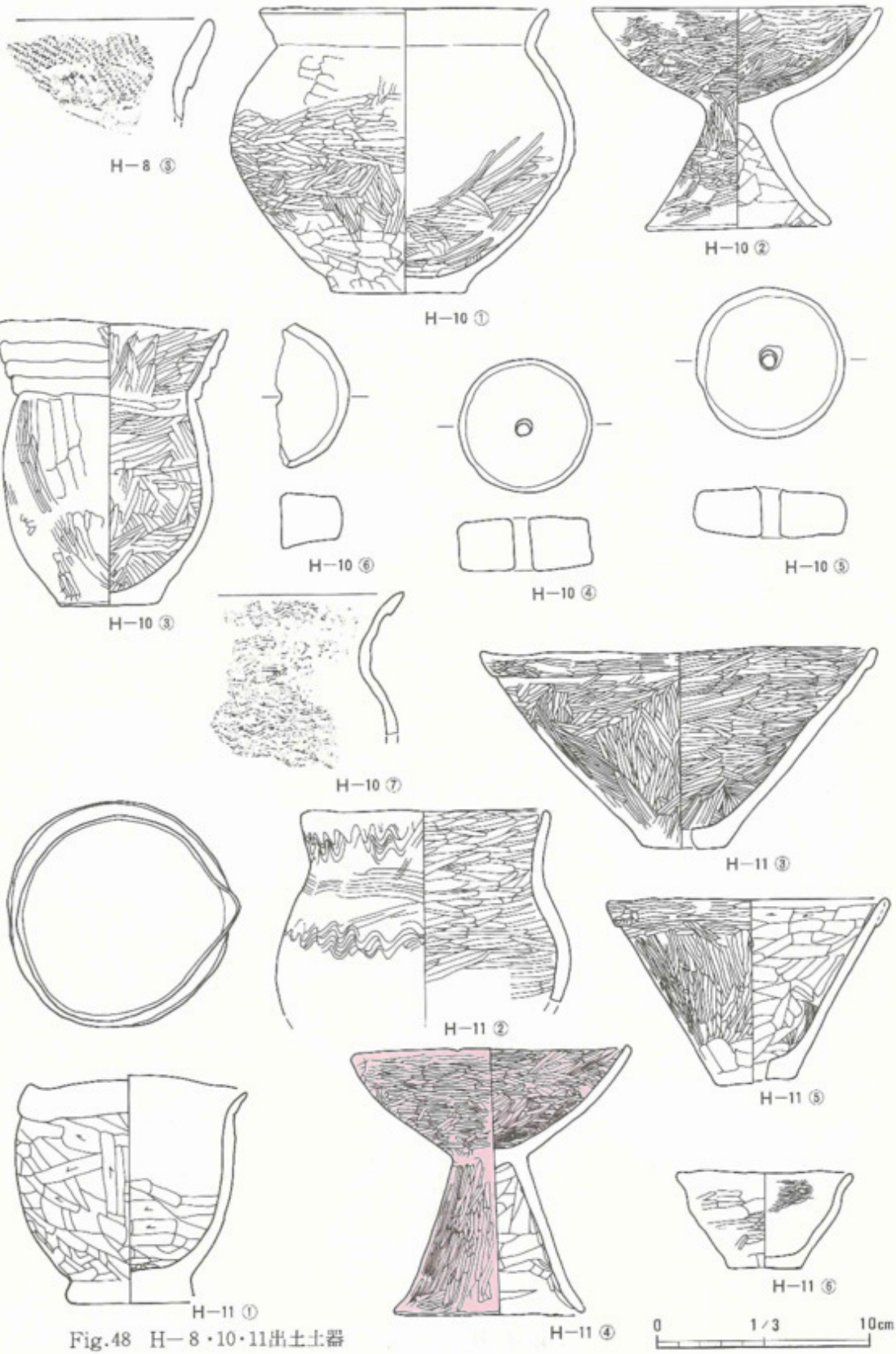


Fig.48　H－8・10・11出土土器

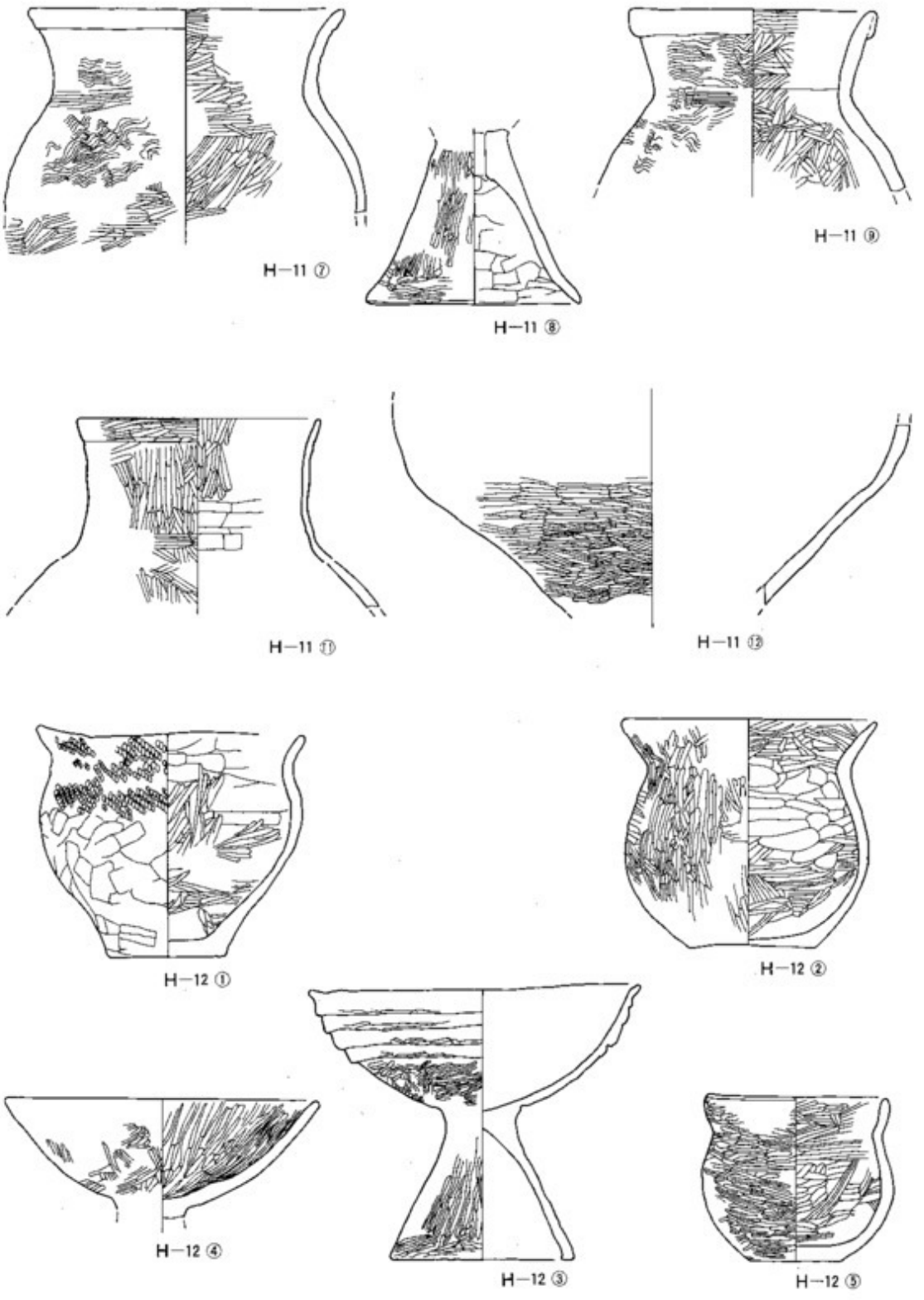


Fig.49 H−11・12出土土器

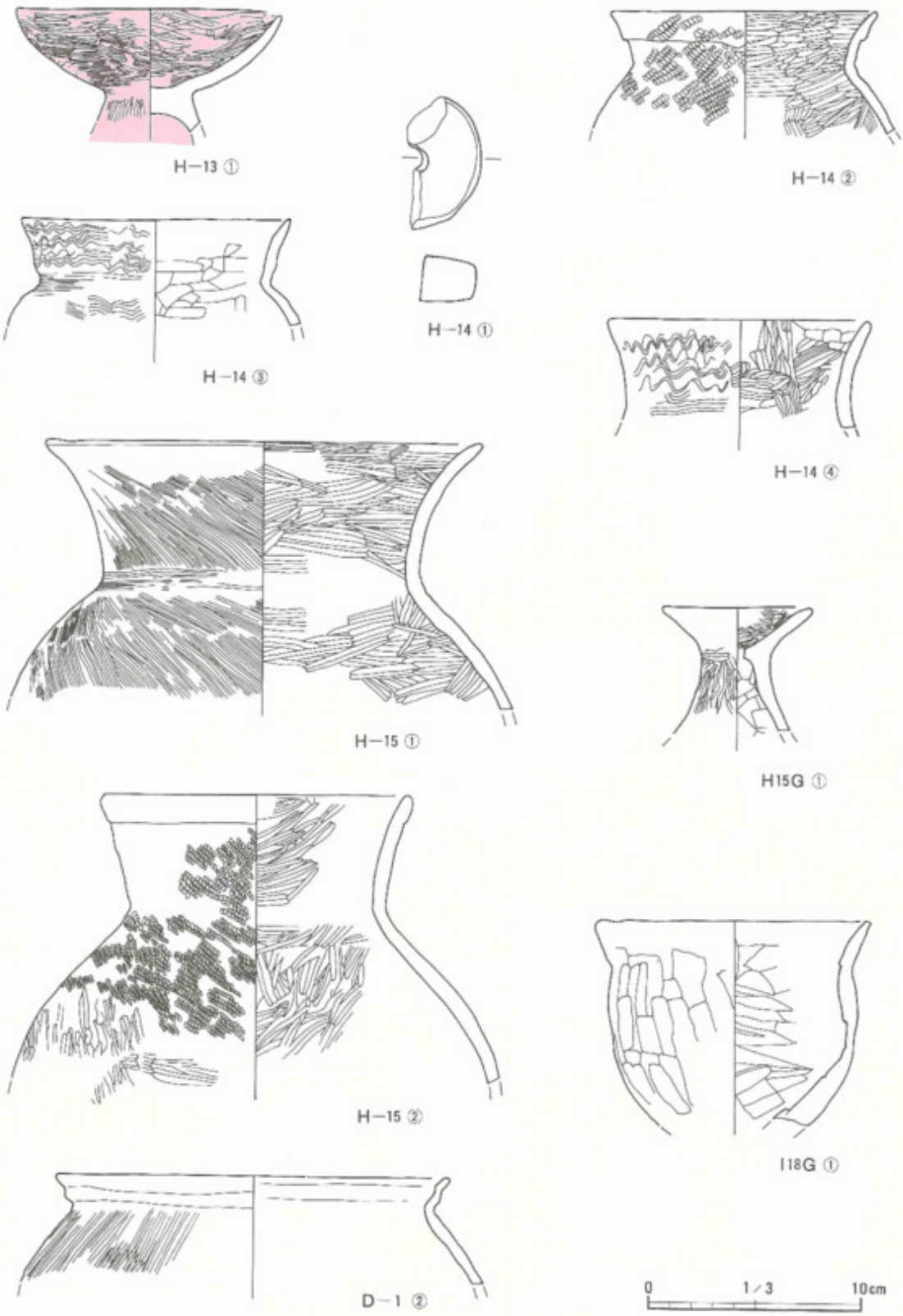


Fig.50　H−13・14・15 D−1 (Ⅱ区)埋土出土土器

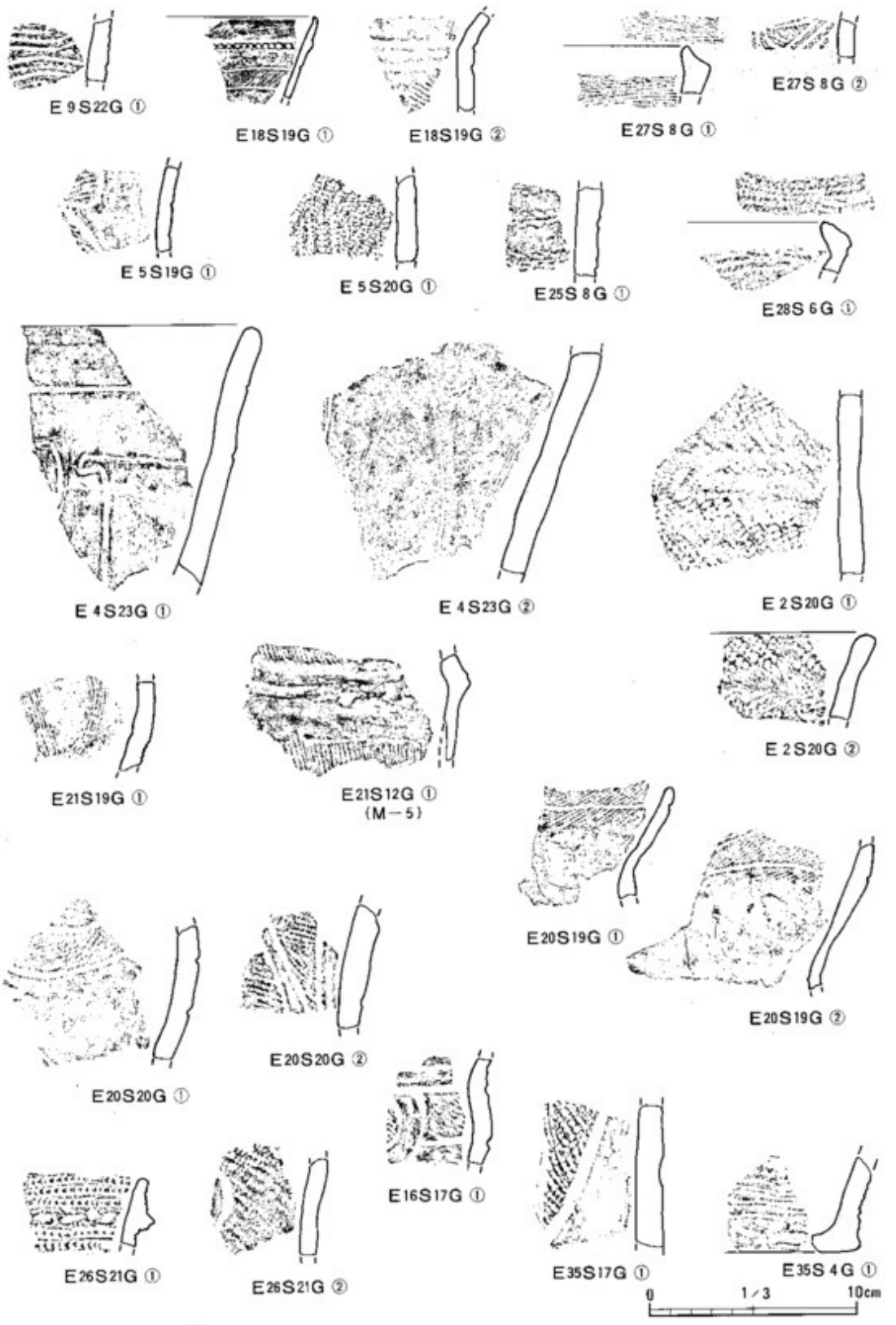


Fig.51　埋土出土土器(1)

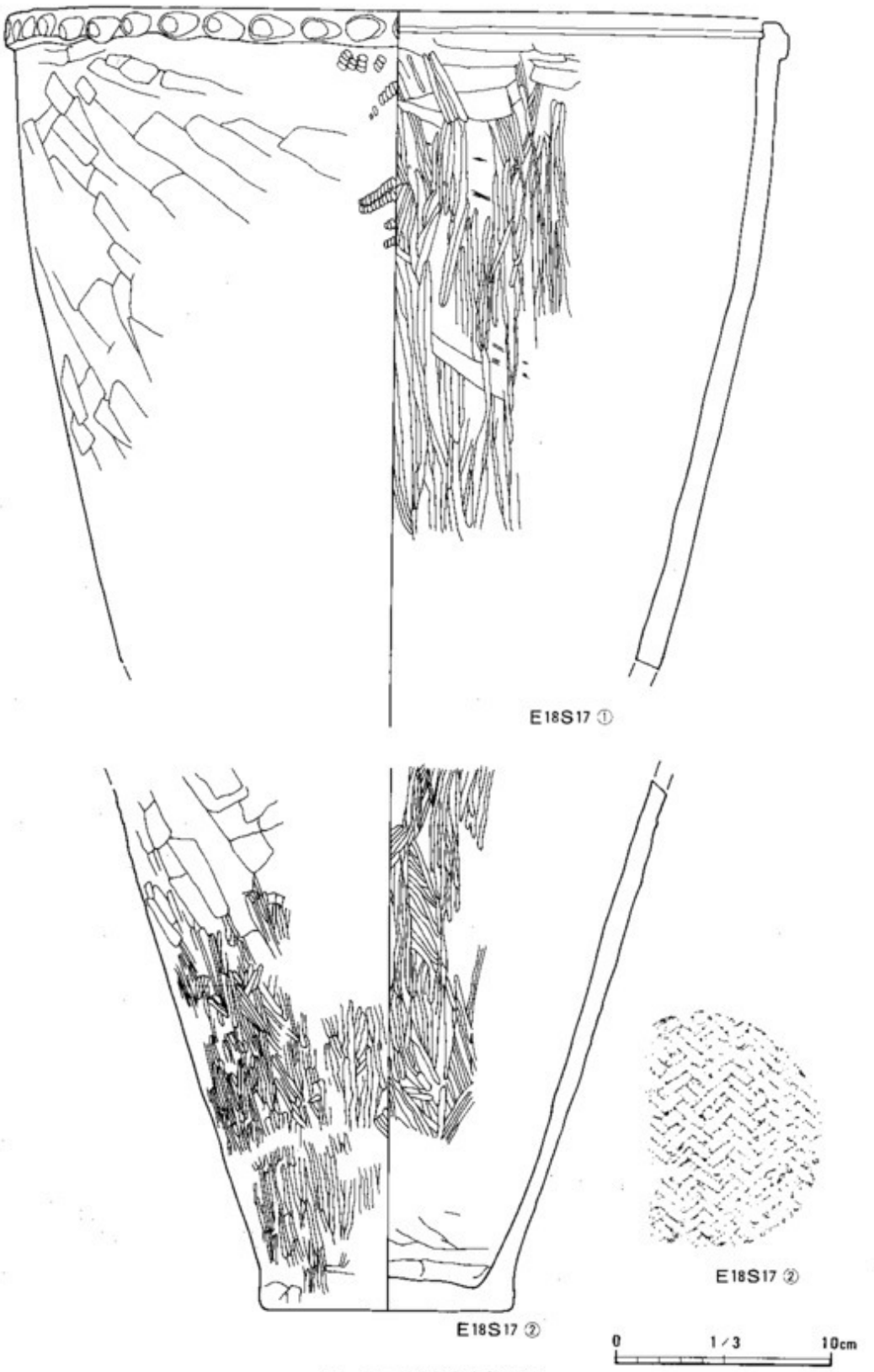


Fig.52　埋土出土土器(2)

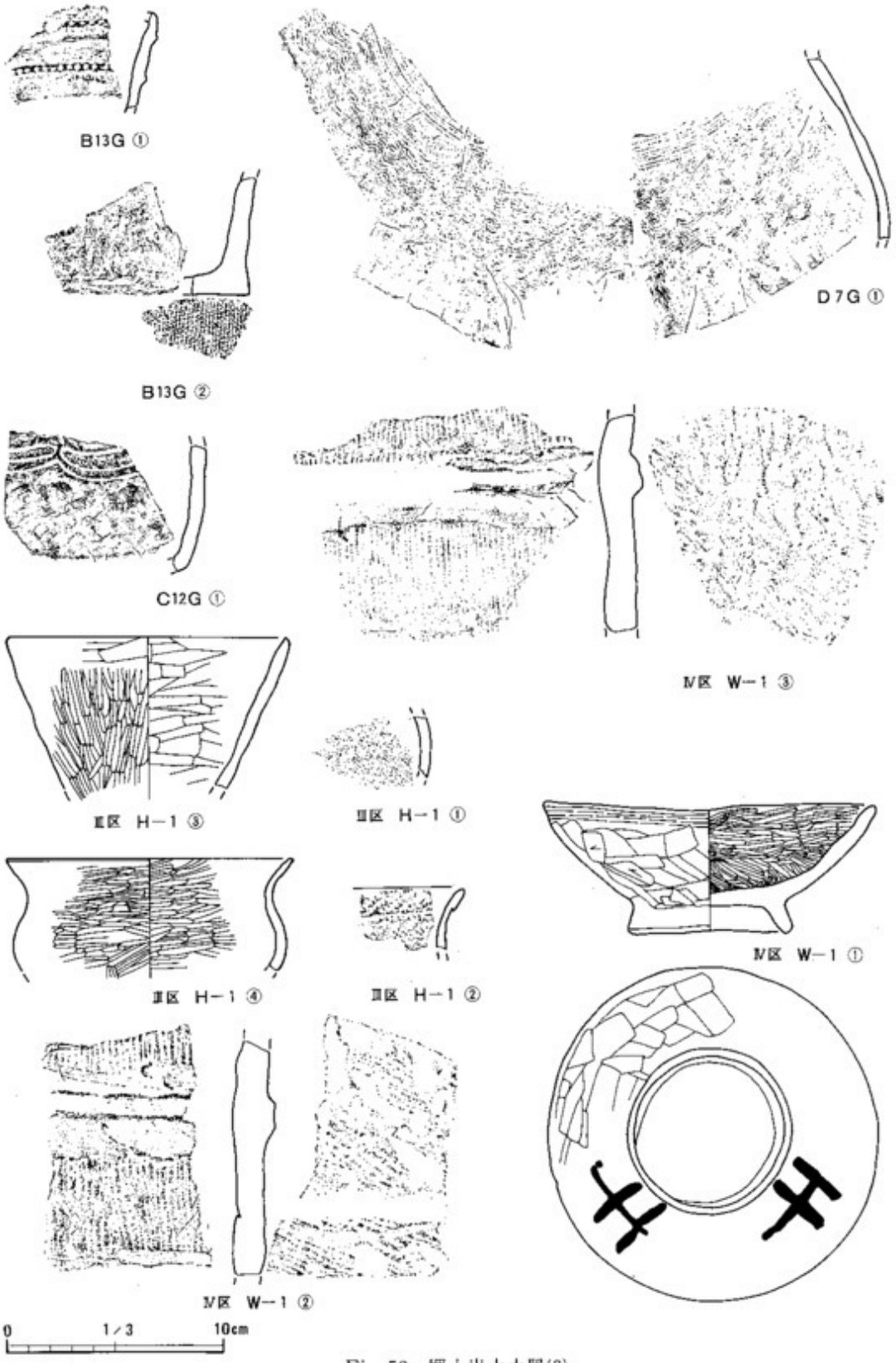
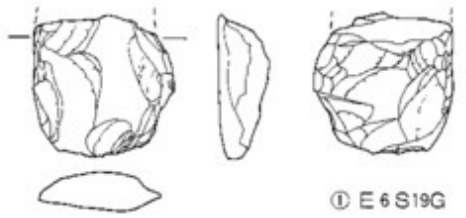
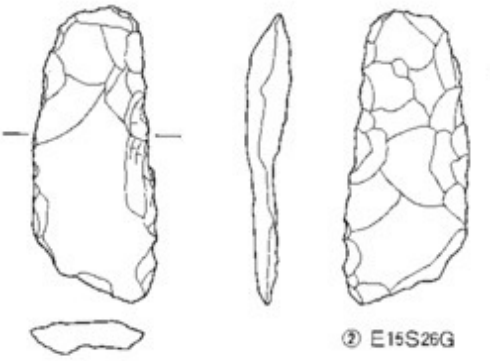


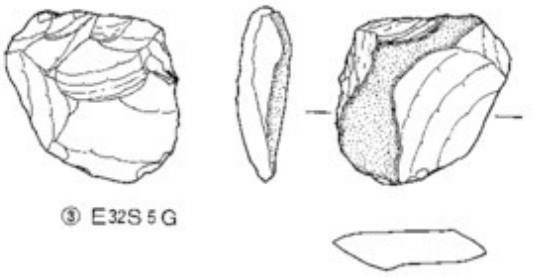
Fig.53 埋土出土土器(3)



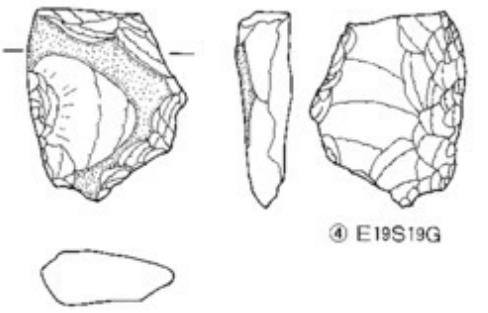
① E 6 S19G



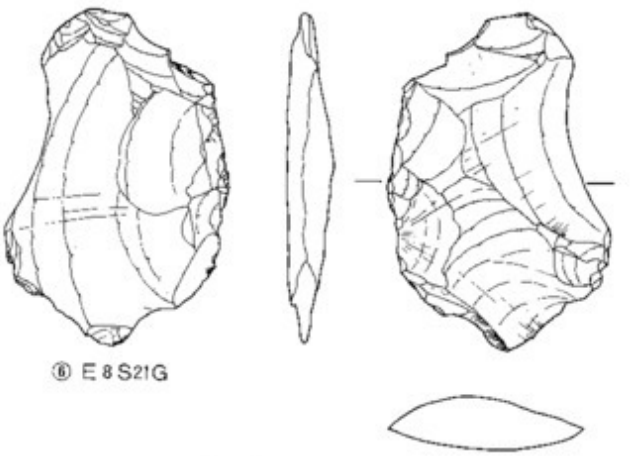
② E15S26G



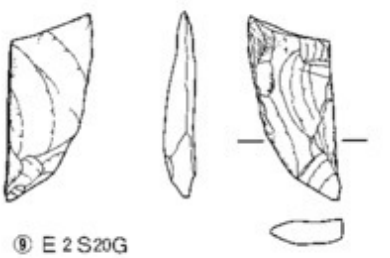
③ E32S 5 G



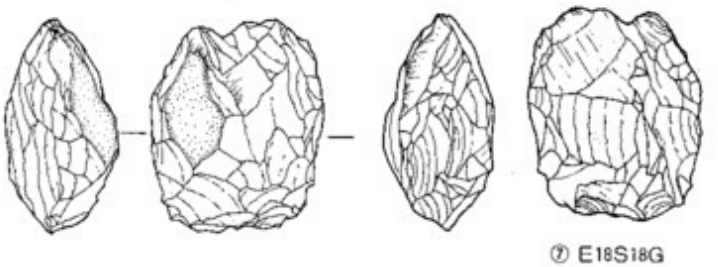
④ E19S19G



⑥ E 8 S21G



⑨ E 2 S20G



⑦ E18S18G

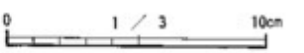


Fig. 54　第Ⅰ調査区出土石器(1)

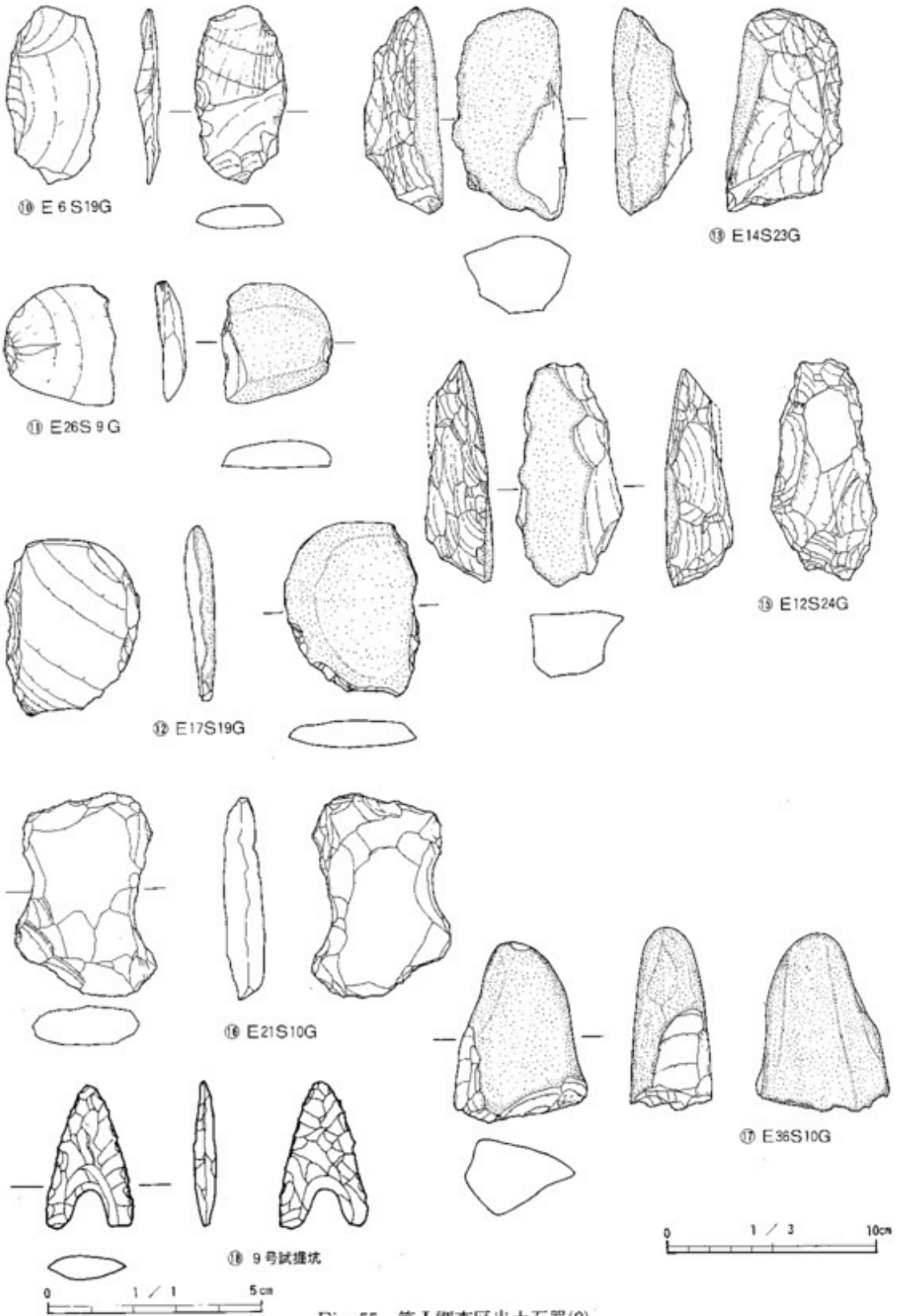


Fig. 55　第Ⅰ調査区出土石器(2)

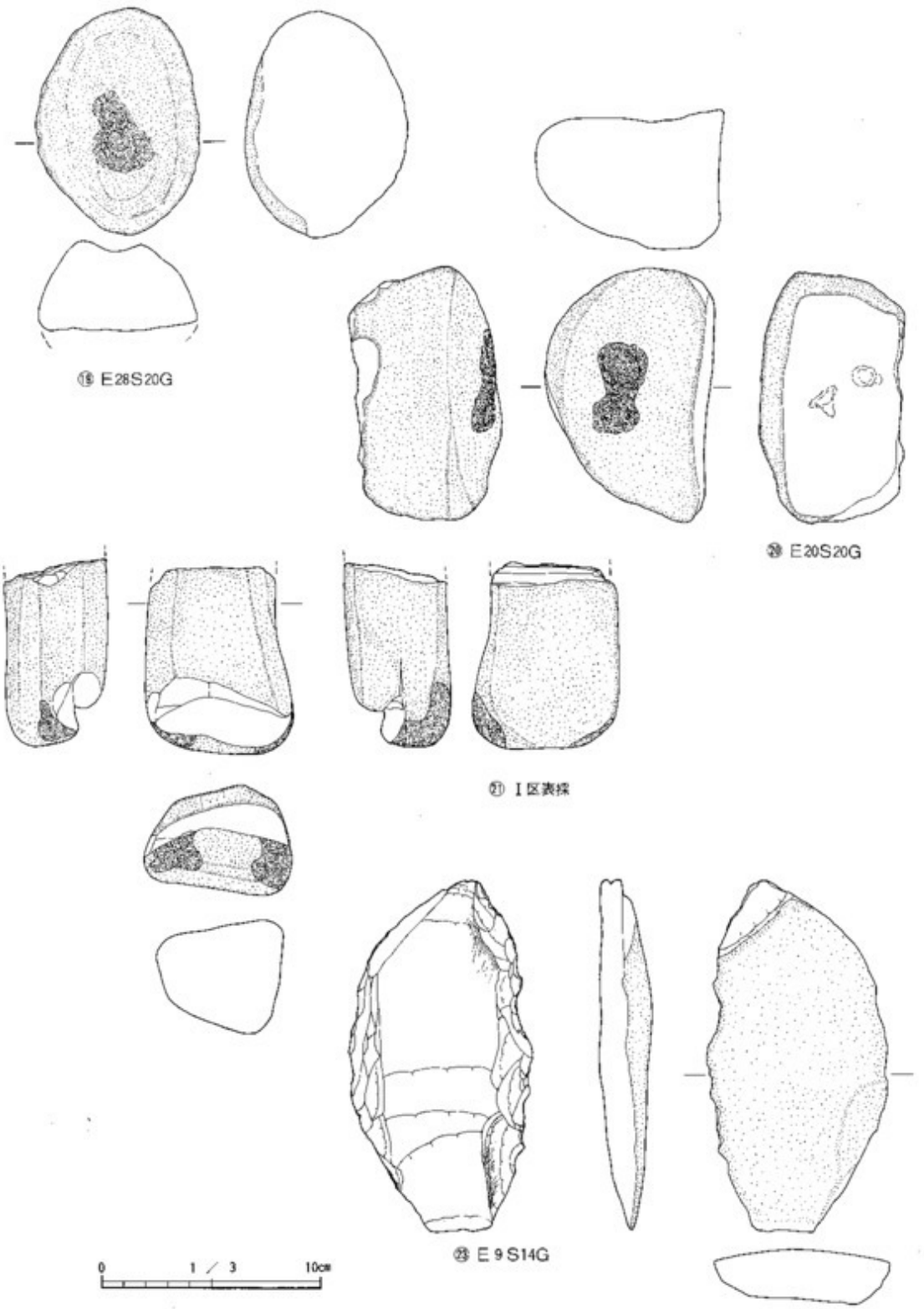
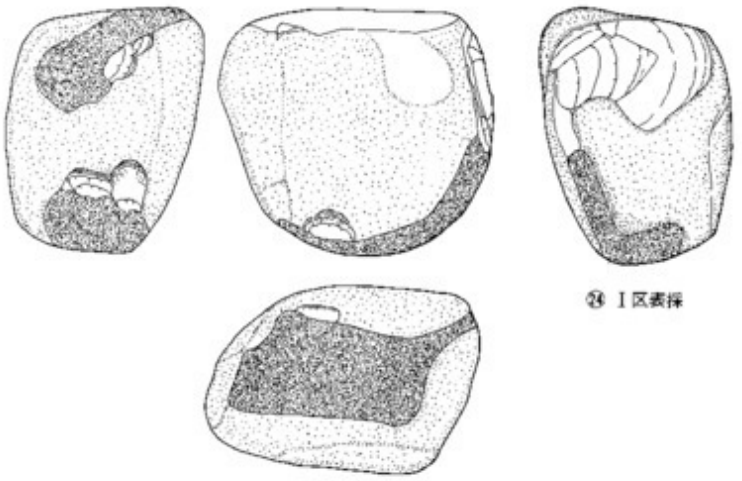
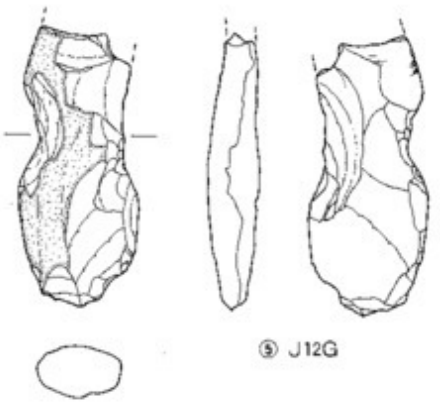


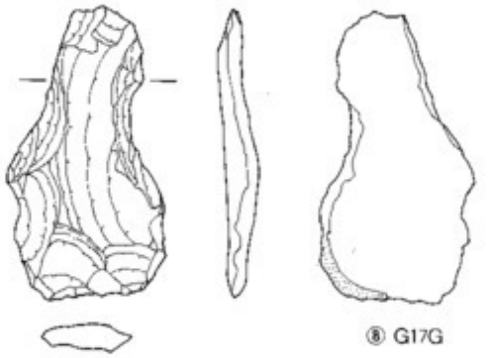
Fig. 56　第Ⅰ調査区出土石器(3)



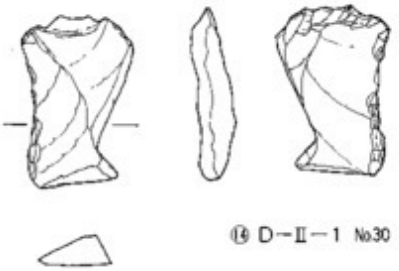
㉓ Ⅰ区表採



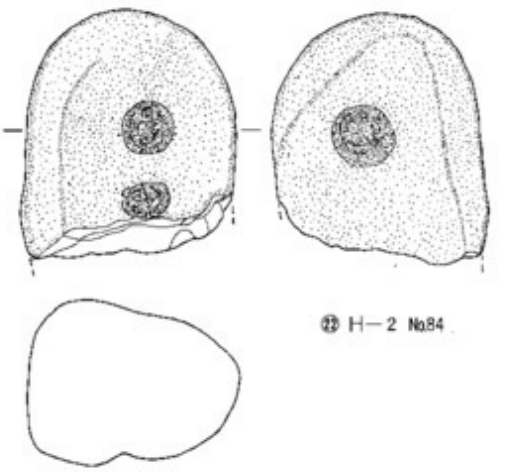
⑨ J12G



⑧ G17G



⑭ D－Ⅱ－1 No.30



㉒ H－2 No.84

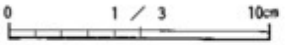
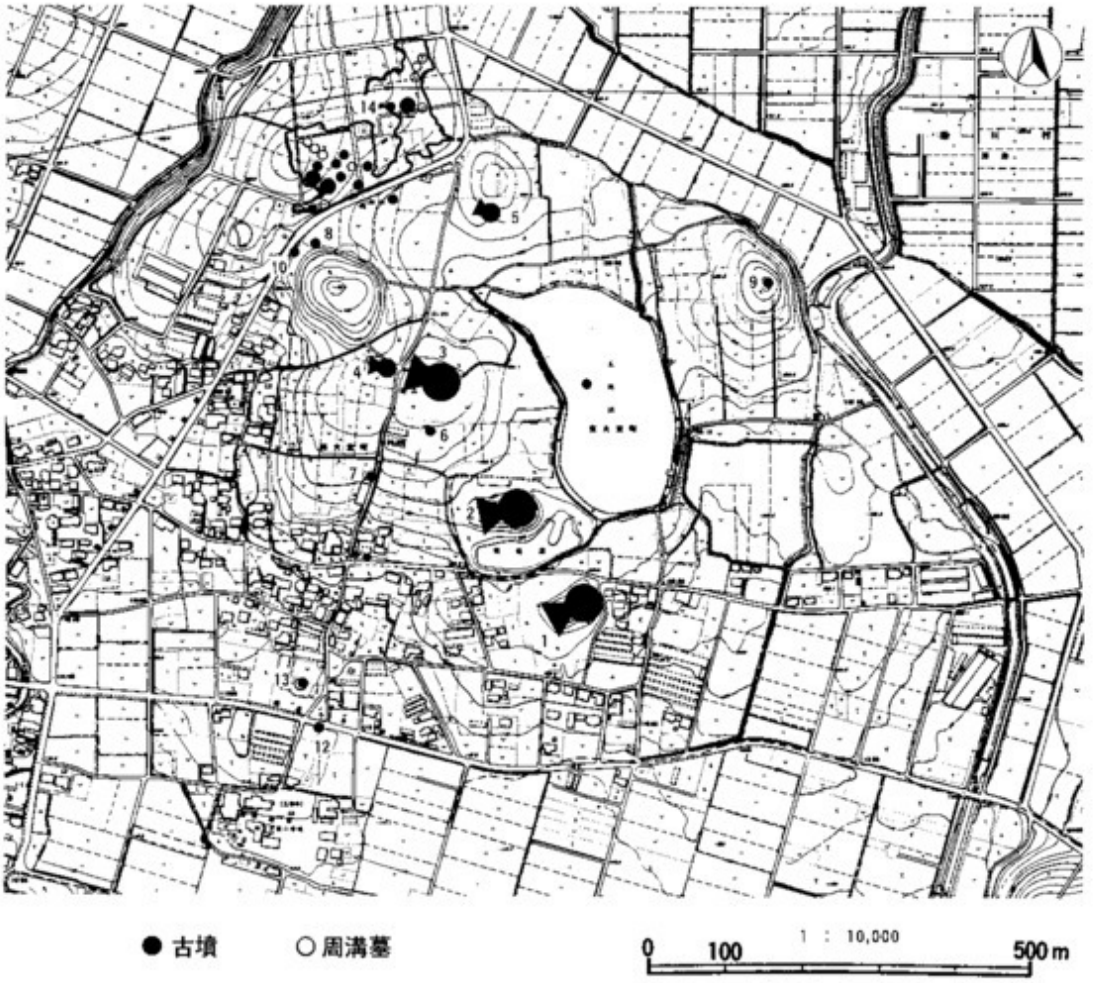


Fig. 57 第Ⅰ・Ⅱ調査区出土石器



1.前二子古墳（荒砥村51号墳） 2.中二子古墳（荒砥村229号墳） 3.後二子古墳（荒砥村55号墳）
4.小二子古墳（荒砥村56号墳） 5.内堀M－1号墳（荒砥村57号墳） 6.内堀M－2号墳（記載漏れ）
7.内堀M－3号墳（記載漏れ） 8.内堀M－4号墳（記載漏れ） 9.五料山古墳（荒砥村58号墳）
10.荒砥村65号墳 11.五料沼古墳（記載漏れ） 12.荒砥村54号墳
13.荒砥村147号墳 14.上縄引遺跡

Fig.58 大室古墳群

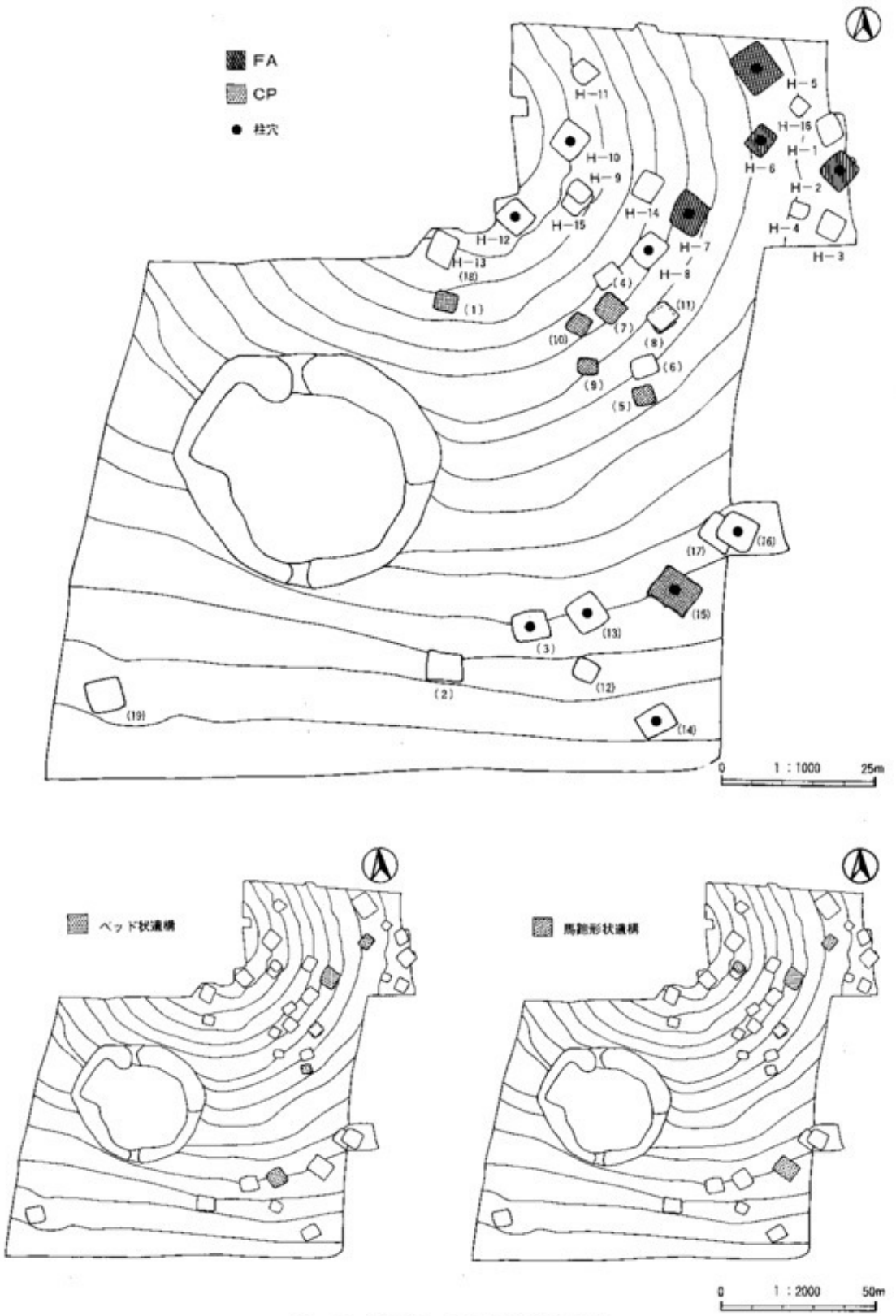


Fig.59 昭和63・平成元年度住居址

1.本年度第Ⅰ・Ⅱ調査区全景

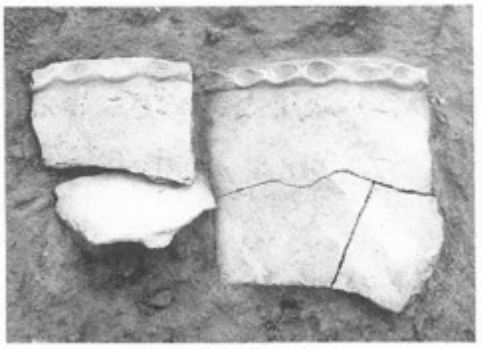
2.Z－1号石槨墓

PL. 2

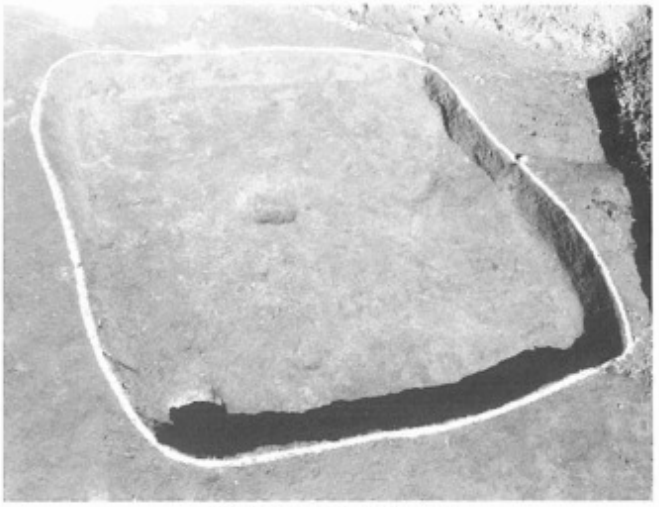
3. M－5号墳全景

4. M－5号墳周溝断面

5. 1区W－1号溝断面



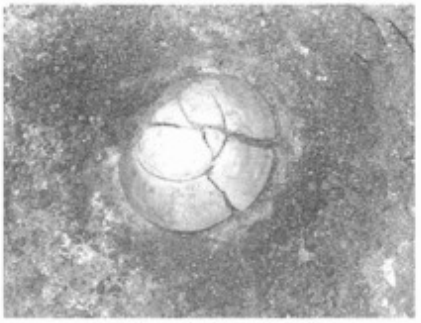
6. 1区遺物出土状況



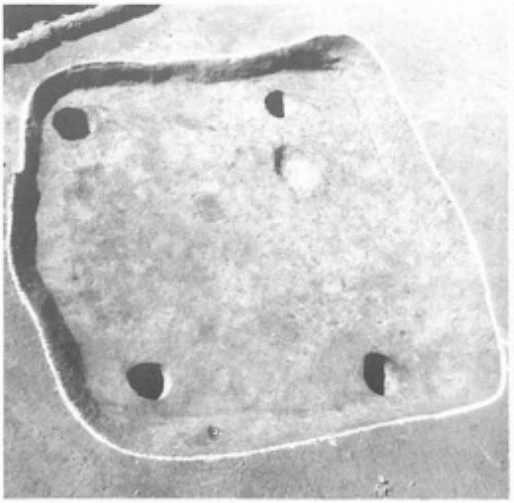
7. Ⅱ区H－1号住居址

8. H－1遺物出土状況

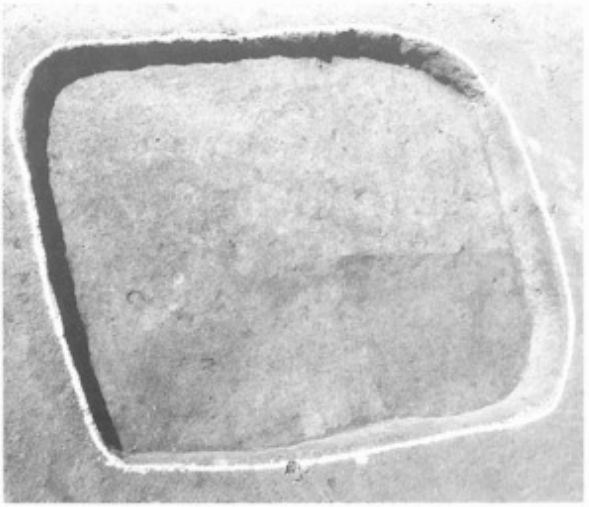
9. Ⅱ区H－2号住居址



10. H－2遺物出土状況

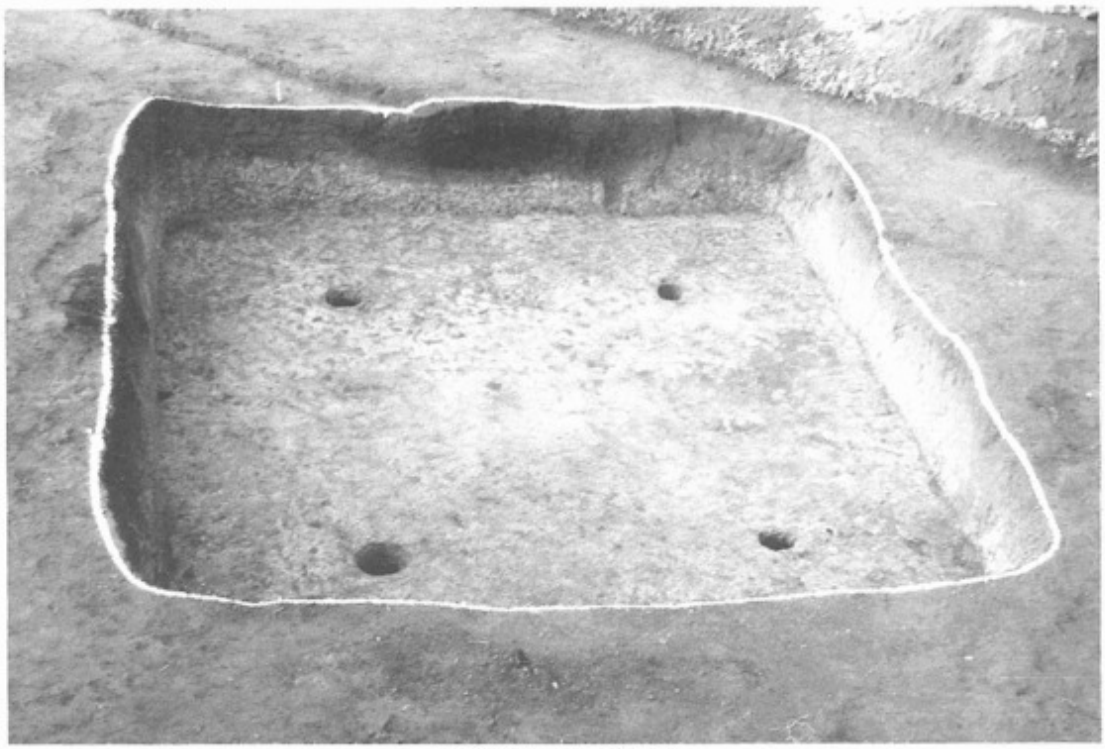


11. Ⅱ区H－3号住居址



12. Ⅱ区H－4号住居址

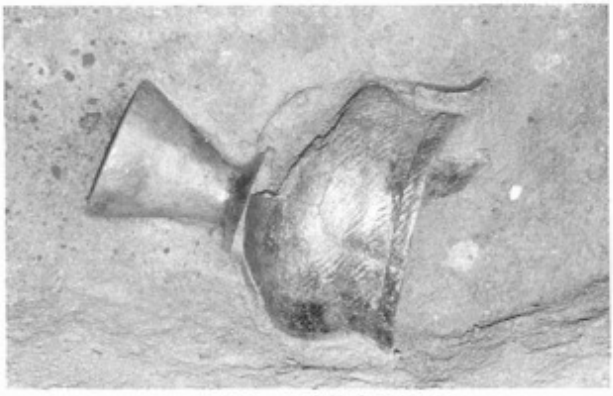
PL. 4



13. Ⅱ区H－5号住居址

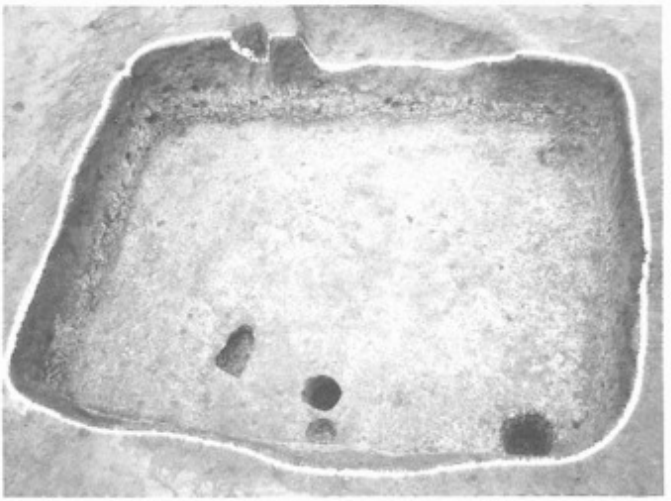
14. H－5遺物出土状況

15. H－5遺物出土状況



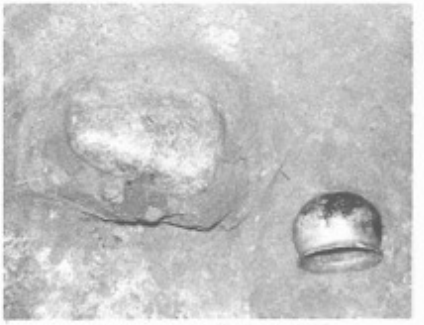
16. H－5遺物出土状況

17. H－5遺物出土状況

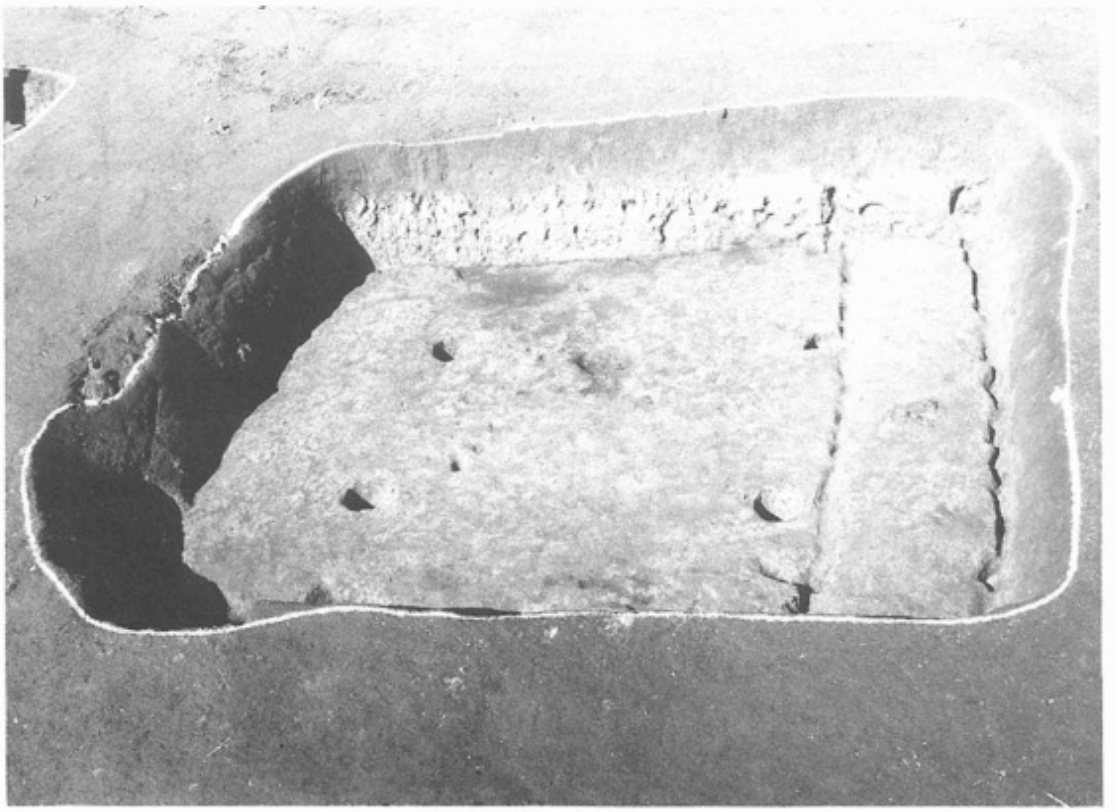


18. Ⅱ区H－6号住居址

19. H－6遺物出土状況

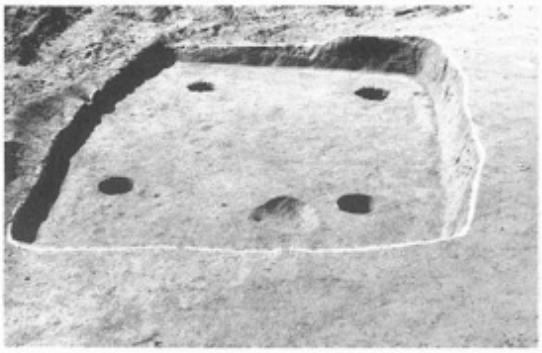


20. H－6遺物出土状況



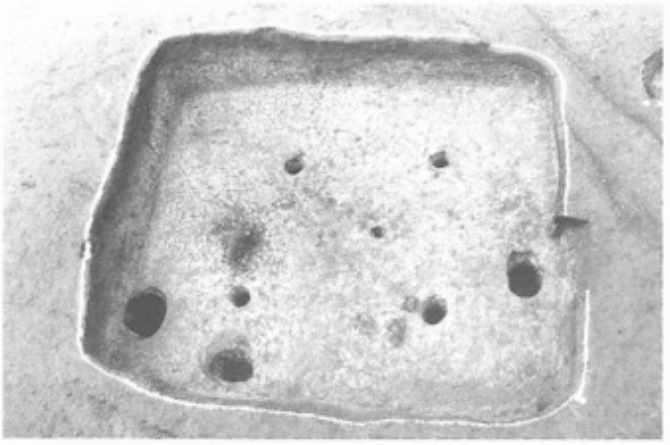
21. Ⅱ区H－7号住居址

PL. 6



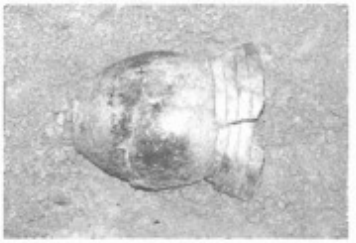
22. Ⅱ区H－8号住居址

23. Ⅱ区H－9・15号住居址



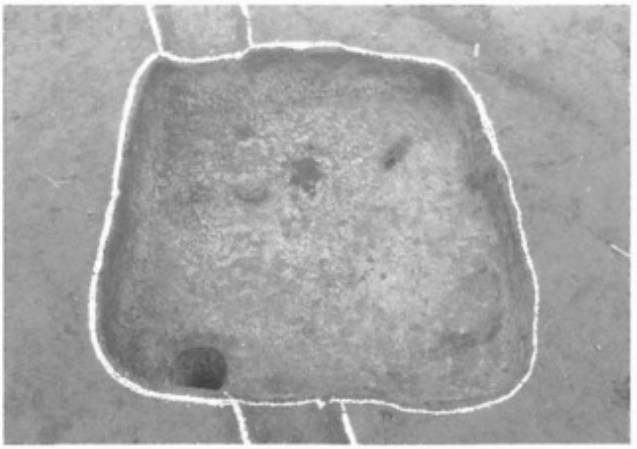
24. Ⅱ区H－10号住居址

25. H－10遺物出土状況



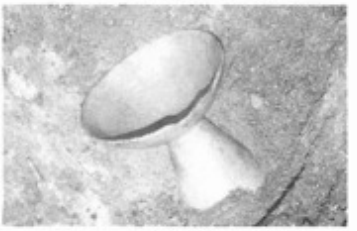
26. H－10遺物出土状況

27. H－10遺物出土状況

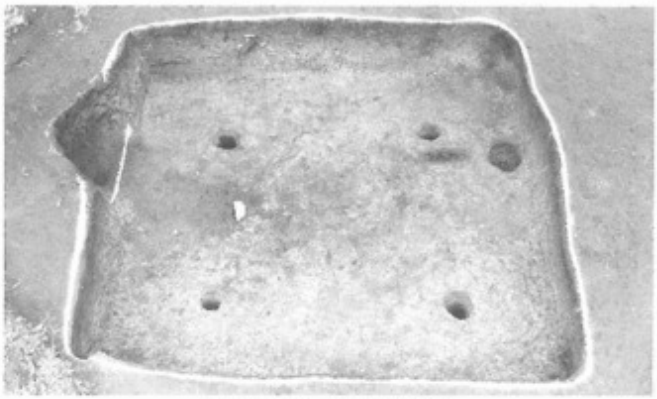


28. Ⅱ区H－11号住居址

29. H－11遺物出土状況

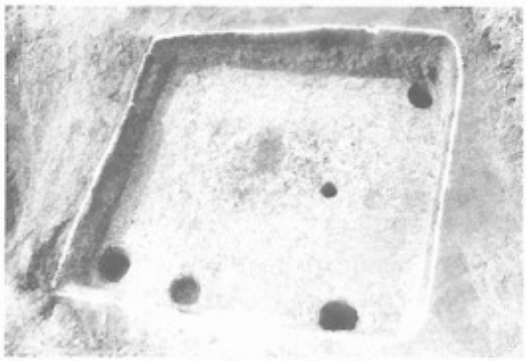


30. H－11遺物出土状況

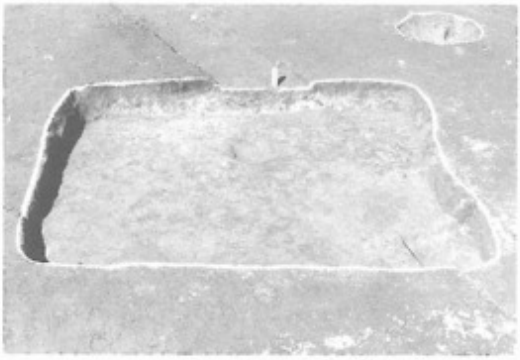


31. Ⅱ区H—12号住居址

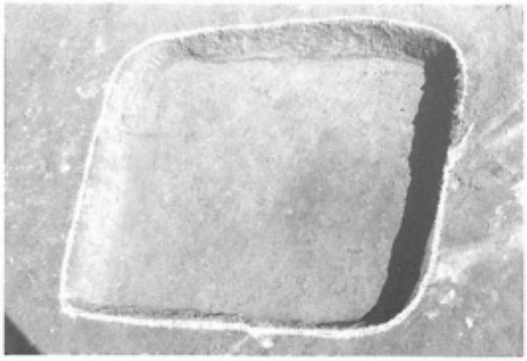
32. H—12遺物出土状況



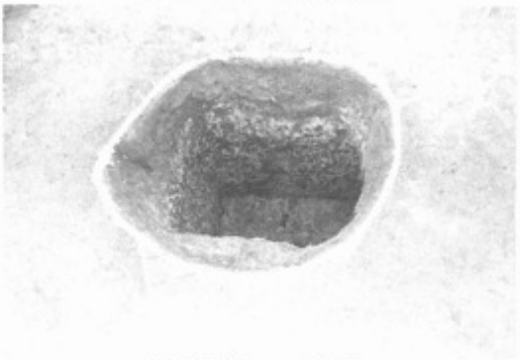
33. Ⅱ区H13号住居址



34. Ⅱ区H—14号住居址



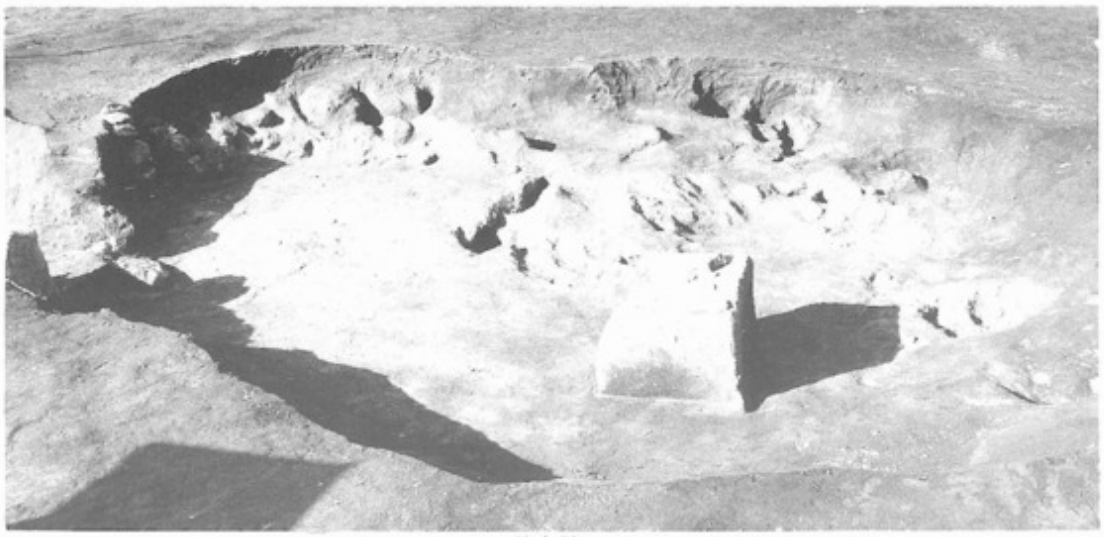
35. Ⅱ区H—16号住居址



36. Ⅱ区D—1号土坑

37. K—1号窯址

PL. 8



38. K－2 号窯址

39. K－2 号窯址煙道石組み

40. Ⅲ区 H－1 号住居址

41. Ⅲ区 H－1 号住居址 遺物出土状況

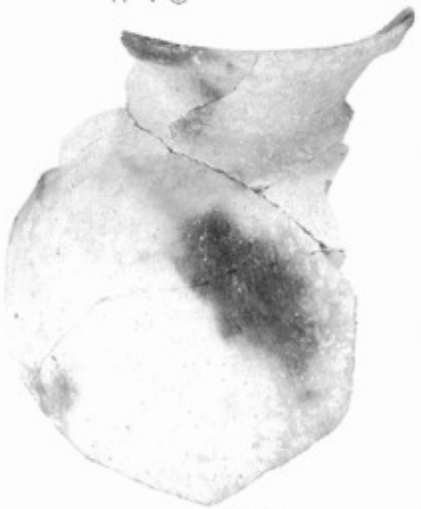
42. Ⅳ区 W－1 号溝 遺物出土状況

H−1 ①

H−1 ⑤

H−1 ②

H−1 ③


H−1 ⑥

H−2 ①

H−2 ②

H−2 ③

H−2 ④

H−3 ②

H−3 ④

H−3 ①

H−3 ③

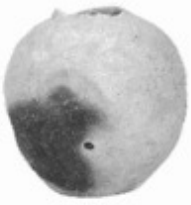
H−3 ⑤

H−5 ③

H−5 ①

H−5 ②

H−5 ④


H−5 ⑤

H−5 ⑥

II−1・2・3・5号住居址出土土器

PL.10

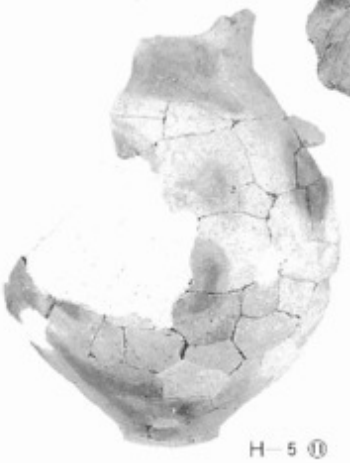
H－5 ⑦

H－5 ⑧

H－5 ⑨

H－5 ⑫

H－5 ⑩



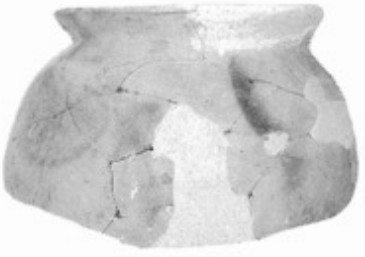
H－5 ⑪

H－5 ⑭

H－5 ⑬

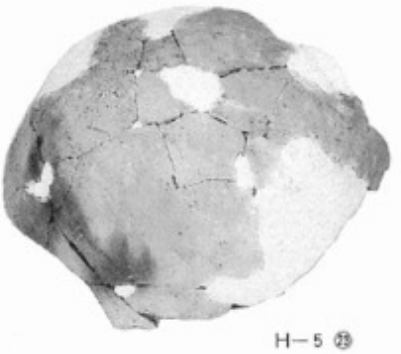
H－5 ⑮

H－5 ⑰



H－5 ⑭

H－5 ⑱

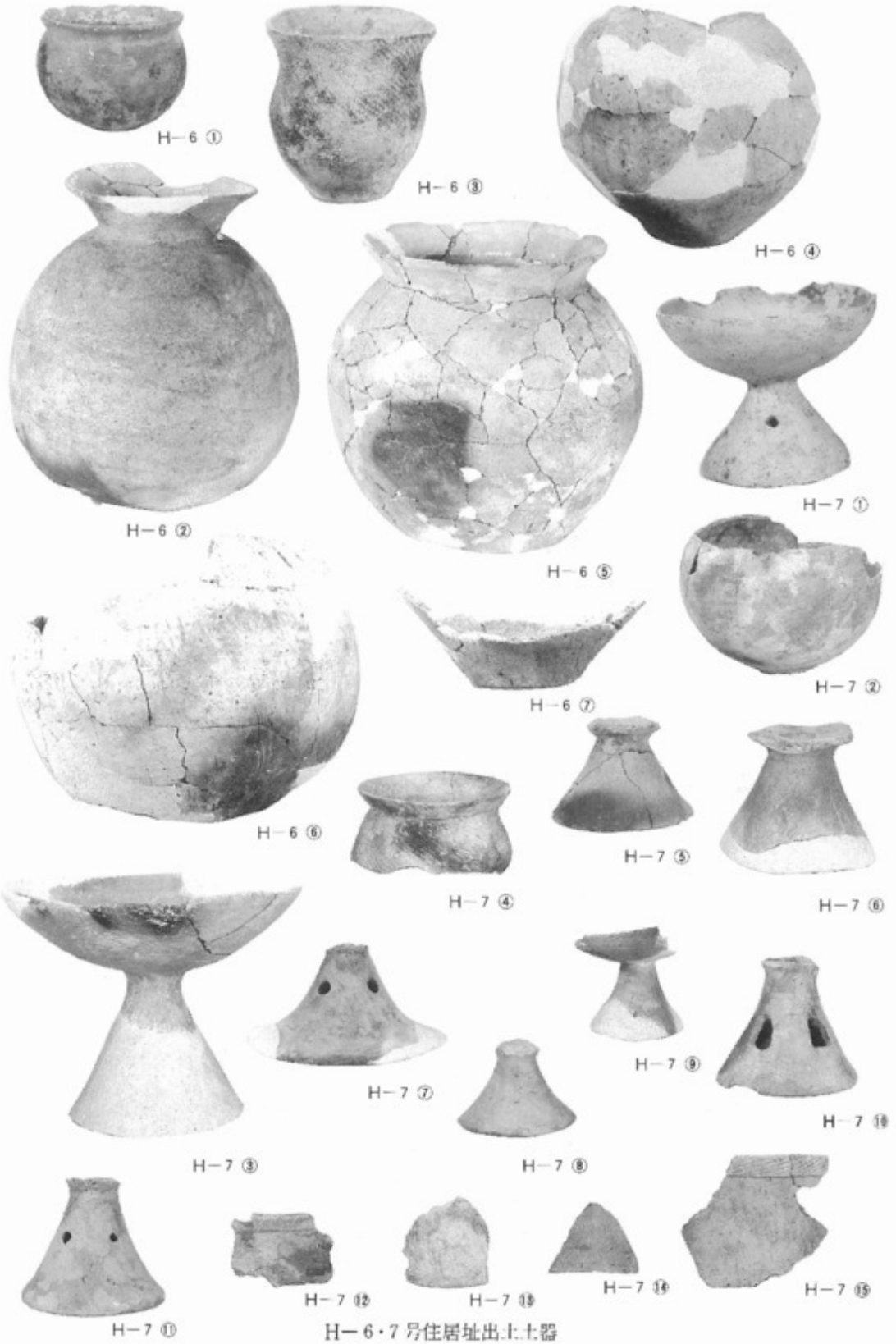


H－5 ㉓

H－5 ⑳

H－5 ⑲

H－5号住居址出土土器



H－6・7号住居址出土土器

PL.12

H－8 ①

H－10 ①

H－10 ②

H－10 ③

H－10 ④

H－10 ⑤

H－10 ⑥

H－10 ⑦

H－11 ①

H－11 ③

H－11 ②

H－11 ④

H－11 ⑤

H－11 ⑥

H－11 ⑦

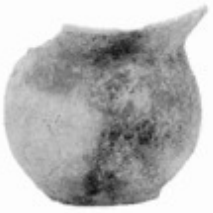
H－11 ⑧

H－11 ⑨

H－11 ⑪

H－8・10・11号住居址出土土器

H−12 ①


H−12 ②

H−12 ③

H−12 ④

H−12 ⑤

H−13 ①

H−14 ①

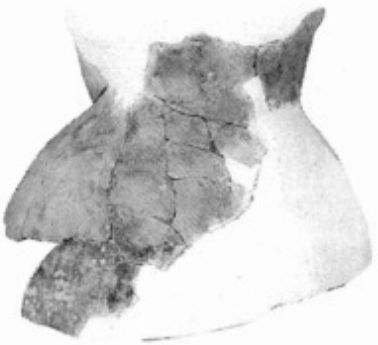
H−14 ②

H−14 ③

H−14 ④

H15G ①

H−15 ①


H−15 ②

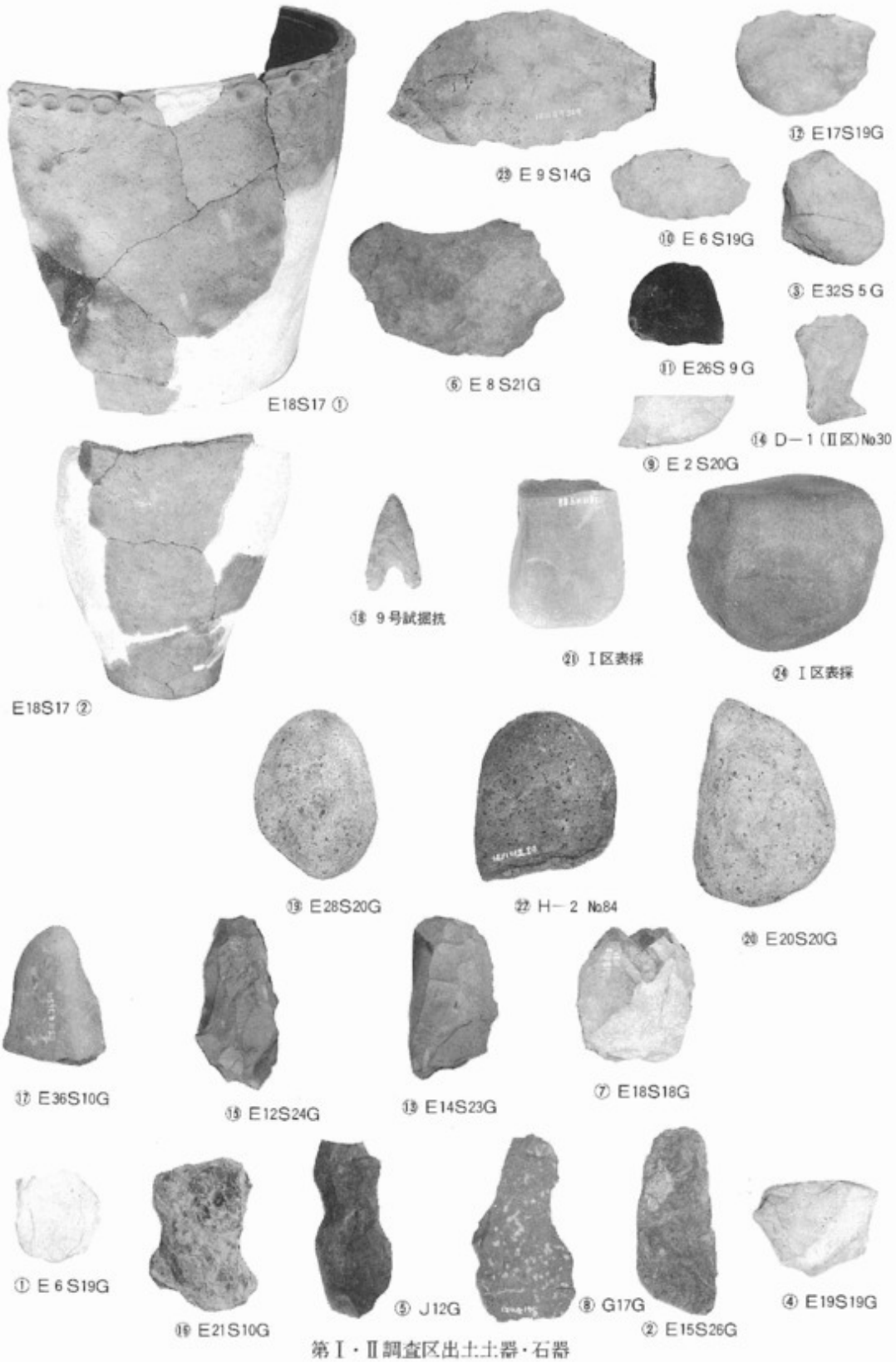
I 18G ①

D 7 G ①

W−W−1 ①

H−12・13・14・15号住居址第Ⅱ・Ⅳ調査区出土土器

PL.14



第Ⅰ・Ⅱ調査区出土土器・石器

《発掘調査参加者》

飯島勝亥	石綿信雄	小保方豊五郎	木村かく乃	木村はる子
久保千代子	久保もり子	近藤盛次	佐藤佳子	田中善四郎
橋本登代美	峰岸あや子	吉田真理子	内藤たか	主代伸治
小野明一	川島勝治	東海林アイ	川端幸子	横堀富衛
横山藤吉	品川弘美	矢作春江	伊藤孝子	竹内るり子
石関秀男	落合高男	長岡徳治	小島勝雄	佐野貴恵子

内堀遺跡群Ⅲ

１９９０年３月１０日　印刷
１９９０年３月３１日　発行
編集・発行　前橋埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664－4
TEL　0272－31－9531
印　　刷　松本印刷工業株式会社
前橋市紅雲町一丁目12－3